
朱の誓い、青の願い

青柳朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朱の誓い、青の願い

【Zコード】

Z9360E

【作者名】

青柳朔

【あらすじ】

朱に染まる」となれ、深き青よ　人ならざる青年と、生
まれ変わりの少女。これは決められた恋なのか　これは、許され
る恋なのか。運命を信じない少女は、運命の恋に落ちる。前世の鎖
はどこまで少女を縛り付けるのか　。

常盤。
ときわ。

これは呪いだよ。

永遠にとけることのない呪いだ。

おまえは私以外を愛せない。

今までも、そしてこれからも。

朽ちないその身体で恋焦がれるといい。

そうしておまえは人に近づいていけるだろう。

永遠の孤独のなかで救いになるのは今までの幸福な暮らしだけだ。
もう取り戻せないそれをおまえは求め続けるだろう。

なあ常盤。

永遠の愛なんて存在しないんだ。
存在しなかつたんだ。

だからおまえが証明してくれ。
あの世にいる私に見せてくれ。

何十年、何百年も続く恋物語を。
この私が満足するまで。

わあ、永遠の恋を始めよっ。

1：出でてと運命（1）（前書き）

2009/2/8 第1話～第3話大幅な加筆修正しました。

1・出会いと運命（一）

運命だなんて言葉、信じたことはなかった。

この世界がどんな色に染まろうとも、私は私の色を保つていられると思つてた。

青藍は走った。

ただひたすらに走った。
靴も履いていない足はもう傷だらけだ。それでも必死で走り続けた。

幸いにして月は雲に隠されている。このまま闇夜に紛れてしまえば、逃げきることができるかも知れない。

油断した、ほんの一瞬だった。

地面から割り出た太い木の根に足を取られる。青藍の両手首は後ろに縛られている。そのせいで上手く受身も取れないままに倒れた。歯を食いしばりながら痛みを堪え、顔を上げる。

ああ、とため息が零れた。

「月が」

雲から満月が顔を出す。

月光は強い光を放ち、地上を照らし出していた。隠し守ってくれるものなんてなくなってしまった。

さく、と草を踏む音が間近で聞こえた。青藍は追っ手だろうかと

嫌な汗をかき、しかしその足音は進行方向から聞こえていることに

安堵した。

「こんなところに、人か」

低い声。

地面に倒れたままで声の主を見上げる。

金色の髪、深い森の緑色の瞳、人ではないかと見紛つほどの、美貌の青年だ。

何故だろ？

上手く息が出来ない。壊れてしまうかと思うほど心臓は脈打つ。溢れ出る感情はどれも言葉にならなくて、涙だけが込み上げてくる。

「のひどが、いとおしい。

それはまだ大人とは言えない青藍には不釣り合いな感情だった。
しかしそれ以外に当てはまる言葉を、青藍は知らなかつた。

青藍には家族がいなかつた。

唯一の肉親であった母は、三年前に死んでしまつた。。

ひつそりと母と暮らした家で一人生きてきたら、突然現れた男達に羽交い絞めにされて気がつけば荷台の中、だ。

村の人間達に売られたのだと、男達に言われた。

若い娘を一人でもいいから寄越せと、この野蛮な男達に脅され、自分達の娘が可愛い村人達はもはや頼る大人のいない、村はずれに住む青藍を差し出した。

狭い荷馬車の中には、青藍と同じ年頃の女の子ばかりが乗つている。皆この人売りに捕まつて、これから物のように売られるのだ。青藍は怖いと言つて泣いてばかりいる周囲の少女達を見てうんざりしていた。

自分の不幸をこれでもかと嘆き悲しんでいる姿が鬱陶しい。この少女達は今まで恵まれた生活をしてきたんだろう。

青藍はちらりと前を見る。青藍の向かいに座る少女もまた、泣かずに蹲つていた。

鬱陶しいと感じるが、しかし他の少女達の反応が普通なのだと、青藍は思う。自分が異様なのだと。そして、つまり田の前の少女も。

「 なに

小さく問われる。知らず知らずに凝視していたらしい。

「別に、泣かないんだなと思って」

素直にそう答えると、ふん、と笑われた。

「生憎と、今まで幸せな人生送ってきたわけじゃないの。誰に買われるか知らないけど、両親に気が失うほど殴られる生活よりはましつてもんでしょう？」

無理に大人ぶつたセリフだな、と青藍は冷静に思う。

本当は泣きたいんだろうに、彼女の誇りがそうさせないのだろう。泣いていた少女達も、静かだが響くその少女の言葉に黙り込む。

わざかな間だが泣き声が止んだ。

結局は、この子も他と一緒にか。

青藍は退屈そうにため息を吐き出した。

「……人に自分の不幸を言いふらして満足？ 別に同情しないし、慰めもしないよ、私は」

目の前の少女は目を丸くして息を呑んだ。

「自分は世界で一番不幸です、みたいな顔して。結局怖くてこのまま状況に流されるだけ？ 私はそんなの『めんた』」

青藍はそう言いながらすっと立ち上がる。

手首を締め付ける縄は相変わらずだが、足は縛られていない。

少女達の乗せられた荷台の出口にはおそらく見張りがいる。しかしの荷馬車を運ぶ男は三人しかいないはず。

「じゃあね」

青藍は短い髪を揺らし、そして荷台から躍り出た。カーテンを蹴り破り、ついでにすぐ近くにいた男にとび蹴りをきます。

会話が聞こえなかつたから、見張りは一人だらうと 予想は当たつた。他の二人はおそらく川にでもいるのだろう。長旅で自然の水場は貴重だ。

「くそつ！ 待て！！」

蹴りが甘かつたせいで見張りの男がすぐに追いかけってきた。このままだと騒ぎを聞きつけて他の男達も戻つてしまつ。

捕まつたら、どうなるだらう。

たぶん殴られる。顔じゃなくて身体を。顔はたぶん傷つけないだろう。大事な商品の見栄えを悪くする奴はいないだらうから。

後ろに手を固定されたままの、走りにくい状態で青藍は暗くなつた夜の森を駆けた。

青藍の黒髪は闇によく溶ける。

走りながら葉で頬を切つた。裸足だから、足の裏はもうぼろぼろ

だ。必死だから今は痛みを感じる余裕はない。

追つてくる足音は増えていた。

駄目かもしれないなんて考えない。

青藍は、ただ走った。

昔 青藍が幼い頃に大きな街に行つた時のことだ。じぎわう町の中での、影に潜むようにひつそりと佇む老婆がいた。よく当たる占い、予言 それは重宝されると同時に疎まれていった。予言が的中すればするほど、それは気味の悪いものになつた。皺だらけの老婆に指差され、青藍は一步後退る。その背中を母親は優しく受け止めた。

「この子は面白い運命を背負つて生まれてきたねえ。呪いか、誓いか。愛か、憎悪か。どうなるかはすべてこの子次第だ」

お伽噺に出てくる魔女のような笑みを浮かべて老婆は言つ。その顔が怖いと、そう思つても田を離せなかつた。

一つだけ、忠告をあげようかね 、老婆が呟く。

「朱に染まる」となけれ、深き青よ」

1・出でてと運命（一）（後書き）

初めましての方も、こつもありがとうござますの方もいらっしゃわ。

これより青藍の物語が始まります。

最初の頃は謎の多い話となってしまいますが、よろしければビックリ

お付き合いくださこませ。
あなたの読書のひとときの、ほんのれんやかな手助けとなつますよ

う。

2・出でてと運命（2）

世界の音が消え失せた。

目が彼から離せない。

世界中で彼と自分だけになってしまったかのようだ。

愛しい切ない苦しい恋しい憎い悲しい嬉しい。

正と負の感情が一気に溢れ出るようだ。

それは相反するものの中で、実は隣り合わせに共存している。

会いたかった会いたかった会いたかった。

それはもう魂が叫んでいた。

知らない人のはずなのに、青藍は知っていた。

それを本能と言つべきか、魂の記憶と言つべきか

。

説明しようのないものではあるが、確かに青藍の中にあった。

「居たぞ！　このくそガキ！…！」

追つてきた男達の声に、青藍はびくりと身体を震わせた。

青年はただ静かに青藍を見た。

「……追われているのか？」

青年は転んだ青藍に手を差し伸べようとして、手首が縛られていふことに気づく。

静かに、奴隸か、と咳かれた。

「……どれい……？」

その言葉が頭の中で繰り返される。

違うと否定しようとして、その一方でそうかもしれないな、なんて思う。これから売られるんだ。たつた一度のチャンスを失敗してしまった今、青藍が逃げ出す好機はもう巡ってこないだろう。

「手間かせさせやがつて！ ほら立て！」

手首を縛る縄をひっぱられ、青藍は痛みを噛み殺した。悲鳴なんてあげるものか。こんな男たちに屈するなんて嫌だ。

「疲れてるつてのに走らせやがつて！」

そう怒鳴られるのと同時に、頬を殴られた。

顔は殴られないと思ったが、商品価値を考えるほど利口な頭をこの男達は持つていなかつたらしい。

口の中が切れたららしい。鉄の味がした。

青年が不快そうに眉を寄せた。

「おい、そこ。これは俺らの売りもんなんだ。何も見なかつたことにして忘れるんだな」

ぐ、と縄を引っ張られ、青藍はわずかに抵抗した。

口の中の血を吐き捨てる。一瞬、男の顔にでもかけてやろうかと思つたが、そんなことすればまた殴られるだろう。痛いのは嫌だつた。

青年は何も言わない。

ねえ、どうして？

私だよ。

忘れたの？

何故かそんな言葉が頭をよぎる。
どうしてそんな言葉が浮かぶのかと疑問に思う自分と、ただ連れ
去られる自分を傍観する彼に疑問を感じる自分とで真っ二つに割れ
る。

引きずられるようして、青年から引き離される。

「……………」

青藍は俯いたまま、小さく呟く。

月が眩しい。

夜が完全な闇だったらしいのに。

そうしたら、こんな顔見られなくて済むのに。

泣き顔なんて、誰にも見られたくないのに。特に彼には。

それでも青藍は口を開く。どうして自分がこんな行動をとるのか、
分からずに戸惑う。

「助けて 常盤ーー！」

青藍は激しく抵抗しながら、そう叫んだ。

常盤。

彼の名前を。

彼の目が見開く。

月に照らされて、一瞬だけ目が合いつ。

「……………」

常盤ーー！

もう一度、力の限り叫ぶ。

大きな手が、青藍まで伸ばされた。

常磐の手が、男の肩を掴んだ。

「ああ？ なんだよ」

男が鬱陶しげに振り返る。

青藍は涙を溜めた瞳で、青年を 常磐を、見上げた。

「その娘、売ると言つていたな」

静かで低い声。

そうだよ、ともう一人の男が答えた。その男に、青年は指輪を差し出した。大きな紅玉がはめ込まれた、一目で高価だと分かる品だ。「ならば俺がその娘を買おう、売ればかなりの額になるはずだ」

うわああ、と男達が驚いて声を上げる。その拍子に青藍は投げ出され 常磐に抱きとめられる。

そして男達はもう少しふっかけようとしたのだろう、にやりと常磐を見た。しかし常磐の圧倒的な存在感に押し負けた。

「ま、まいど」

青藍が見上げれば、常磐は男達を睨んでいた。

逃げるように男達は走り去り、青藍は呆然としてその後姿眺めるしかなかった。

「何故、知ってる」

頭上からそんな声が聞こえて、青藍は常磐を見上げる。

その端整な顔が、青藍を見下ろしていた。緑色の瞳がじっと青藍の青い瞳を射抜いて、ゆらゆらと揺れていた。動搖しているのだと、

青藍に悟られることも彼は嫌うだらう。

「……分からぬ、けど、知つてゐる」

常盤が訝しげな顔で青藍を見てきた。頭の悪い子供だと思われたのだろうか。けれど、そうとしか言いようのない感覚だった。そして気がつけば勝手に口がしゃべりだしていた。

「だつて、常盤は常盤でしょ、私がそいつをづけたんだもの。私の常盤」

何を言つてゐるんだらう、と青藍は思つ。けれど口は自動的に動いてゐるよつなものだつた。もはや脳まで、その感覚に侵食されてゐる。

しかし常盤はただ黙つて青藍を見下ろしていた。
その瞳にはどこか悲しさと、怒りがあるよつで。

「真朱」

その名前が、懐かしいと思つ。

その声には切なさと愛しさと、そして憎しみが込められてゐるようだつた。それだとこのに、青藍は常盤がいとおしいと思つ。

常盤がゆつくりと、身体を離した。

青藍は今まで完全に常盤に寄りかかっていたのだと気づいて、慌てて自分の足で立つ。

「……俺を遺し、孤独を味あわせ、おまえは転生してまた時を歩むか」

何のことか、分からぬ。

青藍は知らない。

そして常盤は何も言わずに、踵を返す。しばらくそれを見送りそうになり、慌てて後を追つた。

「待つて！」

縛られた手首はそのままだ。追いかけるために走ろうとも、今更になつて足の裏が傷んだ。

どんどん常盤との距離は広がっていく。青藍は焦り、足の痛みを堪えて走つた。

「待つて！ 常盤！」

行かないで、と言んでも、常盤は一度も振り返らずに歩いていく。

「とき、わ」

疲労と苦痛で、青藍の歩みは遅くなつていく一方だ。

いつの間にか止まつていた涙がまた溢れ出す。

もはや歩く気力もなかつた。全力疾走で逃亡した拳句、大人の男に殴られ、手首は縛られたまま。がくりと膝を突くと、もう立てなかつた。

「……ときわ」

届かないような弱々しい声で、もう一度彼を呼ぶ。

そのまま地面に倒れると、どつと疲れが押し寄せてくる。青藍は目をつむり、もうこいやと投げやりになる。

彼の側にと急かす心とは裏腹に、もつ身体は動かない。

青藍はそのまま静かに意識を失つた。

3・出でてと運命（三）

私の常盤。

そう呼んでいた女はもういない。

憎悪を生みだす呪いを遺し、一人で逝ってしまった。

久し振りにそう呼ばれて、心臓が軋んだ。

そう呼んだのは彼女とは似ても似つかない少女だ。

いとおしさで、狂つてしまいそうだった。

それも彼女が遺した呪い故だとわかっているのに。

常盤、とずつと弱々しく呼んでいた声が突然止んだ。

躊躇いながらも振り返ると、少女は草むらの中に倒れていた。小柄な身体はそのまま埋もれてしまえば、誰も見つけることができないだろう。もともと人通りのある場所ではない。

関わりたくないというのが本音だった。あるいは関わらないことが正解だろうとも思っていた。

たぶん、この子に手を差し伸べることが、彼女が用意した呪いの一部なのだろうと。

葛藤していると、少女が苦しげに唸った。

ほとんど反射的に駆け寄ると、少女は少し呼吸が荒かつた。よく見れば手足はあちこち怪我をしている。手首に巻かれた縄のせいで皮膚が擦れてしまっているし、足はとにかく傷だらけだ。膝まで葉で切ったような傷があり、足の裏は泥と血で汚れていた。まだ幼さの残る少女にはあまりにも酷な状況に、胸が締め付けられるような気がした。

この少女を守ってくれるような大人はいないのだろうか。
かつて、彼女にも誰もいなかつたように。

一度ため息を吐きだす。
もう放つておくことなんて出来るわけがなかつた。

手持ちのナイフで手首を縛りつける縄を切つた。そうすると痛々しいほどに手首が赤くなっているのがわかる。
そつと少女の身体を抱え上げる。

その身体は想像していたよりもずっと軽くて驚かされた。

「

少女が腕の中で苦しげに唸る。怪我のせいでの少し熱があるのかもしれない。

この森を抜けたすぐ先に大きな町があつたはずだ。金に糸目をつけなければ宿は確保しているだろう。祭りがあるような時期でもない。腕の中の重みとぬくもりに小さな使命感を抱きながら、常盤は進む足を速めた。

温かい何かが、額をそつと撫でてくれるような感覚。

小さな頃、寝込んだら母がいつもそんな風に撫でてくれた。

だれ？

青藍の問いかけに、その人は困ったように微笑んだ。

青藍が田を覚ましてすぐ田に飛び込んできたのは、見知らぬ天井
だった。

まだ目覚めない脳が、何も考えずにただその天井を見つめる。温
かい布団と、温かな部屋。

むくりと起き上がり、周囲を見た。

誰もいない。

あの森の中で倒れたはずなのに、とよつやく頭が働き出す。

「…………常磐？」

いないと分かっているのに、彼の名前を呼んだ。青藍を助けた人
間として、一番可能性が高いだろうと そう考えて首を振る。拒
絶されたことを思い出して泣きたくなつた。

何度呼んでも彼は振り返らなかつたではないか。

寝台から下り、窓の外を見ると町並みが広がっていた。どうやら
部屋は一階に位置しているらしい。道を行き交う人々の頭を眺める。
「どこだろう、ここ……」

雰囲気は青藍が育つた国と似ていて。村に近い大きな町はこんな
感じだったはずだ。朱色の屋根が連なつて、白い壁が並んでいる。
遠目から見ても美しいと思える統一感のある町並み。

「起きたのか」

背後から話しかけられ、青藍はびくりと飛び上がる。

恐る恐る振り返った先には 金色の髪の青年が立っていた。いつの間にかに部屋の扉が開いていた。

もう、会えないと思つていた。

「……常磐」

ほつと安堵したように青藍が微笑む。安心しきつたその顔に、常磐は居心地悪そうに眉を寄せた。

それでも嬉しかった。

彼が側にいることが、こんなにも。

「どう、して？」

少し躊躇つたあとで、青藍はおずおずと問いかける。

昨夜、常磐は青藍が何度も呼んでも振り返らなかつた。

複雑な感情が交じり合つたあの瞳で見た後、青藍を置いて行つてしまつた 青藍はそう思つていた。

「……傷だらけの子供を置き去りにするほど非情じゃない」

困つたように常磐は青藍から顔をそらし、小さく答える。

言つて自分の手足を見ると、すでに手当つされていた。手首は繩が擦れて薄皮が剥けていたのだが、薬も塗つてあるのだろうか、あまり痛まない。

「ありがとう」

真つ直ぐに常磐を見て青藍が笑う。

しかし常磐はまともに青藍を見ることはただの一度もなく、それだけが悲しい。

「着替えが置いてある。着替えたら下りて来い」

腹が減つているだろう、と言つて青藍は素直に頷く。どうやらここは宿屋らしい。一階建てで、これほど清潔な部屋であるという段階でそれなりに値の張る宿のはずだが。

常盤はそれ以上何も言わずに部屋から出て行く。

その後ろ姿を、青藍はただ見つめていた。

4・出会いと運命（4）

用意されていた服を着て、青藍は一瞬眉を顰める。

水色の、少女用の服だ。十四歳にしては小柄な青藍にぴったりのサイズだ。しかしこいつも少年のような格好をしていた青藍には、ワンピース型の服はあまり馴染みがない。

しかし汚れたもとの服を着るのは嫌だったし、なにより常磐がわざわざ用意してくれたのだからと自分に言い聞かせて袖を通す。そこで、青藍は自分の中に湧き上がる感情に首を傾げた。

どうして？

青藍はもともと、他人を信用するタイプじゃない。

母を失つてからというもの、信じられるのは自分だけだと、自分の力だけで生きていければ良いとそう考えてきた。人々との馴れ合いすら必要ないと思つてきた。

それだというのに、常磐に対してもこんなにも無条件の信頼を寄せている。

それはもう本能で、彼の側にいたいと思つ。親を慕つ小鳥のように、彼の傍らへと身体が急かす。

ことおしい、と。

そう思つ。

恋がどんなものかもまだ知らないといつのこと。

直感的に、すべての答えは魂だと思つ。

これが、幼い頃あの老婆の告げた運命だとでも言つのか。

一階は酒場で　昼間は食堂として機能していた。

カウンターに面した席に座る、常磐を見つける。大陸の東の方の国では金髪は珍しく、人ごみの中でも常磐を見つけられる自信が青藍にある。

人々はどこか遠巻きに常磐を見ていた。珍しい金髪で、あの美貌だ。近寄りがたいというのが本音だろう。

「……常磐」

呼ぶと常磐はほんの一瞬だけ青藍を見た。

そして空席の隣をほんほん、とだけ叩く。ここに座れといふことらしい。

そこには既に温かいスープとパンが用意されていた。着替えている間に注文してくれたのだろう。猫舌の青藍にちょうど良いくらいまで冷まされていた。

「いただきます」

礼儀正しくそう呟き、青藍は遅い朝食にありつく。太陽はもう真上に近いところまで昇っていた。

ちらりと常磐を見る。

彼の前には飲み物があるだけで、何かを食べる様子はない。もつ

朝食はとつただろうし、昼食には少し早いのだろう。

常磐はじつと青藍の隣に座ったまま、何も話さない。

気のせいだろうか　周囲の視線が痛い。常磐の連れというだけでこんなに注目されるとは。

「……手当て、ありがとう。服とか、靴も」

先ほども部屋でお礼だけは言つたが、改めて着替えると一式揃つていたことに驚かされる。青藍が寝ている間に買つて来たのだろうか。

「あのままにするわけにいかないだろ？」「

いいから黙つて食え、と言われて青藍は仕方なく黙々と食べる。初めて会話らしい会話をしたような気がする。

そうして食べ終わり、『』馳走様でした、と呟くと常盤が席から立つ。慌てて後を追い、自分が眠つていた部屋の隣の部屋に入る。ここが常盤の部屋らしい。

常盤はついて来た青藍に文句を言つわけでもなく、ただ一度ちらりと見ただけだ。

「名前は？」

一瞬聞き逃してしまってうなづきに静かな声に、青藍さよるとんとした顔で常盤を見つめる。

「おまえの名前だ。まだ聞いていない」

言われてそうだと気づく。

自分が常盤の名前を知っていたものだから、当然の『』とく自分のことを紹介することを忘れ去っていた。

「青藍」

青か、と常盤は小さく呟く。

そういえば、と青藍は昨夜意識がなくなる直前のことを思い出した。

常盤は確かに青藍に向かつて名を呟いた。そう、確か

「…………したしゅ、って誰？」

純粹な問いに、空気が一瞬凍りついた。

するりと常盤の腕が伸び、青藍の頬に触れる。

「　　魂は同じでも、記憶は残らないか」

それは悲しい咳きだつた。少しだけ泣きそつた瞳で、常磐は青藍をまっすぐに見ていた。青藍の中の誰かを。

「……魂？」

自分の直感にもあつた。魂が常磐を求めていると、弓を寄せられたのも、溢れ出しそうになるこの感情も。

「それ、どういうこと？ 私と関係がある人なんでしょう？ その人と常磐は知り合いなの？」

生まれ変わりなんて言葉を知らない青藍は矢継ぎ早に常磐に問いかける。ただ知るのは、心の中心が魂と呼ばれる存在だとこいつだけ。亡き母が教えてくれたこと。

「おまえが知る必要はない」

きつぱりと常磐に切り捨てられる。

「知らないのなら、知らないままの方が幸せだ。でなければ、呑まれるぞ」

何に、とは問わなかつた。

頭の中でもまたあの言葉が繰り返される。

朱に染まる」となかれ、深き青よ

つまり、真朱は青藍を侵すものなのか。

常磐がいとおしそうに見るのも、憎むのも、悲しむのも、すべてその人のことなのか。

「　　家まで送つてやる、どこだ？」

常磐がそう問い合わせてきて、青藍は首を横に振った。もう生まれ育つた家には帰れない。帰つたらまた同じような目に遭うだろう、何より村人をもう信じられない。

「親は、もういない。村人に売られて、ああなたんだから。もう帰れない」

常磐に助けてもらえないれば、今頃物のよつに売られていただろう。おそらく、他の少女達はそつなつた。

「……ならば、どこか施設に」

大きな町なら孤児院がある。もう働くことと思えば働く年齢の青藍が受け入れられるかは怪しいが。

また、引き離されるという不安に青藍は怯える。
ぎゅ、と青藍は常磐の服の裾を握り締めた。

どうして？

「側にいちゃ、駄目なの？」

強い意志で見上げた青藍に、常磐は困つたよつに淡く微笑むだけだった。

5：真朱の呪い（1）

真っ白な髪。

血色のような瞳。

それは不吉と呼ばれる色。

彼女は もはや人ではなかつた。

それでも定められた命のある生き物で、その人は時間の枠から飛び越えた自分を作り出し、最期は満足するように微笑んで逝つた。とびきりの呪いを遺して。

真朱。

おまえはどれだけ俺を呪えば氣が済むんだ？

すがるよに見上げてくる青藍を、常盤は子供をあやすような優しい手つきで、髪を撫でる。その瞳の奥にはどこか憐れみが含まれていた。

「……間違えるな。俺の側にいたいと思つ気持ちは、おそらくおまえのものじゃない」

だから側にいる必要はない。

それを望んでいるのはこの小さな少女ではないのだから。

「……それでも、私にはもう誰もいない」

青藍は捨てられた子猫のようこの、ただ常盤に縋るしかない。

常盤は後悔した。

やはりあの時、名前なんかに反応するんじゃなかった。

この子を救うんじやなかつた。これからこの少女にどんなひどい未来が待つていても、他人事だと見て見ぬふりをすれば良かつた。

それが出来なかつたのは、たぶん自分の中に真朱をいとおしいと思う気持ちが強く残つているから。

「私にもう何も残つてない……！」

ぎゅ、と固く握りしめられた手が常盤の心を揺らした。

「あなたが助けたんじやない！　あなたが拾つたんじやない！　だつたら捨てないでよ！　最後まで責任持つてよ！」

青藍自身は、何を口走つているのか分からぬのだ。

ただ必死に離すまいとしがみ付くその小さな手が愛しいと、常盤は思う。

それは青藍だからなのか　　真朱に連なる少女だからなのかは分からぬけれど。

何より青藍のセリフは　　常盤が、遠い昔に叫びたかった言葉そのものだつた。だからなおさら心が打たれる。

この小さな手を、離せなくなつてしまつ。

常盤は自分に縋りつゝ青藍を抱きしめた。その時にはもう手遅れだつたのだろう。

小さな小さな身体を、壊れないように優しく、けれど力強く抱きしめる。少年のように短く切られた髪を撫で、耳元で囁く。

この少女の中にあるものが何であろうと。

自分がどれだけ呪われようと。

「守つてやる」

それが自分の宿命であるかのよつゝ、常磐は低く呟く。

青藍は驚いて田を見開く。状況を飲み込めないまま、耳元で聞こえる囁きを聞くことしかできない。

「おまえが俺の側から離れるその時まで、どんな災難からもおまえを守つてやる」

この少女を飲み込むであろう、過去の影からおえも。もう後戻りなんて出来ない。

この子がいとおしくて仕方ない。すがり付いてくる手を振り払うことなんでもう出来ない。青藍がその壁を壊してしまったから。

常磐の腕の中で、青藍はほっと安堵したように、身をそのたくましい腕にゆだねた。

安心したのか、常磐の腕の中で眠り始めてしまった青藍を、常磐は複雑な表情で見つめた。

いつから、こうなる運命だったのかと、ため息が零れる。

「ああ、遅かったか」

いつの間にかに現れたその人に、常磐は驚くまでもなく曖昧に微笑んだ。

「……だいぶ、な」

昔からの それこそ何百年、何千年も前からの知人だ。人からすれば永久に命を持つと思えるほど長い命を持つ 神に、分類される人。

自分を作り出した彼女の知人であつた彼は、もはや自分の知人になつてしまつた。気がつけば長い付き合いだ。

「アレの生まれ変わりか……できる限りおまえとは接触させないよう気を配つていたんだが、運命を前に人も神も非力だな」

「……俺は、そのどちらでもない」

眠る青藍の髪を撫でながら、常磐は低く呟く。

「アレよりは神らしいよ、おまえは」

彼があえて名前を言わない彼女を思い出し、常盤は苦笑する。

「それは言わないほうがいいよ、東雲。彼女を喜ばせるだけだから」
常磐の言葉に、その人 東雲は、眉を顰める。

「彼女の……真朱の目的は、出来損ないの神である彼女の手で神を作り出すことだから」

そうして自分が作られた。

かつて人間だった自分に、神に等しい長い命を与えて。

「……つぐづく、不幸な男だな、おまえは」

「幸とも不幸とも言えないな。これも呪いといえばそうなのかもしないが この子に出会つた時に、身体中が痺れるほどに、嬉しかつたんだ」

青藍が、常磐の名を呼んだ瞬間。

常磐も青藍のように歓喜で胸が震えた。

長い長い間、取り残されて独りだつた。

やつと出会えた。また君に出会えた。

抱きしめたくて、名前を呼んで欲しくて、愛していると叫びたく

て

それをしなかつたのは、何千年も生きてきて培つた理性と忍耐力が成せた業だ。初めて出会う少女に向かって、まして他の田もあるといひで、そんなことはしない。

「　呪いというか、なんと言つか、捕らわれてるな、相変わらず」

ため息と共に東雲はそう呟く。

常磐は苦笑して、そうだな、と答えた。

「この嬢ちゃんも、大変だな。……おまえと出会わない方が、幸せだつたろうに」

東雲がふと視線を青藍に移し、哀れみを帯びた目で見つめた。
「彼女を嫌っていたのに、この子にはそんな優しい目を向けるんだな」

厭味のつもりで常磐が呟くと、東雲はまた常盤に目を移す。

「これと、アレは違うものだ。混同するな。魂は巡り、何度もこの世に現れる。けれど　それは前世と同じものではない。この嬢ちゃんには重い魂かもしれないけどな」

じ、と常磐を見つめるその視線には、どこか怒りも含まれていた。
「俺はこの嬢ちゃんをずっと見張ってきた　見守ってきた、と言つてももう間違いない。おまえと通り会わないようにしてきたことだが、今ではこの嬢ちゃんを幸せにしてやりたいと思えるほどに愛着が湧いている」

だから、と念を押される。

その先の言葉は、聞かなくて分かつていた。

「この子にアレを重ねるな」

6：真朱の呪い（2）

重ねてなんかいない、と。

そう断言することが出来ない自分に腹が立つた。

腕の中にある重みは真朱と同じものじゃない。眠っている少女は真朱ではない　けれど、身体は反応する。

彼女を守らうと。その彼女が、真朱なのがこの少女なのかも、常磐には分からぬ。

「　おまえが真朱に縛られ続ける限り、この子もまた縛られる。悪いことは言わない。早く手放せ。なんなら俺が引き取る」

東雲はそう言いながら青藍に触れようと、手を伸ばした。

その手を、常磐は無意識に振り払つ。

そのことに、東雲だけでなく常磐自身も驚いた。

「……本能だな」

そう呟いて東雲が苦笑する。

そして常磐も悟る。

この小さな少女に縛りつかれたその時から、もう手放すことは不可能なのだと。もしかしたら、青藍が常磐を呼んだあの時から。

「　すまない」

常磐は青藍を抱えなおしながら、東雲にそつ言ひ。

ベットに寝かそうかと考えて　止める。腕の中の重みがなくなることが寂しいと、そう思つた。青藍を抱え続けることくらいは苦にならない。

「気づいているんだろう？　常磐。おまえが真朱を愛していたのは、まやかしだと。真朱によって作られた感情に過ぎないと。おまえは今、真朱を恨んでいる」

東雲の言葉が常磐に重くのしかかる。

あの頃の世界で、常磐にとつて真朱は絶対だった。

常盤は真朱の所有物に過ぎなかつた。

真朱にとつて常盤は長続きする玩具でしかなかつたのかも知れない。野望を叶える為の道具でしかなかつたのかも知れない。それでも、いつからか常盤は真朱を愛し始めた。

不器用で、強がりな神様を愛していた。

しかし今は

「ああ、恨んでるよ

彼女が最後に遺した呪い。

長い長い時の中で、常盤はずつと独りで生きていく。
真朱との甘い思い出だけを胸に。

何度も死のうと思つただろう。しかしそれも、真朱の言葉で遮られる。頭の中で繰り返し繰り返し常盤を呪い続ける。

生きると、生き続けると。

そのことに気づいてから、真朱に対する愛情は憎悪へと変わつた。どうしてこんなに苦しまなければいけない？ どうして彼女の野望のためだけに 他の神々を見返すために、神でもない自分がこんなに長い時を歩まなければいけない？

本来人間だつた常盤にとって、その時間の長さは拷問だった。

「 恨んでいる。けれど、同時にまだいとおしい」

散々彼女を憎み続けた日々も、長く續けば鎮静化した。

そうして穏やかだつた日々を思い出せば、自然といとおしさが蘇る。ここ数年は、その相反する一つの感情に悩まされ続けてきた。

「……真朱を憎む気持ちは分かる。だがこの子を傷つけるような真似だけはするな。俺は見ているからな」

念を押すような声に、常盤は苦笑した。

青藍に対しても複雑な感情しか浮かんでこない。

魂が再び巡り巡つて、こうして出会えたことに喜んでいるのに、

真朱がまた新しい人生を歩めることに憎しみが募る。

「いっそ、側で見張つていってくれた方が楽だ」

自分がこの少女を傷つけないよう」。

「今は、その時じゃない」

青藍はまだ真朱についてほとんど知らない。知らせていないから。それなのに突然神様に分類されるような者が現れたら 混乱する程度ではすまないだろう。

「もうアレは死んだんだ。その子はまた別の存在。割り切れば簡単なことだぞ」

それがなぜか自分にとつては難しいことなどだと、常磐は苦笑するしかなかつた。

夢の中で青藍はただの傍観者に過ぎなかつた。

「ねえ 生きてるの？ 死んでるの？」

夢の中には真っ白な髪の少女 年頃は青藍とそつ変わらない。
しかしその少女には年相応の雰囲気がなかつた。

少女は森の中で倒れている青年を見下ろして、無邪気にそう問い合わせる。

倒れている青年が常磐だと 青藍にはすぐに分かつた。

常磐の腹部からは溢れるように血が流れていて、顔は蒼白だった。駆け寄りたいという衝動に駆られるのに、青藍の身体は一人の上空を漂うばかり。

常磐の瞳が、少女を捕らえた。

くすくすと少女は笑う。その声が不気味だと青藍は思つた。今にも死んでしまいそうな人を前に どうして笑えるのか。

「まだ生きていたのね。このままじゃ死んじゃうけど。 ねえ、死にたくない？」

当然の質問に、常磐は睨みつけるように少女を見た。声を出す力はもう残つていないのでかもしれない。

常磐。常磐。常磐。

青藍は届かない手を必死に伸ばした。

助けたい。何の力にならないかもしねくとも、常磐を助けたい。

「いいわ、その日。気に入った。助けてあげる。けれど、その代わりあなたはその全てを私に差し出しなさい。あなたは私のもの」少女が常磐の顔を持ち上げて、不敵に微笑む。その少女を、常磐は残る気力で睨みつけていた。

生きたいと願う意思と、この少女に屈することを拒む心

常磐

の中ではその色々なものが交じり合っているようにも感じた。

少女の顔と、常磐の顔が重なり合つ。否、重なったのは、唇だ。青藍は息を呑んだ。常磐から流れていった血が、みるみるうちに止まつていく。蒼白だつた顔は、青藍の知る常磐とまるで変わりないまでに色が戻つていく。

常磐が無理やり少女を引き離した。

それだけの力が戻つたのだと、行動で分かる。先ほどまでは指一本動かすことすら難しかつたはずだ。

少女はくすくすと笑い、そして咳く。

「あなたの名前はたつた今から常磐よ、この私がそう決めた」
常磐は　たつた今そつそづけられた彼は、ただ少女を睨みつけていた。

「おまえ、何者だ」

低く問う。

少女はああ、忘れてたわね、と咳く。

「私は真朱よ、天にも地にも嫌われた、出来損ないの神様」

真朱。

その名前を、青藍は知つてゐる。

7：真朱の呪い（3）

神様。

青藍がこの世で最も信じていないもの。
青藍がこの世で最も嫌いなもの。

だから、真朱の言葉を聞いても、ああそつかとしか思わない。
会つたこともない、たつた今その姿を目にした真朱を、青藍は
憎いと思つ。それも真朱が神様だからかな、と思つ。

妙に納得した青藍が浮上する。

意識が今いる場所とはまた違つ場所に繋がる。

ああ、目が覚めるんだ、と冷静な自分が呟いていた。

目を覚ますと。そこには常磐の姿がある。
それが何物にも変えがたいほどに嬉しくて、青藍は微笑んだ。

「ときわ

手を伸ばし、常盤の頬に触れる。

どうした、と静かな声が聞いかけてきた。まるで膜でも張ったよ

うなぼんやりとしたその音に、まだ寝てゐのかなと青藍は寝ぼけた。

白い髪に、赤い瞳の少女。

本当に夢だつたんだな、と氣づいてほつとする。常磐が怪我をしていなくて良かったと。

そして同時にあれはいつか 遠い昔にあつたことなんだりつと、頭が勝手に理解していた。

「ときわは、ときわのものなんだからね」

寝ぼけたまま、青藍は思つたことを口にする。

生まれたその時から、その人はその人のものだと。そう母に教わつた。青藍にとつて母から教わつたことは絶対だつた。

だから青藍は微笑みながら常磐にそう話しかける。

常磐は頬に触れる青藍の手を握り締めて、何故が今にも泣き出してしまいそうな顔になる。その常磐を慰めたくて、青藍は必死に言葉を探した。

「……ときわ？ 常磐？ デリしたの？」

寝ぼけていた頭がようやくはつきりとした思考を始めた。それだとこつのに、常磐にかける言葉が見つからない。なんて役に立たない頭だらう。

「……悲しいの？」

常磐に抱えられたまま眠つていた青藍は、常磐の顔を見上げることしかできない。常磐は顔を覆い隠すことなく、泣き出しそうな顔のまま青藍を見つめた。

「大丈夫だ、なんでもない」

なんでもなくない、と そう言おつとした青藍は常磐にきつく抱きしめられた。骨が軋むほどに、強く、それは優しさの欠片も存在しない抱擁だつた。

「とき、わ？」

眠る前に抱きしめられたのとは違つ。その時も抱きしめる力は強

かつたけれど、息が出来なくなるほど苦しくはなかつた。

けれど振りほどいとは思わなかつた。たぶん、常磐も苦しいん

だと、青藍はぼんやりと思ひ。

苦しくて苦しくて、それを慰めてくれる人も、いなかつたんだわ。

「のひとがいとおじい。

常磐といて思い浮かぶのはそんな言葉ばかり。

どうして、と聞かれると分からないと答えるしかない。青藍の思いではないのかもしない、とそこで冷静に考える。

それでも、今常磐を慰めたいと思ひのは、間違いなく青藍だ。

だから青藍は細い腕を常磐の背中に回し、同じように抱きしめる。

「大丈夫だよ」

側にいるよ。

もう、独りにさせないよ。

だから、もう大丈夫だよ。

そんな思いを込めて青藍は静かに呴く。

青藍の肩がしつとりと濡れたことには、気づかないふりをしておいた。

そう長い時間ではなかつた。ゆっくりと常磐が青藍から身体を離し、顔が見られたくないのかすぐに後ろを向いてしまつた。

泣いたなんて、気にしないの。そんなことを思いながら、そう指摘されるのは常磐が嫌がるだろうと、青藍は後ろを向いてしまった常磐の背中に、自分の背中を合わせる。ソレしていれば、顔は見えない。けれどお互いのぬくもりは伝わる。

「……夢を、見てた」

話すことがない青藍が、ぽつりと呟く。

返事がないことは気にしなかった。

「常磐が、たくさん血を流して倒れてた。助けに行こうとしても、いけなかつた」

自然と身体が震えた。青藍は怯えたように後ろを振り向き、そこに常磐がいるのを確認する。背中越しに伝わる体温は温かい。

「そこに、白い髪の女^{ひと}が出てきて 笑つてた」

びくりと、常磐の動搖が青藍にも伝わる。
やはり現実にあったことだったのだと、青藍は確信した。
振り返れば、驚いたように常磐が青藍を見つめていた。
青藍は妙に冷静なまま、言葉を続ける。

「その女は、真朱と名乗っていた。ねえ、常磐」

常磐の瞳が、その先を聞くことを拒むようになっていた。
それでも青藍は続ける。たとえこの先、朱に呑まれようとも。

もう、後戻りは出来ない。したくない。

「真朱は、何者?」

8・真朱の呪い（4）

青藍の言葉に、逃げ込むような隙はなかつた。

ただじつと見つめてくる瞳は、どこまでも青く、海のようでもあり、空を映し出したかのようでもあつた。

まっすぐな青藍の視線に、常磐は怯えたように瞳が揺れていた。それが分かつても、青藍は常磐を見つめ続けた。

これ以上に言つことはないから、何も言わない。けれど常磐を逃がすつもりはなかつた。

随分と長い間沈黙が続き、常磐がひとつため息を零した。怯えた瞳は本当に一瞬で、今青藍を見る彼はいつもと変わらない強さと優さがあった。

そんなに、と低く呟いた。

「……知りたいか？　自分の過去が」

青藍は何も言わずに頷いた。

「普通なら知らない、知らないまま過ぎ」すばすの過去だとしても？」

もう一度頷く。

常磐がため息をまた吐き出した。

「……いざ話すと、簡単すぎて笑えるな」

それが始まりだったんだろう。瞬きする間も惜しく青藍は常磐を見つめる。

「……真朱は、人神と人の間に出来た禁忌の子だ」

人神？　と青藍は聞いたことのない単語に首を傾げた。

「天にいる神とは違う、地上に……人の近くに寄り添う神のことだ。街に住んでいる人神は少ないが、人里離れたところには結構多い。

もともと、人と神との婚姻は長きに渡り禁じられていた。だからだらう。最近では人に近づこうとする人神も少ない。昔は、それこそ人間にとつて良き隣人だったんだが

知恵を与える、人々を見守る、そういう存在だった、と常磐は説明を付け加える。

「人神と人が恋に落ちた。その事実が存在しなかつた頃は、人神は人と共にあった。けれど真朱の親がそれを覆した。恋に落ちる時は落ちるのだと、人神も気がついてしまった。だから自分達も同じように入を愛することを恐れ、人々から距離を置いた」

村や街に住んでいた人神は徐々に減り、今では人神という存在を知る人間は少ない。知っていたとしても、伝承や伝説の一部となつてしまつた。

「人神の過ちの象徴　だから、真朱の存在は天の神にも、人神にも疎まれていた」

人よりも長く生き、神と同じ時を歩めない。そういう存在だった、と常磐は懐かしむように咳く。

「だからずつと彼女は独りだった。人より長く生きる分、人間の社会には馴染めない。けれど神々からは迫害される　真朱のことを知る人間がいなくなつた頃には、人間も彼女を迫害し始めた。化け物と呼ばれて」

びくり、と青藍の身体が震えた。知らないことははずなのに、震え始めるとそれは止まらなくなつた。

怖い、と心の奥底から何かが叫んでいる。

常磐は青藍の震えに気づき、立ち上がると、青藍の身体を抱きかえ、そのままベットに腰を下ろした。青藍は常磐の太腿に座り、胸にもたれる形になつて、話が続けられる。

不思議と、震えが治まつた。

「おまえは、真朱であり、真朱とは違う。真朱が天寿を全うし

その魂が巡り巡つて、行き着いた先がおまえだつた……分かるか？

青藍は小さく首を振つて、常盤を見上げた。

常盤は苦笑して、青藍の髪を撫でる。

「生き物には魂がある。それがすべての源だ。それは分かるな？」

「……母さんに教わった」

小さく答えると、常盤がそうか、と答える。

「生き物の死はつまりその器の　肉体の死を意味する。つまり魂は死ないんだ。魂は長い時をかけて次の肉体に移り、そしてまたこの世に誕生する。それを生まれ変わりと言つんだ」

常盤の言葉を一つ一つ飲み込んで　青藍は問う。

「つまり、私の魂が、前に宿っていた人が真朱？」

「ああ。おまえが見た夢も、たぶん魂の記憶だらう。普通は、そういうのは残らないものなんだがな。神の生まれ変わりなんて聞いたことないから、ありえないことでもないのかもしれない」

青藍は真朱を思い出す。

真つ白な髪に、真つ赤な瞳の少女。たぶん彼女は死ぬそのときまで、あの姿だったのだろうと思つ。

血を流す常盤を見て、楽しそうに微笑む。あの歪んだ口元を思い出して、青藍はぞつとした。

「　いや」

それは自然と口に出していた。

小さなその声を聞き取れずに、常盤が青藍の顔を覗き込もうとする。その視線を避けるように、青藍は深く俯いた。

「嫌だ。あんな人の魂いらない」

静かに、だがはつきりと青藍は拒絶の言葉を口にした。

青藍の身体が震えだす　恐怖ではなく、怒りで。

「だつてあの人は傷ついた常盤を見て笑つてた！　玩具を見るみたいな目で見てた！　そんな人の魂なんて必要ない！」

あの場にいたのが自分だつたら、と何度も願うだろ？

常磐を救つたのもまた彼女であることに変わりはない。けれど同時に、常磐に大きな苦痛を与えたのも彼女なのだ。

青藍は無意識のうちに自分の一の腕に爪を立てた。魂を傷つける方法があるのならいいのに、と心のどこかで思う。

「やめる。自分を傷つけるな」

常磐が青藍の手を掴み、自傷行為を止める。

駄々をこねる子供のように、青藍は首を横に振った。

「真朱なんて嫌い！　自分の中にある人と同じものがあるのも嫌！」「あんなに残虐な一面が　もしかしたら自分にあるのかと思うと、それだけで恐ろしい。

常磐の大きな手が青藍の手を優しく包み込む。そのぬくもりが痛い。

「　それでも、おまえと俺が巡り会ったのは彼女のおかげだ」

ぴた、とその言葉が青藍の動きを止める。
泣き出しちくなつて、青藍は顔を歪めた。認めたくないのに、認めざるを得なかつた。

「おまえが真朱の生まれ変わりだつたから、こうして側にいてやれる。あの時おまえが俺の名前を呼ばなかつたら、たぶん俺はおまえを助けなかつただろう」

そんな言い方するい。

青藍はどれも否定できない。

常磐に巡り会えたのは紛れもなく自分の魂が彼を求めていたから。

魂の奥底で叫んでいたのは 真朱であるとしか思えないから。

「……俺のために、怒ってくれてありがとう」

そう微笑む常盤の顔が、青藍はとても痛々しく見えた。

9：一人なら

身体が傷ついたのは青藍なのに、心が傷ついたのも青藍なのにひどく傷つけられたような顔をして、常磐が立ち上がった。

もう一度、よく考えると、そう低く呟いて常磐はそのまま部屋から出て行ってしまった。

常磐と一緒にいたこと、そう願うのは青藍の中に眠る真朱も同じなのだ。つまり今この行動が、真朱が影響してのものかどうかなんて定かではない。

呑み込まれる。そんな言葉が重みを増して青藍にのしかかった。

それでも常磐と共にいるか。
別れを選ぶか。

常磐は青藍を思つて、もう一度チャンスをくれているのだ。

血ら爪をたてた腕がひりひりと痛んだ。

時間感覚が鈍くなるほど、青藍の脳は考えることを止めていた。何かを考えるといつその行為でさえ、真朱の影がちらつくようで怖かつた。

長い間、部屋の中に一人きりで、青藍の時は止まっていた。

「…………ときわ」

無意識のうちに、常磐の姿を求める。

側について、側について、と心が訴え始める。それは紛れもなく青藍の心だった。

そうだ。

あの夜、常磐を呼び止めたのは真朱かもしれない。
けれど、走り出したのは。

あの荷馬車から逃げ出して、傷だらけで走り、常磐を見つけ出したのは青藍だ。

真朱と重なり合った感情や行動の中に、確かに青藍の意思はあるのだ。

そう気づいた途端、青藍は部屋から飛び出していた。

宿屋の一階に常磐の姿はなかつた。

もしかしたら、と宿屋の主人に常磐のことを尋ねてみたが、首を横に振られた。行き先も告げていらないらしい。

待つていれば帰つてくるだろうと、そう安心なんて出来なかつた。

青藍と常磐の関係はいつも危つい。

繫がつてゐるようで繫がつていいない細い糸のようなものだ。いつ

でも、どちらからか簡単に切ることができてしまう。

夜の街は昼間の賑やかさとはまた違つた華やかさを持っていた。
すれ違う人々は皆誰かと一緒にいるのに、青藍は一人きりだ。

「 常磐」

呼ぶ声は周囲の雑音でかき消されてしまつ。

青藍は不安そうに周囲を見回して、あの金色の髪を捲す。昼間ならすぐに分かるのに、夜闇に呑まれたそれは、なかなか青藍の瞳に映らなかつた。

「 常磐」

今度はさきほどよりも強く、名前を呼ぶ。

泣き出しそうになるのを堪えて、青藍は何度も何度も常磐を呼んだ。

迷子になつたみたいだ。頼れる人なんていない。母親が死んでからずっと一人で生きてきたといつに、今更どうして常磐がいなければ駄目だなんて思うんだ。

一人でも人は生きていける。そう信じていたのに。ぬくもりを感じたその時から、もう離れられない。

「……ときわ」

こんなにも常磐が愛しいと思うのは、たぶん真朱も一緒。求めてやまないのはたぶん、青藍と真朱の、二人が彼を必要としているからだ。

根本的なところで、青藍と真朱は同じなのだ。

「夜に、一人で出歩くな」

歩き疲れて、道の端で座り込んでいた青藍の頭上から、優しく、そしてどこか苛立つたような声が降ってきた。

顔を上げれば、そこには金色の髪が輝いていた。月なんか霞んでしまつくらいに、青藍には眩しく見えた。

「常磐」

躊躇いもなく常磐の首にしがみついた。一瞬バランスを崩しかけた常磐も、青藍の背中に手を回しその華奢な身体を支える。

「側にいたい。側にいて。確かにそれは真朱の願いもあるけど、私の意志もあるよ。私は私の意志で、常磐と一緒にいたい

堪えていた涙が今更溢ってきた。安堵に身体の力が抜ける。

「それで、いいのか」

躊躇するような常磐の声に、青藍は迷いなく頷いた。

ふう、と呟れたのか、安心したのか どちらとも分からぬため息が耳元で聞こえた。

「戻るか」

そう短く言つと、常磐はそのまま青藍の身体を抱きかかえた。これではまるで子供のようだと 片手で軽々と抱えられてしまった青藍はふて腐れる。

夜の街の賑やかさが、今はもう怖くない。

行き交う人々に奇妙な目で見られることも気にならなかつた。西洋の男に抱えられた、東洋の少女。傍目からすれば確かに奇妙な取り合わせだ。

「 どこへ、行きたい？」

常磐の問いに、うん？ と青藍は首を傾げる。

「 もともと、根無し草みたいに適当に旅してきたからな。次に行く先も決めてない。おまえはどこに行きたい？」

どこへ、と問われても、青藍にはすぐに思いつかなかつた。

青藍の世界はそれまでとても小さくて、自分の住む村と、その周辺の森だけが彼女が生きていく上で必要な場所だつた。

どこにどんな国があるのかも、この世界がどれほど広いのかも、青藍は知らない。

「 どこでもいいよ。常磐がいるなら」

青藍にとつて重大なのはそれだけだ。

「 寒いのと暑いのと、どっちがいい？」

「 寒いのは平氣。暑いってどのくらい？」

「 吸い込む空氣すら熱く感じる場所もある」

想像してみて、青藍はづわ、と呴く。北の方に住んでいた青藍には耐え難い気候だろ？

「 それは、まだいいかな」

たぶん耐えられないと思つて、と感へて、常盤が苦笑しながら同意した。

「どうあえず、これから決めればいいか

時間はいくつでもあるからな、とこの常盤の言葉に、青藍は頷く。

一人でいられるなら、どんな場所でも良かった。

一人でいられるなら、どんな場所でも幸せだった。

共にいるだけで幸せだと、そう思えた。

青藍と常盤が一緒に旅をするようになつて、三ヶ月が経とうとしていた。青藍が暑さに弱いだろつとこう考えから、一人はただ北上している。

村の外、というものを知らない青藍にとっては先々で見る景色のどれもが清新しく、きょうろきょろと忙しなく首を動かしているのが最近の光景だった。

北上しつつ、西へと向かっているため、黒髪の人間が徐々に少なくなり、代わりに色鮮やかな髪の人を多く見るようになつた。燃えるような赤い髪、常盤のそれのように輝く金色 瞳の色も様々だ。

「このまま進めば、アラガルドの街に着くな」

常盤が太陽の位置を確かめて、そう呟いた。

「あらがるど？」

横文字には相変わらず慣れていない青藍が、首を傾げて問い合わせる。常盤は青藍を見下ろし、柔らかく微笑んだ。最近よくこういう表情を見る。

「西と東のちょうど中間にある国、交易都市だ。今までおまえが行つた街のと比べ物にならないほど広い。迷子になるなよ」

「ふわ、と髪を撫でられて青藍はむ、とする。

「子供じゃないんだから、平氣だよ！」

大人、とは言えないかもしれないが、人ごみの中で迷子になるような年ではない。常盤は基本的に青藍を子ども扱いする。それもかなり幼い。

「気をつけろと言つてるだけだ。もしそうなつたら宿屋に戻れよ。

正直治安はそれほど良くないからな

「言われなくても分かるつてば……」

そんな初步のところから教えられる」とばかりなので、青藍はこの頃抵抗する」とすら面倒になつてくる。確かに旅をするにあつて、世間知らずだった青藍にあらゆることを教えたのは常盤だが、それと一般常識とでは違つ。

これでも青藍は母が亡くなつた後、一人でどうにか生きてきたのだ。一般常識という分類では同じ年の子供より上であると主張したい。

それが無駄であるとも分かつてるので、もう何も言わないのだが。

「それに、会わせたい奴もいる」

そう言いながら差し出される手を、青藍は当たり前のもののようにとつた。大きな手が小さな青藍の手をぐるりと包み込む。

「誰？」

「会えば分かる」

たぶん、と付け加えられ、青藍はただ首を傾げた。特に興味もなかつたので、青藍は追求もしない。

ただ握り締められる手のぬくもりに甘える。

ほどなくアラガルドの街に着き、握り締めた手を離さなかつた。本気で迷子になりかねないほどの人の量に、青藍はただ呆然としていた。

常盤の忠告になるほどと納得し、そして

まさか、この年で迷子になるとは思わなかつた。

本気で離れたら終わりだ、と思っていたので、繋いだ手は意地でも離さないつもりだった。

しかし人込みの中、ずっと手を繋いだままにいるということは困難で、波に飲まれたと思った時には、手のひらにぬくもりはなかった。

「常盤ー。」

以前なら見つけやすかつた常盤の金色の髪も、常盤が言っていたように、このあたりではもう珍しくなかつた。金の髪の人はさきほどから何人もいる。西と東が交わるところとこうだけあって、黒髪もちらほらといふから常盤からも探しにくいだらう。いくら呼んでも、常盤の姿は一向に見当たらない。

旅に慣れてきたとはいえ 見知らぬ街に独りでいれば、どうしようもなく不安になる。

「……常盤」

子供のような情けない声しか出なくなつてきた。呼んでも常盤は見つからない。

小さな頃、同じように街で迷子になつたことがある。

泣くだけ泣いて、途方に暮れていたところ見つけ出してくれたのは母親だった。

遠くから聞こえた自分を呼ぶ声に心の底から安堵したのを覚えている。

止まっていたはずの涙がまた溢れ出して、母親に抱き付いて離れなかつた。そこだけが、自分が安堵できる場所だとでもいうように。懐かしさと不安がこみ上げてきて、青藍は泣きそつとなつた。

涙を堪えていると、どこからか嫌な視線を感じた。少女が街中で一人でいることは、やはりどの街でも危険だった。特に活気溢れる街ほど、そういう輩はいるもので。

『それほど治安が良くない』と言った常盤の声が甦る。そう古くない記憶が呼び起こされた。もしまだ人売りに捕まれば、どうなってしまうのだろう。

そんな不安を顔に出さないようにしながら、青藍はただ常盤を探した。

しかし見知らぬ気配が複数、近付いてくることに青藍は身体を固くする。

嫌だ。来ないで。

震える青藍の肩を支えてくれる人は、今はいない。

「……まったく。アレは何してるんだ」

背後からの知らない声。しかしそこに危険を感じなかつた。

恐る恐る振り返った先にいたのは、少し濃い肌に赤茶の髪の青年、で合っているのだろうか。見た目に合わない雰囲気を持つ男だった。

「……だれ？」

随分と身長差があるので青藍は首が痛くなりそうなほどに男を見上げる。

「常磐の知り合い……と言つておいで。アレには近付くなと言われたんだが、まあ非常事態だしな。そもそも目を離したあいつが悪い」「ぽんぽんと頭を叩かれ、不思議と安堵する。そしてこの男から感じる違和感に首を傾げた。

しかし青藍の優先事項は圧倒的に常磐が上で。

「……常盤はどう？」

青藍の言葉に、東雲は苦笑した。

優しい手は青藍のまっすぐな黒髪を撫でて、まるで我が子を見つめるような温かな瞳が青藍の不安げな姿を映していた。

「そろそろ来る」

気配が近づいているから、と言われて青藍はほつとしたように微笑む。

そして宣言通り、常盤が人込みを搔き分けて青藍のところまでやつて来た。息を切らしているその様子から、彼も必死で探してくれたんだろうと想像がつく。

「常盤！」

青藍は常盤の胸に飛び込んで、幼い頃に戻ったかのように、その腕の中で少しだけ泣いた。

常盤も青藍の不安を拭い去るよう丁寧に強く抱きしめてくれる。その力強さが今は心地よい。

「これから、一人になることをこんなにも恐れるよつになつたのだろつ。

母が死んでから、ずっと一人だつたのに。

いつからこんなにぬくもりに甘えるよつになつてしまつたんだろう

う。

たぶん常盤のせいだ、と青藍は思つ。

常盤は青藍を甘やかすから。

側にいたい時に側にいて、青藍に優しくするから。

甘える青藍を拒むことがないから。

たぶんもう、青藍は一人ではいられない。

11・人と神（2）

人目も気にせず、青藍はしっかりと常磐に抱きつく。人ごみのなか、そんな二人を気にする人もそういない。

「言つていただろ、おまえに会わせたい奴がいると。それがこいつだ」

青藍の肩を抱いたまま、常磐が青藍助けた青年を紹介した。

青藍はその動きにつられるように顔だけ振り返る。

「東雲だ」

柔らかく微笑む東雲は、やはり青年というのにはどこか違和感があつた。老獴という言葉で片付けられるといえばそうなるかもしねいが。

「青藍です」

名乗られた手前、青藍も常磐から離れ、行儀よく挨拶をする。

「ああ、知ってる。生まれたときから」

東雲は笑いながらそう言つた。青藍は意味が掴めずに首を傾げ、常磐を見上げた。

「わからないか？」

常磐が面白がるような口調でそう青藍に問う。そんなこと聞かれても、と青藍は困惑し、そして違和感の正体に気づいた。

東雲から感じるのは夢の中で感じた、真朱のものとともに良く似ている。
つまりそれは

「……人神？」

天上の神より人に近しい、地上の神々。

当たりだ、と常磐が青藍の髪を撫でた。真朱と共に暮らしていたことのある常磐が、人神との付き合いがあるとしても不思議はない。青藍は素直に納得した。

「……東雲様は、真朱とも親しかつたんですか？」

神と名乗られた以上、敬意を払う必要があると青藍は東雲を様を付けて呼ぶことにした。真朱には敬意なんて言葉すら浮かばない。

「いや。アレは人神と交流はなかつたよ。嫌われていたからな。神という名のつく者達に」

「…………東雲様、もですか」

問うこと躊躇したような青藍の言葉に、東雲は苦笑した。

「例外はないさ。アレも神を嫌っていた。憎んでいたとも言えるな。俺はこいつと知り合うことがあつただけだ」

だから、他の人神よりはあいつに詳しい、と東雲は呟くように言った。

そこまで話をして、青藍は一つのことに気がついた。東雲は、ただの一度も真朱の名前を口にしない。まるで口にすれば汚れてしまうかのように、その単語を避けてる。

青藍も真朱は嫌いだ。けれど、少しだけ同情してしまうのは、欠片でも真朱の残した何かが青藍の中にあるからだろうか。

彼女はたぶん、人にも神にもなれず、孤独だつたんだろうなんて、そう憐れんてしまつほどには、青藍は真朱を完全に嫌悪できなかつた。

「では、私のことも目障りなのではないんですか？」

青藍の問いに、東雲は驚いたように目を丸くした。青藍は特に気にした様子はなく、ただじつと東雲を見つめている。

東雲の大きな手が青藍の頭を優しく撫でた。苦笑しながら、それないと東雲が答える。

「生まれ変わればもう別のものだ。混同するほど俺は愚かじやない。おまえが生まれたときからアレの生まれ変わりということで監視はしていたがな、それはもう今となつては監視ではなくくなつてしまつ

たよ。わざわざ嫌つてゐる人間の前に姿を現すほど、暇でもないしな」

随分とひねくれた言い方だが、つまりは嫌われていないといふことなのだろうかと、青藍は首を傾げる。

「つまりはおまえが可愛くて仕方ないってことだよ」

常磐が笑いながら付け加えてくれる。

そう言われても、青藍からしてみれば奇妙で仕方ない。初めて会つた人に可愛くて仕方ない、なんて告白されても反応に困る。無条件で自分を好いてくれる人なんて、母親以外にはいなかつたのに。

自分が知らないだけで、ずっと青藍は見守られていたなんて。

「常磐に近づくなと念を押されていたからな、今まで余つことは出来なかつたが

「なんで？」

別に害があるわけではないだらう」と青藍は常磐を見上げて問う。

「混乱するだらうと思つたからさ。そもそも言つてられなくなつたが」青藍は分からずになりますます首を傾げる。そんな青藍を見て常磐は微笑み、その手をしっかりと握る。

「とりあえずどこか店に入らう。そこでゆつくつと話でもすればいい

い」

そうだな、と東雲が同意する。立つたままところのモモ疲れるので、青藍も素直に頷く。

常磐の手をしっかりと握り返し、人ごみにもまれながらも今度こそ手を離すまいと必死になる。

背の高い青年が一人に、どう見ても血縁ではない少女　　そのうちの一人などは人とは思えないほどの美貌の持ち主でもあるから、

周囲からの視線の集まりようは半端ではない。

「大丈夫か？」

常磐が青藍を気遣いながら、店の扉を開ける。

人ごみのなかでもみくちゃにされた青藍は呼吸困難になるのではないかと真剣に思った。

「だい、じょうぶ」

人ごみさえ抜ければあとは呼吸を整えるだけだ。

心配そうに見つめてくる常磐に微笑み、心配いらないと手を振る。常磐も微笑み返して、繋いだ手はそのままに、店の隅の方のテーブルに座る。東雲はそんな常磐の様子に苦笑しながらそのあとをついてきた。

店員に注文を聞かれ、適当に頼むと妙な沈黙が落ちる。

若い女性の店員が先ほどからちらちらとこちらを見ていた。常磐と東雲に興味があるのだろう。

「……それで？」

女性店員の視線に青藍はむ、としながら話を進める。

常磐と東雲は一度顔を見合せて 結局常磐が話し始めた。

「簡単に言えば、おまえが神々から狙われているかもしれない」

突然降ってきた話に、青藍は目を丸くする。

「何それ」

あまりにも常磐の口調が軽かつたからだろうか、危機感を抱くような余裕はない。まるで冗談を言われているかのようだ。

「真朱が神々から嫌われていたということはもう理解できただろ？」
「こくん、と青藍は頷く。初めて会ったが人当たりよさそうな東雲がやんわりと拒絶しているということは分かりやすい例だつた。

「神々にとつて、真朱の存在は、死ねば終わりだつた が、おまえが生まれた。真朱の魂と、わずかだが記憶を持つおまえが」
それはどの神々にも予想外だったはずだ。

人と人神の子供である真朱 その存在は神々に恐怖を与える。

絶対的なものだつたはずの自分達が、実は欠陥だらけだつたと突き付けられているような気分を与える。

「そして、おまえは俺と出会つた 出会つてしまつた。神々は余計に焦つただろうな」

常磐が苦笑しながら、青藍の頬を優しく撫でる。

「今はまだ動きはないに等しいが、いずれ接触を図つてくるかもしない。もしかすれば、命を狙われることもあるかもしない。神の住処に幽閉される可能性だつてある」

口調はとても優しいが、言葉に隙はない。その可能性が、可能性のまま終わることはないだろうと暗に告げていた。

「だから、俺一人では万が一の時動ぐのに時間がかかる。だからこいつと会わせたかったんだ」

「一応は神様だからな、俺も」

ふう、とため息を吐きながら東雲が呟く。

神との交渉の際に、常磐では相手にされないかもしない。けれど東雲ならば

つまりはそういう未来まで予想して、常磐は青藍の身の安全を考えてくれているのだ。

「…………つまりは、真朱が神様に嫌われていたから、私も嫌われているってこと?」

言葉にするとそれはとても子供じみた話のよつに思えた。

「 すまない」

東雲の静かな謝罪が、それを真実だと教えてくれる。

まるで知らない相手に、まるで関係のないことで拒まれる ひどい話だと青藍は笑う。それは何かを諦めているような笑みだった。「東雲様が悪いわけじゃありません……仕方ないです」

真朱は禁忌の存在。

その存在は神々を脅かす。

別に、特別でもない人間に拒まれようが恨まれようが、あまり心は苦しくならない。

青藍は常盤さえいてくれればいい そう思える。

「しかた、ないです

けれど自分に言ひ聞かせるように呟いた言葉は、あまりにも虚しくその場に響いた。

12・人と神（3）

くだらない。

真っ白な髪が風に揺れていた。
華奢な彼女を囲む人々は神か、人か。

何を恐れる？ 何を怯えている？ 人を愛すように人神を作ったのは天の神々であるあなたたちでしょう？

嘲笑する彼女を、周囲の神々はただ厳しい顔で睨む。

生まれ出た命に罪はないなんて考えはないのか。神が聞いて呆れる。もはや死んだこの私を捕らえ、輪廻の輪から遠ざけるつもりか。

その声に、常磐に向けていたような甘さも優しさもない。嘲るようく笑い、そしてその赤い瞳で数多の神々を睨んでいた。
かちやり、と周囲の神々が刃物を構える。
ここまでするかと笑う彼女に諦めの色はなかつた。

ならば呪いを残しましょ。あなたたちはいつまでもこの真朱に囚われる。いつまでもいつまでも、自分達の過ちに怯え続けばいい。

捕らえるのなら捕らえればいい。この魂、簡単には渡さない。

暗闇の中、青藍は目を覚ます。

上体を起こして周囲を見ると、常磐や東雲と共にやつて来た宿屋だ。女の子なのだからと主張する東雲に押されて青藍は一人部屋だ。常磐は危険が迫っているかもしないのだからと一緒に部屋にしようとしていたのだが、別に青藍は常磐と一緒に部屋でも良かつた。

「…………ゆめ、かな」

ぼつりと呟いた言葉はあまりにも儚く空気に溶けてしまう。今日は月が明るい。目が慣れれば部屋の中が十分に見渡せた。一人部屋だけど、一人でいるには広すぎた。

「 常磐」

嫌な夢だったのだと思う。

あのあと真朱はどうなったのだろう。思い出そうとしても、身体が震えるだけだ。このまま眠れば夢の続きを見るのだろうか。

青藍はベットから下り、部屋からそっと出る。常磐と東雲は隣の部屋だつたはずだ。

部屋の鍵は渡されていたので音を立てないようにそっと鍵をあけた。

一つ並んだベットの上で常磐も東雲も大人しく眠っている。これでは誰かが侵入してきても気づかないのではないだろうかと青藍は苦笑した。

そつと常磐が眠るベットに近づく。

綺麗な金の髪が月明かりに照らされときらきらと輝いてる。緑色の瞳は閉ざされて、否、まじろむようにゆっくりと開いた。

「ど、常盤？」

起こしてしまつただのうかと青藍は少し慌てる。しかし常盤は少し寝ぼけたよつて手を伸ばし、青藍に触れる。

「どうした？ 眠れないのか？」

優しく微笑む常盤に、青藍の心もほんわりと温かくなる。

「ちよつと顔を見たかつただけ」

甘えるようにそう答えると、常盤はしようと笑う。

「怖い夢でも見たか」

布団を持ち上げて、常盤は青藍を中心に入る。突然のことには驚いて硬直した。

「ど、常盤ー？」

慌てて布団の中ならぬよつとすれば、ひること言われてしつかりと抱きしめられる。よつて常盤の腕を枕にしているよつに青藍は横になっていた。

ほんの少し顔を見て落ち着いたら戻らうと思つていたのに 常盤はほとんど寝ぼけているらしいことだけは分かった。

温かいぬくもりに青藍も眠気がやつてくる。

戻らなければ、といつ意思とは反対に青藍はまどろみの中に落ちて行つた。

朝の光に眩しかつて目を細め、常盤は目を覚ました。

なんだか妙に温かかったよつな。

やつ、まるで子猫と一緒に寝たときと同じよつ。

原因はすぐに分かつた。

隣で常磐にくついて眠っている青藍の存在に、常磐は硬直した。

「…………アレ?」

どうしてこんなところに、と考え、夢の世界の中でもうこえれば青藍が来たような気がすると考え始める。

「あ…………朝か、おい青藍を起こしに」

東雲があくびをしながらベットから下り、青藍を起こしに行こうとしたのだろう。しかしその青藍が常磐の隣ですやすやと眠っているのを見て常磐同様、硬直した。

「…………」

「…………」

お互い顔を見ながら沈黙が続く。
そしてその沈黙を破ったのは。

「おまえまさか手え出したのか…………」

東雲の絶叫だった。

「ば、馬鹿! 起きるだろ? がー!」

慌てて常磐が東雲の口を塞ぐ。青藍は唸りながら寝がえりをうつ。一人で沈黙してその姿を確認し、ほっと安堵してから常磐は東雲の口から手をはなす。ついでに青藍に布団をかけなおしてやった。

「おまえいつのまに青藍を連れ込んだ? 僕の田の黒こはくは許さんぞ」

まるで父親だな、と常磐はうんざりしがらとうとうあえず否定する。「あれが眠れないからってこっちに来たんだよ。何もしてない」「眠れないからって……年頃の女の子なんだからそういうことを許しちゃいかんだろう。おまえもおまえだ、まったく」

ぶつぶつと文句を語り東雲を見ながらため息を吐きだし、常磐はまだ眠つたままの青藍を見る。真っ黒な髪は少し寝癖がついている。規則正しい寝息を聞いて田を細めた。

孤独でいることが普通だったのだろう
磐に甘えてくる。甘やかしてくれる人間がいなくなつたことで、甘
えたい時に甘えられなかつたからだろ？ 青藍は妙に大人びて
るわりに、子供っぽいところがある。

「…………ん

触れようとして伸ばした手が、青藍の声でぴたりと止まる。

眩しそうに目をきつく閉じ、明るくなる視界が慣れないのか、目
をこすりながら青藍が目を覚ました。

「……おはよう、常磐」

「…………ああ」

まだ寝むそうにしている青藍のせいで朝から濡れ衣をかぶりそ
になつたのだが 実に熟睡できた様子の彼女を見ると、強く怒る
こともできない。

「よく眠れたか？」

聞くまでもない質問だが、常磐は頬に張り付いた髪を払つてやり
ながら問う。

「うん。怖い夢はもう見なかつた」

半分寝ぼけているせいか、子供のような口調で青藍が答える。潜
り込んできた理由はそんなところだらうと思つていたので常磐は微
笑むだけで何も言わない。

「おい、起きたなら顔洗つて着替えてこい。自分の部屋で」
くいつと東雲が隣の部屋を指さす。

着替えも何もかも向こうの部屋だ、と青藍が苦笑して頷く。

「着替えたならまた来るね。朝ごはんまだ行かないでよ？」

用意がもう整つてゐるらしい東雲と、まるでまだ何もしていな
常磐に向かつてそつと念を押して青藍は部屋から出していく。

青藍が出て行つた扉をしばし見つめて、大人の男一人は大きくため息を吐いた。

13・呼ぶ名前（1）

集まる視線にも随分慣れだ。

常磐も東雲も田立つ容姿である上に、青藍という娘とも妹とも説明のつかない年齢の少女、という組み合わせは人々的好奇心を煽るらしい。

律儀に待っていた常磐と東雲と共に朝食を食べる。青藍は昔この小食だったが、常磐があれもこれもと食べさせようとするおかげで食べる量は確実に増えた。

「ええと それでこれからどうするの？」

一番食べるのが遅い青藍はスープを飲みながら一人に問いかける。常磐と東雲は一度顔を見合せる。

「……今のところは様子見しかない、な」

けりりとした青藍に戸惑っているのか ひどく歯切れの悪い常磐の返答を気にする様子もなく青藍はパンを千切る。

「じゃあ、しばらくこの町にいるの？」

「いや、こういう町は都合が悪い。出来ればすぐ発つ」

都合が悪い？ と首を傾げる青藍の正面で水を飲みながら常磐が続ける。

「いろんな人種がいるところだと、それだけ誰でも田立たないからな。偏りがあるくらいの方が警戒しやすい」

「正直俺のところに落ち着けば一番楽なんだけどなあ」

東雲が呆れたように咳く。東雲のところ、というのはたぶん人の世ではないのだろう。人神の住まつといふならばおそらく神の世界に近しい。

「あそこの空気は俺には合わないんでね」

何度も交わされた会話なのだろう、分かり切った答えを待つていたかのように、東雲は肩を竦める。

「常磐が行かないなら私も行かない」

せつぱつと青藍が言い切ると、東雲ははあ、とため息を吐きだす。

「言ひた。おまえが釣れればこいつもついてくるんだけどなあ」

「逆だと思つ。常磐が釣れると私もついてくるの」

私が常磐についているんだもの、と笑つと、東雲も苦笑して青蘭の髪を撫でる。

「早く食つてしまえ。食い終わつたら買出しだ」

神様なんだけどなあ、と青藍は笑う。東雲はまるで親戚のおじさんかお兄さんのように親しみやすい。

買出しにて青藍に新しい服を買おうとこうことになり、一人が愛らしいワンピースを薦めるのをどうにか振り切つて、少年が着るような上下の服を手に入れた。動きやすいので青藍は気に入ったのだが、二人は立腹らしい。

「あの服の方が可愛かつたんだがなあ」

「似合つてたのに」

大人二人からの集中攻撃に青藍は若干負けそうになつたが、きつと言い返す。

「今まで常磐が買つてくれたのは全部あんな感じのじゃない。少しくらべ動きやすい服がないと駄目だよ。一応旅してるんだし」

青藍も年頃の女の子だからこそ、可愛いと言われば悪い気はない。だがやはり機能性を考えると少女の服というものは旅にはかなり向かない。

短い髪といい、少年の服といい、今の青藍は少女には見えにくいだろう。

「まあ……防犯的なことも考えればそれもいいかもしないけどな悪い虫がつかなくていい、という東雲の言葉に常磐が大いに頷く。

青藍は意味が分からずにただ首を傾げた。どういう意味？と問うが頭を撫でられて終わりだ。

こんな日常が続けば、と心の底からそう思つ。
続くわけがないのだと、冷静なもう一人の自分が訴えてきてるの
だけど。

その日の昼には賑やかな町を発つた。

森を抜けて次の町へと向かう。昼間でも大きな木々が太陽を遮る
森は、どこか薄暗く、湿った風が頬を撫でていく。

氣味が悪いな、と青藍は自然と常磐に寄り添うように歩く。

一人だけあぶれた東雲が苦笑しながら前を歩いていた。

踏みしめる落ち葉は乾いた音もせずに、ただ土に埋もれていく。
見上げれば深い緑。この落ち葉はいつたい地面に降り立つたの
だろうと青藍は思った。

「ここ抜けると町？」

「いや、しばらく歩く。次の町は西洋に近いな。たぶん、おまえ目
立つぞ」

その黒い頭とか、と笑いながら常磐が髪を撫でた。

じゃあ常磐のよつな、金色の髪の人がたくさんいるのだろうか。
もつと違う髪の色の人ができるのだろうか 常磐が連れ出してくれ
る世界は、いつも青藍に真新しい。

湿った空気にも、しばらく歩けば自然と慣れた。

常磐にぴったりとくつづいて歩いていた青藍は徐々に離れて行つ
て、近くの植物に手を伸ばし始める。子供そのものの行動に大人二
人は微笑ましげに観察するだけだ。

「怪しい植物には触るなよ。毒だつたらどうする」

田の届く範囲でしか動かない分まだ幼い子供よりマシかと東雲が苦笑しながら注意する。

ずっと幼い頃から監視という形で見守ってきたが 最近の青藍は実に伸び伸びとしているようだ。守ってくれるという絶対的信頼が、常磐にあるのだろう。その常磐と通して東雲にも多少の信頼があるはずだ。

母と一緒に暮らしていた頃も、独りになつてからも どこか青藍は感情を落とした人形のようで、ずっと不憫に思っていたのだが。

「元気になりすぎな気もする」

「ふう、と東雲はため息を吐きだしながら呟く。

「ひつひつしてきたかと思えばアレだ」

くすくすと笑いながら常磐が言つ。

「似ても似つかないな、真朱とは」

そう続けた常磐の言葉はどこか寂しげだった。青藍を見つめる田には切なさが宿る。

そんな常磐を見て、東雲は眉間に皺を寄せた。何よりも過去に囚われ続けてるのは間違いなく常磐だ。

「とき

一言言おうと、口を開いた時だった。

涼しい森でもなお寒氣がするほどどの、冷氣。

「 忌み子め」

低くその声は響いた。

東雲が見た先には青藍がいた。その青藍の後ろには闇とも光とも

いえるものを纏つた人　否、それは人ではなかつた。

振り返つた青藍の目に、それは懐かしく感じた。青藍を見下ろす

その神は、ただ汚いものを見るような目をしていた。

鎌を振りおろそうとする姿がまるで死神のようだ。

ああ、ますい。

このままでは死んでしまひ。

頭の中ではそつ冷静に思つてゐるのに、身体は凍りついたかのように動かない。

常磐が必死に手を伸ばしていた。

その手に応えようと青藍も手を伸ばしかけた。

「

真朱！」

耳を疑つた。

しかし確かに彼はそう叫んでいた。

伸ばしかけた手はゆっくりと下ろされた。
自然と青藍の瞳からは涙が零れた。

14・呼ぶ名前（2）

「下がれ！ ここは人神の領域だぞ！」

東雲の声が森に響いた。

青藍の背後の神は静止し、東雲と睨み合つ。振りおろされかけた鎌は未だに青藍の細い首を狙っていた。

「天上の神々が領域を侵すのか。もとよりその子はただの人の子。魂の罪はすでに贖われたはず」

今の東雲には親しみやすさがない。人神としての威厳が空氣すら押しつぶすように感じられた。

しかし、青藍にはそれすらどうでもいい。

『真朱』と。

常磐が、確かにそう呼んだ。

今まで、ただの一度も青藍の名を呼んだことはないのに。名前を呼ばれなくても、それだけ近くにいるからだと、そう誤魔化すことが出来たのに。搖るがない証を突き付けられたようで、青藍は目の前が真っ暗になった。

頬を伝う涙が痛い。

常磐は隙をついて青藍の腕を掴み、そのまま引き寄せた。鎌の切れ先がすれすれのところで青藍を傷つけることなく、すり抜けた。引き寄せられるままに青藍は常磐の胸にもたれる。力強く抱きしめてくれる常磐の腕が、今は何故か鬱陶しい。

触れてほしくない。

「存在そのものが罪だ。天上の神々を脅かす前に、消してしまつぼうが世のため」

低く紡がれる言葉は、常磐の言葉ほど青藍には毒に感じなかつた。常磐の口から発せられた『真朱』の方がずっと痛い。

「アレに連なる子だからという理由で殺されるのか。それは人神として許すわけにはいかない」

そもそも真朱にも罪はなかつた。罪を負うべきは彼女の両親だけだつた。

ただ神々が真朱という存在を許せなかつただけだ。それが存在しなかつたと思いこみたかつただけだ。

「……そもそも、その忌み児は生まれる運命になかつたはず。白き人神の魂は永遠に神世に囚われているのだから」

冷やかな目が青藍を見た。

青藍を抱きしめる常磐の腕の力が強くなつた。

「運命は神にも分からぬ。この子がこうして存在するのは、もはや疑いようのない事実だ。どこかで綻びがでたのだろう」
東雲が困惑の表情を浮かべて呟く。

「引け。その娘は我が保護下にある」

青藍をかばうように立ちながら東雲が強く言い放つ。

一瞬の沈黙の後、恐ろしい死神は姿を消した。空気がその瞬間に変わる。肺を押しつぶしそうな圧力は消え失せ、もとの森に戻る。

わく、と東雲が落ち葉を踏みしめて青藍に歩み寄る。

青藍の頭は機能していなかつた。東雲の顔せせとくちに囁いていた。

やつぱり私は、身代わりだつたんだろうか。

真朱を失つた常磐にとつて、『青藍』は個として認められていない存在だつたんだろうか。

「放せ」

静かに東雲が常磐に命じた。

何故と問いただしに常磐はさりと青藍を指させるとその様子

以前に、言ったな

力強いその声が、青藍の耳に届いた。

「その子に、アレを重ねるなと」

びくりと、常磐の身体が震えた。

東雲は常磐の腕を青藍から引きはがし、優しく抱き上げた。青藍はぼんやりとした頭の中でどこかほつとしていた。

船のめぐれにかくは痛い

優しく大きな手が青藍の頭を撫でた。いつも撫でてくれるぬくもりとは違うのに、違うことに安堵している。

青藍は東雲の上着を掴み、静かに泣いた。

常磐は一人の背中を見送つたまま、しばらく立ち尽くした。

自分はどうしてこんな過ちを犯したんだろう。

今まで、青藍と真朱を混同して見たことなんてなかつたはずな
[一]。

よつこもよつて、あの小さな女の子が危険な時に、どうして彼女
の名前が出てきてしまったんだろう。

常磐は拳を作つて樹の幹を殴りつけた。

衝撃で葉が舞い落ちる。手が痛んでも気にならなかつた。

一体、どこまで呪えれば氣が済む。

真朱。

これ以上大切なものを失いたくないのに。これ以上何も失いたく
ないのに。

大切なものはいつもこの手のひらからすり抜けていく。

東雲は青藍を抱きかかえられたまましばらく歩き、予定とは変わつてその日は野宿になつた。昼間に襲撃があつた以上、今夜は人を巻き込まない為にも町に入らない方がいいだろうと判断した。

「　　そのうち、常磐も追い付くだろう。あいつには頭を冷やす時間が必要だ」

ぱちぱちと火が音をたてて燃え上がる。

青藍はあれから黙つたままだ。常磐に依存していた青藍には、分かつていたとしても辛い現実だつたんだろう。

そつとしておこつと、東雲もあまり刺激しないようにしている。突き放されたような青藍の顔と、呆然とした常磐の顔。二つの表情が東雲の目に焼き付いている。やはり一人は出会わない方が幸せだつたのかもしれない。

「 東雲様」

ぽつりと青藍が口を開いた。

青い瞳には炎が揺らいでいる。

強い瞳に射抜かれて、東雲は言葉を失つた。

「 お願いです。教えてください。　　真朱のこと？」

ああ、なんて強い子なんだろう。この子は。

東雲は眩しいものを見るような気分で青藍を見つめた。

「いいのか。知らない方が幸せかもしれないぞ」

普通の子供ならば知らないままの遠い過去だ。確かめるように問うと、青藍はしっかりと頷いた。

「たぶん知らない方がいいんですね。私は、このまま常盤と共にここに一つと想ひます」

ああ、まだこの子は常盤を見捨てないでいてくれるのか。

15・遠き記憶（1）

それは、もう気が遠くなるほど遠い昔のこと。
それでも、目を閉じれば今でも鮮やかに彼女を思い出すことが出来た。

憎しみと、愛しきとともに。

駆け抜けた先で、ようやく出口を見た。

救いを求めるように差し出した手は、見えない壁に阻まれる。

「くわッ」

深い森を抜けねば、先にあるのは小さな村だ。かつてこの場所から森へと入り、静かに朽ちるだけだと思っていたのに。

何度森から出ようとしても、まるで薄い硝子でもあるかのようだ、森から一歩も出ることは叶わない。

「無駄よ、常磐。あなたは森から出れない」

くすくす、と嘲笑うような声が聞こえて、頭上を見上げた。すると木の枝に腰掛けた白き少女が常磐を見下ろしていた。

真っ白な長い髪は結われることなく揺れていて、赤い瞳は玩具で遊ぶ子供のように無邪気だ。

少女の姿をした悪魔。

「俺に何をした」

「人ではない生き物に変えたのよ。神様の力とこうやつでね。素敵でしょ？」

ふわりと、音もなく地に降り立ち、神だと名乗る悪魔　　真朱は常磐を見上げ、その頬に触れながら笑う。

「触るな」

頬に伸ばされた手を振り払う。その勢いで常磐の手の甲が真朱の頬を打つた。

加減をしていなかつた分、嫌な音がした。軽い真朱の身体は簡単に吹き飛ぶ。子供に手を上げてしまつたと、動搖する。

「……平気よ。慣れてるから」

真朱は怒ることなく、打たれた頬を押さえながらゆっくりと立ち上がる。小さな手のひらでは赤く腫れた様子を隠しきれない。

その様子に常磐はただ居心地が悪くなる。殴った感覚の消えない手が壊死していくような気がした。

真朱は常磐を振り返ることなく森の奥へと歩いて行く。
白く長い髪が暗い森の中で浮かび上がつていた。

常磐にはこの森に来る前の記憶がない。

正確にはなくなつた、なのだろう。傷だらけでこの森まで逃げて来た時には、怪我を負つた理由も逃げて來た理由も覚えていたと思う。しかし今の常磐には『何故か怪我を負つて、誰から逃げていった』ということしか覚えていない。

家族がいたのかも、本来の自分の名前も。

記憶を消したのも、おそらく真朱なのだろうといつとすることは想像できた。思い出した方が良い記憶なのかどうかも分からぬから、この点に関してはどうすればいいのか分からなかつた。

ただ森の中を彷徨う日々が、どれほど続いたのだろうか。

永久にも感じるほど長い時だった。時折からかうように真朱がどこからかやって来ては常磐に話しかけてきた。その度に鬱陶しいと追い返し、時には傷つけ そのことに罪悪感を覚え続けてきた。何も食べない日々が続いても 飢えを感じるもの、それが常磐の命をすり減らすことはなかつた。

死ねない身体というのは本当なのか、と苦笑しつつ 心臓を貫いたらどうなるのだろうなんて考えが頭の隅をかすめた。食べることも億劫で、立ち上がる気力もなくなりそのまま座り込んで木々の合間に見える青空を見上げる。

死ねないことが恐ろしいなんて、常人には理解できない恐怖だろう。

「自虐的ね、常磐は」

青空が白く染まつた。

少女が呆れたように常磐を見下ろしている。

「……近寄るな」

「随分嫌われちゃったみたいね。……逃げる気力もないくせに」

馬鹿な子、と笑いながら常磐の頬に手を伸ばす。

振り払おうにも手を上げることすら辛い。そしていつも小さな手を振り払つたあとに感じる罪悪感を思い出してさらに躊躇した。

「そう簡単に壊れるようには作つてない。食えても、心臓を刺しても、首を貫いても 常磐は死れない。その綺麗な姿のままで永劫の時を生きるの」

くすくすと笑いながら真朱は「素敵ね」と呟いた。

「……さい、あくだな」

苦しげに息を吐きながら常磐は呟く。

「どうして？ 神様よりも長く生きれるのよ？ 人も神も超えた存在になれるのに、何が不満なの？」

常磐は沸き立つ苛立ちを抑えきれずに渾身の力をこめて叫んだ。

「どうして？ ふざけるな！ 僕がいつそんなものを見んだ！！

「いつ俺を化け物に変えてくれなんて言った！…」

真朱の小さな手を握り締めて、睨みつける。

「あなたが望んだんじゃない。死にたくないと」

違う？ と小首を傾げて問う真朱は一見するだけならば愛らしい。

荒い呼吸のまま常磐は真朱を見上げて睨み続けた。

「そんなもの、覚えていない。どうして死にかけたのかも、どうして死にたくなかつたのかも！ おまえの仕業だろう！？」

常磐の悲痛な叫びに真朱は動じることなくただ静かに見下ろしていた。赤い瞳が無感情でただ常磐を映す。

「 知らない方が、幸せなこともあるわよ？」

ただ無表情に見下ろしてくる真朱に飲まれる。

記憶を無くすかそのまま残すか、その選択すら許されなかつたのに、彼女から慈愛すら感じてしまいそうな声だった。

無の表情の中に、どこか優しさを感じるなんて、とうとう脳までおかしくなつたのだろうかと常磐は笑う。

「 ……それでも、失えば悲しいだろ？」「

強く握りしめていた真朱の手をするりと放す。

放れた真朱の手は、躊躇うことなく優しく常磐の頭を撫でた。

「不器用ね、常磐は」

苦笑まじりのその言葉に反論する力はもうわずかにも残つていな

い。

徐々に遠のいていく意識の中での、真朱の声だけがいつまでも頭の中で響いていた。

「私を心の底から憎むこともできないなんて」

目を覚ますと身体は泥に埋まっているかのように重かつた。眩しい光に目を細めながら、ぼんやりと天井を見上げる。建物の中で目覚めるなんてどれくらいぶりだろ？

「起きたの？」

柔らかな声に、思考力が急激に戻ってきた。

慌てて起きあがると、そこには真っ白な髪に真紅の瞳の少女真朱がただじつとこちらを見つめていた。

「……なんで」

「ここにいる」と低く呟くと、真朱は淡く微笑む。

「倒れた人間を放置するほど最低ではないわ。もっと身体を大切にしてくれなくちゃ。私の大事なものなんだから」

「いとおしげに見つめてくる瞳が鬱陶しかった。

大事なもの 大事な玩具の間違いだろう、と叫びたいのに何故か声が出なかつた。

苛立つ気持ちを抑えようとシーツを握り締める。不思議ともう空腹も感じず、眩暈もなかつた。真朱がまた何かしたのだろうかと考えてすぐにその考えを追い払つた。それが真実だとすると、もっと苛立ちが募るばかりだ。

「……まだ寝てなきや駄目よ。どうせここからは出れないようにしてるから、しつかり休みなさい」

「森と同じ仕組みか」

睨みながら問うと、ふつゝと真朱は笑いながら頷く。

「だつてそうしなきやちゃんと寝ていてくれないでしょ？ 森も同じよ。外に出ても常磐にとつて良いことなんてないわ」

「それは俺が決めることで、あんたが決めることじゃない」

若干声を荒げてそう言つと「そつかしら？」と真朱は微笑む。

「私は神様なのよ」

そう呟く真朱の顔はわずかに曇った。まるで自分で神様だと書いておきながら、それを心の中で強く否定しているかのように。

そのまま真朱は何も言わずに部屋から出て行つた。すぐにベットから降りて扉に向かうが、扉はぴくりとも反応しなかつた。

くそ、と苛立ちを扉にぶつけてそのままずるずると座り込む。

「ふざけるな……！」

何故、どうして、自分が。

さまざまな疑問は浮かんでは消え、そして消えては浮かんでいく。こんな未来を知っていたならあの時、この森でそのまま果てたほうがましだつただろう。

死ぬことも許されないことが、こんなにも辛いなどと思つたことはなかつた。

それからしばらく、ぼんやりと外を見ていた時だつた。

「おまえが、忌児に作られた紛い物とは」

窓の向こうで一人の青年が立つていた。肌は少し濃く、赤茶色の髪が肩のあたりまで無造作に伸ばされていた。そして言い表しようのない雰囲気。年齢とは合わない、どこか世離れした老人のような、奇妙な空氣。

「……誰だ」

警戒しながら問つと、青年は何も言わずに窓に近づいてきた。そつと窓に触れると、パチンと何かが割れるような音がする。

「名乗る必要はない。人の子よ、人の世界に戻れ」

窓は青年が触れることなく勝手に開かれ、外の空氣が部屋に入り込んだ。

「あんたも神様の部類か」

窓枠に触れながら問うと、青年は嫌そうに眉をひそめ、そして目をそらして呟いた。

「アレと一緒にするな」

その声にははつきりとした嫌悪があった。アレというのはおそらく真朱を指すのだろう。

青年に従う必要はないが 部屋から出れる」とは正直ありがたいと窓から外へと出ようとする。青年はちらつとこちらを見て背を向けた。

「間違えるな、アレは神ではない」

「？」

何を言っているんだ、と眉を寄せた。真朱が神でないというのなら、なぜ自分は生きているというのか。何故不可思議な力を持つているといつのか。

「それは、どういう……」

背を向ける青年に問いかけようと口を開くと、背後から扉の開く音が聞こえた。どこかひんやりとした空気が背筋をなぞる。

「これは、大きなネズミだこと」

くす、と笑う声は身体が凍りつくほどに冷たい。

微笑む真朱はただ閉鎖していた扉を開けて、そこから一步も動かさずにこちらを 閉鎖した空間を壊した青年を見ていた。

「困ったことをしてくれるわね。それは私のものよ？ 勝手に外に出さないでくれる？」

それ、と指差しながらも真朱はまるでこちらを見ていなかつた。所有物扱いされることには相変わらず言ひようのない嫌悪感が湧き上がつてくる。

「馬鹿なことを言ひなよ、忌児が。人は人の世にあるが定め。神でもないおまえが手を出すのは領域違反だ。生かされているということが

とを忘れるな」

青年は振り返り、真朱を睨みながら呟く。

「 東雲、だつたかしら。生かされているのだとしても、殺すこともできぬい下つ端の人神が偉そつに」

一触即発とはまさにこのことだ。二人の間には殺伐とした雰囲気が渦巻いていた。こちらの呼吸が苦しくなりそうだと思わずぶつかり合う視線から逃れようと後退る。

「俺が気に食わなかろうがどうでもいい。上の決定だ。この人間はもとの世に戻す」

青年 東雲がそう言つと、真朱が眉間に皺を寄せて無言で睨みつける。

重たい沈黙がしばらく続き 真朱は諦めたように踵を返した。
「好きにすればいい」

白い髪がふわりと風に揺れた。背を向ける真朱の顔は見えない。

「俺の、記憶は ！」

元の生活に戻されても、名前も住んでいた場所の覚えていない。そう思つて真朱に向かつて叫ぶと、彼女はちらりとだけこちらを見た。

「森から出れば徐々に戻るわ」

それだけ言うと、彼女は家の奥へと消えていく。

どこか捨てられたような気持ちがふつりと湧き そんな馬鹿なと首を横に振つた。記憶も戻る。元の生活に戻れる。そのどこに不満があるというのか。

「行くぞ、送つてやる」

東雲が急かすようにそう言つ。

こくりと一度頷き、彼女が住むそれなりにしつかりとした家を見た。そこはかつて神殿が何かだったのだろうか 白い壁には薦が這い、見事な彫刻であつただろうものは粉々に砕けていた。

後ろ髪引かれるような感覚をどこか感じながらも東雲の背中を追い、その森を後にした。

「馬鹿な常盤」

その背中が徐々に小むくなるのを窓越しに見つめながら、真朱は呟く。

「外には悲しみしかないのに。苦しみしか残つてないのに。それで
も帰るなんて」

くす、と微笑み、真朱はいとおしげに窓に額を寄せる。赤い瞳は
ずっと常盤の背中を見つめていた。

「でも、だいじょうぶ」

くすくすと、その声は少しづつ大きくなつていいく。

「あなたは必ず、戻つてくるから」

17・遠き記憶（3）

閉ざされた森から出た途端、眩暈がするほど記憶の津波に襲われた。

目の前に見えるのが過去なのか現実なのか幻なのか実体なのかそれすら分からなくなり、思わず固く目を閉じる。そうすることで記憶のみが脳内で再生された。

嘔せるような血の匂い。

それは、一番最後の記憶だった。

溢れる血は流れしていくほどに体力を奪うような気がした。進む足どりはどんどん遅くなり、引きずるようにしか歩けなくなつてくる。

早く。

心はもつと急かしていた。

早く、早く、早く。

逃げなければ。逃げなければ。

早くしなければ追つ手が来てしまう。そうすれば命はない。
くそつ、と苛立たしげに呟く。どうしてこんな目に遭わなければならぬ。どうして俺は逃げなくてはならない。

「ガズラル……っ！」

自分が憎々しげに吐いたその人物の名に心当たりはまだなかつた。

「大丈夫か」

冷静な声に意識は現実へと引き戻される。

田を開ければ近くにはあの青年がいた。真朱が東雲と呼んでいた

青年だ。

「アレに記憶を封じられていたんだろう。森を出たばかりの頃は自分の記憶に飲み込まれやすい。少しづつ取り戻さないとどれが現実か分からなくなるぞ」

東雲は人差し指で自分の頭をつつきながら説明し始めた。

「脳は一度に大量の情報を入れられないからな。おまえは今までの人生分の記憶を全部すっかり忘れていたんだ。その何十年分の記憶を数時間で取り戻すと発狂する可能性もある」

たった今戻った記憶はわずかなものだ。それだというのに 頭がぐらぐらと揺れていた。吐き気がして深く息を吐く。

「……休め」

ぽん、と肩を叩かれて力が抜けた。

「……あんたは、」

何者だ、という問いは声にならずにそのまま飲みこまれた。東雲は苦笑しながら首を横に振る。その表情に真朱に向けるよつな険しさは存在しなかつた。

「そのうち説明してやる、言つただろう。休め。これ以上おまえの脳みそこに情報を入れるな

ずるずると木にもたれかかって座り込む。地面に腰を下ろすと、随分と楽になつた。

ふう、と息を吐き出してまた田を開じる。瞼越しに日の光を感じた。

いつもしている以上に休まることはなかつた。田を開じれば記憶が蘇る。鉄錆の匂いがその合図のように嗅覚を刺激していた。

「寝ろ。夢として見る方がまだ楽だらう」

東雲の声がまるで夢に誘い込むかのように深く響いた。

魔法が何かのように意識は闇に落ちていく。闇が深くなるたびに、記憶が呼び戻されて違う場所へと移つていった。

俺は、何から逃げていた？

月の姿のない、暗い夜だ。

部屋の中の明りが怪しく揺らめく中、中年の男を睨みつけて立っていた。

「ジョキルは」

低く問うと、男は口端を歪めて笑う。くつくつと笑い声が暗闇に響き、その気味悪さに顔を顰めた。

「弟君の心配をする余裕がおありとは。流石としか言ひようがありませんね、カクタス様」

「黙れ」

腰から下っていた剣に触れつつ低く唸る。

しかし男は動搖した様子もなく歪んだ笑みを浮かべたままで続けた。

「王の器としてはあなたは正しいのでしょう。しかし我々には必要のない。弟君は心配なさらなくとも無事ですよ。これから傀儡の王となつていただかなくてはならないのでね」

その言葉を聞いた瞬間に剣は抜いていた。

これ以上この男を生かしておくことはこの国のためににはならない。そう思えばこそその行動だった。

「最低だな、ガズラル」

剣を構え首筋を間違いなく狙う。男 ガズラルは余裕の笑みを浮かべながらこちらを真っ直ぐに見ていた。

「父に仕えておきながら、腹の中ではこの国を狙っていたのだろう。父が危うき今、邪魔な俺を排しジョキルを王座に座らせるために」

過去という名の夢の中からの情報で、少しずつ記憶が繋がっていく。

力クタス それが自分の名前だった。真朱に常磐と名付けられる前の、本当の自分の名前。

ジヨキルという弟を持ち、そして一国の後継者だった。大層な御身分だったんだな、と苦笑するしかない。

ガズラル。

国の支配権を狙い、俺を排斥し、そして俺を殺そうとした男。

その男とのにらみ合いは長かったのか、短かったのか それはひどく曖昧な記憶だった。

気がついた時には突如入って来た男達に斬られていた。背中を斜めに斬られた。単身でガズラルのもとにやつて来たことを悔い、渾身の力で反撃して部屋を飛び出した。

「殿下！」

騎士服を身に纏つた男が慌てたように駆けよつて來た。

「……レド、馬の準備を」

逃げるぞ、と弱々しく呟くトレドは全てを察したかのように頷いた。身体をトレドに支えられながら出来るだけ急いで逃げる。

城のほとんどはガズラルの手に落ちていた。このまま城に残つてもありもしない罪を負わされて、拘束されるだけだ。逃げても罪を着せられることに違いはないだろうが、自由に動けると動けないとでは大きな違いがある。

だから、この時は逃げるのが最善だった。

駄目だ。

頭の中でもう一人の自分が呟いた。それでも流れていく夢の中の映像は止まることがない。これは夢であって過去であるから当然なのだろう。

俺は馬に乗り、怪我を庇いながらも少しでも遠くへと逃げようとしていた。

レドは俺の隣を気遣うように並走している。血を吸った上着が重そうで、重い。過去の記憶による感覚と、夢として客観的に見ている自分が入り混じって混乱し始めた。

行つてはいけない、けれど城にては殺される。

すべてを忘れてもう戻つてくるな。

それは、今の俺に対する言葉なのか、それとも過去の俺に対する願いなのか。

『あなたは戻つてくる。私の愛しい常盤』

夢の終わりに、白い少女の幻影を見た。

ひどく甘い、優しい言葉の余韻だけが残る。

田覚めると青い空が見えて、草の匂いに違和感と懐かしさを覚えた。本来の俺は、こうして草の上で眠ることなんてなかつただろう。それでも今では草の匂いに安堵する。人間変われば変わるものだと苦笑した。

「大丈夫か」

氣遣わしげな声に起きあがる。

木にもたれて座る東雲はじつとこちらを見ていた。

「……とりあえず、頭はいかれてないな」

冗談でも本氣でもなく氣がつけばそう呟いている。気が狂った方が楽なのかもしれないなんて思い始めている自分に嫌気がした。思い出すやうとしても思い出せなかつた過去を、心のどこかで拒んでいる。

すきりと、頭に痛みがはしつた。

「もう一休みした方がいいみたいだな。見えるか？」

東雲に促されて見上げた先には、堂々と君臨する王の住まいがあつた。かつて、自分がそこから逃げだした場所だ。こちらが眠つている間に移動したということか、と常磐はぼんやりと考える。どうやって運ばれたのだろうなんて疑問が浮かんで、すぐにどうでも良くなつた。

「……懐かしい、んだろうな、たぶん」

胸に浮かんだ不思議な感覚を言葉にしようとしたが、「懐かしい」という言葉はどうもしつくりとこなかつた。悲しく、切なく、そして憎らしく。

溢れだそうとする記憶は常盤を苛むばかりで、少しも癒してはくれなかつた。

視界が歪んで、過去の映像と今見ている光景が幾重にも重なり合つた。

どうして、と叫ぶ自分の声が耳を貫く。

「…………」

頭を押さえて蹲る常盤のもとに東雲が駆けよる。

「落ち着け、拒むな」

受け入れる、となつた東雲の声が頭の中で反響するのに、元にか遠く感じられた。

もう、どれほど遠くまで逃げただろうか。

追つ手が迫る気配はなく、肩をかすめた傷を庇いながらももつと遠くへと馬を急がせる。長い付き合いのレドは何も言わず隣を走る。父はもう死を待つばかりだ。そして俺が城からいなくなれば、王座に座るのは弟だろう。疑うこと知らない弟がガズラルの手の上で踊られるのは分かり切つたことだった。

傷を治し、体勢を整え、そして戻らなければ。

そうしなければ、この国は。

「殿下、少し休みましょ。傷の手当をしなければ」

隣を黙つて走つていたレドが心配そうに言つ。

肩から流れる血は勢いは衰えたものの、まだ衣服を濡らしている。

そうだな、と呟いて適度な場所で火を起こした。

肩の傷を手当する。薬はないので布で巻く程度のことしかできないが、止血にはなった。

これからどうするか、そう考えながら空を見上げた時だった。

ぞくりと背筋を走る殺意。

いつの間にか追っ手に追いつかれたのかと剣に触れながら振り返る。

しかし、振り返った先にいたのは追っ手ではなかった。いつも共に行動してきた、長年の友人であり良き部下。

その友人の手には抜き身の剣があった。

「おまえもか、レド……！」

悪い冗談か何かだと誤魔化せる余裕なんてなかつた。

レドは明らかにこちらに殺意を向けていた。そしてそれが嘘だと思えるような状況ではない。

「申し訳ありません、殿下」

レドは柔らかく微笑んだままで剣を向けてきていた。もはや味方など一人もいないのかと絶望しそうになつた。

死にたくない。

その意思だけが俺を動かし、レドの剣を再び避けて流れる血にも構わずに森の中へと逃げた。剣は完全に避けきつたつもりだったのにも関わらず、剣は腹部を容赦なく斬った。肩の傷よりも深い。

「殿下……」

森は奥へ奥へと進めば進むほど薄暗く、まるで侵入者を捕える檻のようだ、飛べない鳥を守る鳥籠のよつて、どこか安堵する自分に苦笑した。

頬をつたう熱い水に気づかないふりをする。

信じてきたすべてのものに裏切られた気がした。生まれ持つものをすべて否定された。身体一つの自分になって、自分自身が持つてこいるものは何一つ価値のないものだったことに気づかされた。

森が深くなるにつれ、馬で進むのは難しくなつた。ゆっくりと馬から降り、もはや用済みの馬は放した。近場の木にもたれて、一度深く息を吐く。

そして薄暗い森を見つめて、重たい足を引きずるように進み始める。

そういう長い距離を歩かずには、ずるりと地面に倒れこんだ。土の匂いが徐々に遠のいていく。視界がぼやけていくなかで、白い光を見たくすぐすくすと笑う声に、苛立つ。

「ねえ、生きてるの？ 死んでるの？」

その後は、記憶に残つてゐるところ。

ああ、と吐息にも似た声が漏れた。

どうしても知りたかった自分の過去は、知る価値もなかつた。そういう、知らない方が幸せだとも思えるほどに残酷だ。しかしその事実すらやはり過去を知らなければ分からぬことで、どうあることが幸せだったのだろうなんて考えてても無駄なことだと分かつている。

「なるほど、最悪な過去だな」

くつくづくと笑いながらそう咳くと、こひらを見た東雲は奇妙そう

な顔をしている。

「裏切られて裏切られて 最後に残るのはなんだろうな？」

田の合つた東雲に問うと、困った顔をした東雲は何も答えない。もちろんその問いの答えを自分も持つていなかつた。

「……どうする」

「何がだ」

東雲の問いに問い合わせ返した。「これからどうする、という意味の問い合わせであるのなら、自分に決定権はないのではないか。

「城に送り届けるか？ それとも別に住む場所をやろうか」

随分と親切な神様だな、と苦笑する。これほど人に親身になる神様もそういうだろう。

「確認だけはするさ。城がどうなつたのか。……大体予想は出来るけどな」

今頃育つた城は、国は、ガズラルの支配下に落ちているのだろう。レドはどうなつたのだろう。ガズラルに尾を振つて昇進でもしただろうか。……ジョキルは。

「……覚悟はしておけ」

そう呟く東雲の顔はどこか暗い。

もしかしたらこの男は、この先にある答えを知つてはいるのではないだろうか。

そんな予想は胸の中で浮かび、そして消えていく。たとえこの先にあるのが最悪の絶望だったとしても これ以上の最悪はもうなにもない気がした。

王子でもなくなつた自分は、一体何者なのだろう。

力クタスなのか。
常磐なのか 。

その答えすら、今の自分にはなかつた。

19・遠き記憶（5）

城は、驚くほどに変わりなかつた。

懐かしさと口惜しさが同時に込み上げてきて、唇を噛みしめて黙り込む。握り締めた拳がかすかに震えたことに気づかされる。

「それで、どこから入るつもりだ？」

城には高い城門がある。正面からではとても入ることはできないだろう。いくら長年暮らしてきた城とはいえ、門番とまでは顔見知りではない。

だが。

「俺は、ここで育つんだぞ」

苦笑しつつ、遠くに見える城と大きな城門から離れて脇道に入る。騎士宿舎のある付近は小さな林と繋がっている。そしてそこには抜け道があるのだ。

「見つかれば、殺されるぞ」

東雲の低い言葉に、一瞬だけ立ち止まつた。

城の中に入れば、知り合いと会うこともあるだろう。そしてそれはもう味方ではない。確実に敵であり、俺の命を狙つのだろう。

「……その時は、その時だろう」

死んでもかまわない。ただ、すべての現実を受け入れてしまいたい。その先にあるのが絶望だけなのだとしても。

死ぬにしろ生きるにしろ、そうでなければ前へ進めない。

小さな頃の記憶というのは思いのほか鮮明で遊び場であった城の中に侵入するのはそれほど難しい作業ではなかつた。

無言のままに進み続け、結局誰一人とすれ違つことなく、執務室へと辿り着いた。

「この城を去つた時には自分が使つことが多くなつていた。父はもうこの世の人ではないだろう。

「……ジョキル」

心なしか少し精悍な顔立ちになつた弟に話しかける。
身長も伸びているようだ。まるで自分だけが取り残されたかのように時間が進んだみたいに。

「……兄上？」

ジョキルが目を丸くしてこちらを凝視した。

恐らく弟には俺の存在は死んだものとされていたのだろう。
とりあえずは何の怪我もない弟の姿にほつと安堵した。ガズラルの手がどれほど及んでいるかは分からぬが、ただ傀儡となるだけの人間には陥つていないようだ。

良かつた、と呴こうとしたその瞬間だつた。

「何故、貴方が生きているんですか！？ 死んだはずだ！ レドが殺したはずでしょう！」

まるで死者を見るような目で、怯えきつた瞳で弟は俺を見る。

「三年前とまるで変わらないその姿で 何故貴方は俺の前に現れる！」

「……三年？」

静かに振り返り、背後に立つ東雲に目で問えば、同じじように静かに頷かれた。

「……外界では、それくらいの年月が経つてゐるだろう。あの森はアレのせいで流れる時間が外とは違う。そもそもおまえが目覚めるまでにあの場所で数か月かかるからな」

自分があの森で過ごしたのはほんのわずかな時間のはずだ。

決して三年なんて長い時ではなかつた。けれど 目の前に立つ弟の姿を見る限り、それは眞実だとしか言いようがない。

「自分が座るはずだつた王座を奪つた俺を、あの世から殺しにでも来たんですか？」

恐慌状態に陥つてゐるジョキルが騒ぎ喚く。

最初のセリフを聞いた時から、それとなく予想はしていた。

「陛下！？ なにが …… で、殿下！？」

駆けつけてきたレドが俺の姿を見て驚く。陛下が指す人物はすなわちジョキルで、そして殿下というのは俺なんだろう。立場がまるで逆転しているじゃないかと苦笑した。

「なぜ、生きて……」

震えながら呟かれた言葉に、どんどん冷静になつていく自分に気づいた。

本来ならば激怒するはずの場面なのかもしれない。それなのに笑みを浮かべながら現状をただ見つめていることのできる自分に少し驚かされた。

「なるほど、俺は全てに裏切られたのか」

ガズラルによつて友が寝返つただけだと そう思つていたかつた。

しかし実際は、ジョキルを中心に行われた下剋上だったのだろう。王座に座る、ただそれだけの為に兄を裏切り、そして命を奪おうとしたのか。

「……覚悟しておけというのは、そういうことか」

すぐ後ろにいる東雲に呟く。

彼は何も言わないまま、ただレドを牽制するように立つていた。彼の存在自体が牽制には十分すぎるくらいだと思つ。それに実際レドが俺に剣を向けたら 彼は動かないだろう。

「殺し損ねたな、レド」

苦笑しながら呟くと、俺の存在を現実のものだと認識したレドが剣を抜いた。東雲の牽制も、もつ彼の目には映つていないのだろう。狂気に取りつかれた亡靈のようにただ叫ぶ。

「貴方は、生きて、いては 生きていてはいけないんです、貴方は！」

ああ、そうかもしけないな。

あの時死んでいた方が、幸せだったのかもしけない。

ただ迫りくる剣を静かに見つめて微笑む。

何も知らないままに死んでしまった方が、きっと俺は幸せだっただろう。

思つたとおり東雲はぴくりとも動かない。人間への必要以上の干渉を望んでいないようだから、俺を助けることはないだろうと思つていた。

静かに目を閉じる。

「 駄目よ」

ふわりと甘い匂いが鼻腔をくすぐる。

優しい声が耳元をかすめ、柔らかい何かが身体を包みこんだ。

「これは、私のものなんだから」

くす、と笑う声に目を開ける。

そんなことを言うのはただ一人しかいない。 そう、ただ一人しか。

不思議と安堵した。その甘い香りは包み込むような優しさだけを感じさせて それがまるで聖母のような慈しみをもつてこの俺を守るかのようだ。

「 真朱」

名を呼ぶと、後ろから抱きついでいる彼女は嬉しそうに微笑む。

顔の位置が見上げるくらいに高いところにあるのは 彼女が浮いているからだろうか。人間業じやないな、と思いつつ人間ではないことを思い出す。

「 もう、用はないでしょ」

子供に言い聞かせるような甘く優しい声で真朱が囁く。

小さな手が頭を優しく撫でて、不覚にも泣きそうになつた。たぶん、泣きたかったのだろう。裏切られたと知つたその時から。

「帰りましょう、常磐」

真朱の声に力が抜けた。

包み込む柔らかい力はそのまま俺の身体を支えてしまう。

カクタスと常磐の狭間で揺れていた自身が、すとんと地に足をつけたような感覚だつた。過去の自分はどこかへと消え失せ　今ここにあるのは『常磐』でしかなくなつた。

驚くジョキルやレドの顔が次第にぼやけていき　最後には白い世界へと染まっていく。それと同時に意識は確実に闇へと墮ちていつた。

ぼんやりと視界の中で、最初に飛び込んだのは白い光だ。

「……起きたの？」

どこかいつもよりも優しい声が脳まで響いた。

視線を泳がせればそこには真朱がこちらを窺うように立っていた。柔らかい微笑みをたたえながらただ静かに見つめてくる。

「まだ寝てなきや駄目よ。疲れたでしょ？」「う？」

小さな手が髪を撫でてくる。そのぬくもりが痛んだ心にはひどく染み込んで、優しさに餓えた身体が貪欲に温かさを求めた。

「夢、ではないんだろうな」「うな」

すべて。

弟の顔も、かつての友人の顔も、鮮明に思い出せるのだから。かつての自分の名前も未だに忘れずに残っている。

「いいえ、夢よ。悪い夢を見ていただけ」

言い聞かせるように囁かれた声を信じたくなつて、目を閉じた。

「……あなたは常磐なんだから。それ以外の何者でもないんだから。常磐ではない者のことなんて、すべて忘れてしまえばいいの」

優しい掌は何度も髪を撫でる。幼子をあやすようなその仕草が彼女には不釣り合いで少し笑えた。

静かな　しかしどこか心地よい沈黙が流れた。

長い間眠つていたのだろうか。睡魔は訪れないまま、彼女を見るのがどこか躊躇わてて目を閉じたままの俺の耳に小さな声が届く。

「昔、ね」

躊躇するよつに呟かれた声は、ひどく脆い。

「とても偉い神様と、一人の女が出会ったの。神様はそれこそ他の神様を束ねるような人で、女はただの女だった。二人はすぐに恋に落ちた」

突然何の話を始めるのだろうと目を開けると、真朱はどこか遠く

を見て続けた。

「神様と人の恋なんて、当然禁忌だった。けれど二人はそんなことすべて無視した。……やがて一人には娘が生まれた。その子供は人間と呼ぶには不思議な力を宿し、そして成長が驚くほど早かつた。それでも神と呼ぶには脆弱過ぎた」

そこまで黙つて聞いて、それが真朱自身の話なのだろうと思い至つた。

人と呼ぶには異質で、神と呼ぶほどの力はない。彼女はこの世界でただ一人で、他の何者でもない。

そしてその彼女に「創られた」俺も、もはや人ではない。神なんて大それなものでもない。

「その子供が生まれて五年 見た目はもう少女ほどだつた。ある日突然天からたくさんの中が降りてきた。抵抗する父を無理やりに拘束して、連れ去つた。少女を見た神の一人は眉を顰めて剣を振るつた。その剣は少女を傷つけることなく 少女をかばつた母を刺した」

彼女の赤い瞳は遠い 遥か昔となつたその時のことと思い出しているのだろうか。少なくとも彼女は母には愛されていたのだろう。身を挺して守ろうと思うくらいに。深く。

「そのまま神の一軍は去つて行つた。そして少女は一人ぼっちになつた」

気が狂いそうになるほど長い間、一人ぼっちだつた。

守ってくれるものはもうなかつた。

幼い頃は寂しくて寂しくてたまらなかつた。
ただぬくもりが欲しかつた。

ぱつりぱつりと語られる言葉はどれも胸を打つもののはずなのに、

真朱はなんの感情もなく呟いていた。

俺が静かに見つめていることにも気づかず、ただ吐き出される言葉は、過去の自分をただ眺めているだけの少し冷たいもので。

思わず起きあがつて彼女の髪に手を伸ばすと、びく、と肩が跳ねた。

「起きてたの」

眠っていると思ったからこそ吐き出された言葉だったのだということに気づかされて苦笑する。

「あんたが気づいていないだけで、ずっと起きてた」

不満げに真朱が目をそらした。

別に俺に自分の過去を語るつもりなんてなかつたんだろうに。それでも。

「…………辛かつたんだろう」

白い髪に触れながら呟くと、真朱はただ黙つてこちらを見た。

「同情はいらない」

射抜くような強い瞳がこちらを見る。赤い光がまるで燃え盛る炎のようにも見えて不思議だつた。

白く細い手が伸びてきて、首に回る。そのまま甘えるようにしがみつかれた。

「今は、一人じゃないもの」

あなたがいる。

そう耳元で囁かれた。

何年も何年も一人で生きて、ようやく見つけた「拾い物」だつたんだろう。人々に疎まれ、神からは汚物を見るように蔑まれ、ただ一人で生きてきた彼女にとつて倒れていた俺はまさに格好の愛玩動物だつたのだ。

普通の動物では、瞬きするほどのわずかな時しか生きられない。人間でもそれは大して変わらないことだが、彼女はその人間の理を崩した。

何度も何度も「私のもの」と主張するのは、冗談なんかではない。彼女は俺を自分の慰めにしたかつただけなんだ。身体も心も傷だらけになつた俺を 慰め合つものとして傍に置きたかつただけなんだ。

愛し方をどうの昔に忘れてしまつた彼女の、不器用な愛の求め方。それに気づいてしまつたら、その細い腕を振り払うことはできなかつた。

ぬくもりに餓えているのは、お互い様なのだから。

それから、幾度の季節が通り過ぎたのだろう。

両手で数えきれない季節を迎えた頃には、面倒で共にいる時を数えることをやめた。

彼女の奔放ぶりというのは相変わらずで 歪んでいるとしか言いつのない愛情表現もまるで変わらないままだつたけれど。

それでも甘えることだけは上手くなつた彼女に少なからずの安らぎを与えて、同じように安らぎを与えて、それが当たり前になつていたことは言うまでもなかつた。

東雲は彼女の田を盗んで様子を見に来てくれていたし、彼女の性格に慣れてからはこれといった問題もない。

恋人のように振る舞う時もあれば、家族のように接する時もあつた。

唇を重ねることをもあつたし、ただ寄り添つように眠る時もあつた。

真朱という人は自由で、奔放で、我儘で そしてどこまでも孤

独で、優しさや愛情に飢えている。

それでも長い時を共に過ごすことでの、彼女自身も変わっていたのだろう。

優しさや愛情の、わずかな欠片でも、この俺から学んだのだろう。

そう。

確かに俺は真朱を愛していた。

不器用にしか振る舞えない、人を愛することが苦手な彼女を、心の底からいとおしいと思っていた。たとえ彼女が自分の身体を「人ならざるもの」に変えた張本人なのだとしても。

それでも、それすら彼女と共に生きるためにだつたのだと許せるくらいに 愛していた。

たとえ彼女が俺に与える愛情が、動物に与えるようなものだったとしても。

すべてを終わらせるあの時までは。

彼女と共に過ぐした時は、どれほどだつただならう。少なくとも人の一生より余りある時間だつたことは分かつていて。それでも彼女は出会つた頃とさして変わりなく、そして自分も老いないまま姿は少しも変わらなかつた。

流れゆく時間はとても長く、そしてとても短くも感じた。彼女と共に生きる時間はとても満ち足りていた。幸福だったとも言える時間だつた。一人共にいるのがいつからか自然なことで、別たれることの方が不自然だつた。

彼女に作られた存在だから。

だから、彼女が死ぬ時に自分の命も尽きると思つていた。

その日は、朝から嫌な胸騒ぎがした。胸のあたりを始終風が吹きすさぶように落ち着きがない。それが何故なのかも分からぬからただ気のせいだと思うしかなかつた。空はひどく澄んでいて、それがどこか不吉なもののように思えて。風がざわざわとざわめいているのがまるで自分の中の胸騒ぎと同調しているようにも感じた。

「…………ああ、そろそろかな」

突然隣の彼女がぽつりと呟く。

何が、と問おうとした瞬間に、その華奢な身体がぐらりと揺らいで倒れる。地面にぶつかる寸前に受け止めるが、真朱は嬉しそうに笑った。

「真朱！？」

抱きとめた彼女の身体は氷かと思ひほどに冷たく、そして顔は真っ青だった。

青白い手が伸びて、頬に触れた。ひんやりとした指先に、思いもよらなかつた別れを予感させられる。

しかしそれ以上にまさか、と思ひ気持ちの方が強かつた。

「……真朱？」

窺うように名前を呼ぶと、彼女は真っ青な顔のままで微笑む。冷たい指先はいとおしそうに頬を撫でる。

「さよならね、常盤」

それはいつそ清々しいくらいに潔い一言だった。

老いることのない身体でも、死が訪れないわけではないといつことはどこかで悟っていた。神とて永遠ではない。人から見れば永遠に等しい長い時を生きるから永遠に見えるだけだ。半分だけ神の血をひく真朱は、普通の神ほど長くは生きないのでどうといふことも予想できていた。

一世紀以上の時を共に過ごして、もしかしたらとこつ嫌な予感もあつた。

けれど、それはこんなにも突然に。
唐突に、やつてくるのか。

「真朱」

苦しくてそれ以上言葉を紡げなかつた。

俺を見上げて真朱は苦笑する。泣き出しそうな子供を慰めるみたいな目でこちらを見る。

「……あなたは、人ではないし、神でもない。命あるものだと言えるのかも分からぬ。私の力によつてこの世に縛りつけているわけでもないわ」

少しだけ苦しげに息を吐きながら真朱が告げる。
俺にとつてはとても残酷な事実を。

「あなたは死ねない。私が死んでも、永久に生き続けるでしょう」

その言葉は鋭利な刃となつて俺の胸を貫いた。

「……そんな、わけ」

ない、と口にしようとした唇に冷えた指先が触れる。それ以上は言つても無駄だとでもいいたげに。

「あなたの存在は、私にとつては神々に対する報復。神を超える存在を、紛い物の神である私が作る。皮肉でしょうか？」

そしてあなたはこうして存在して、神にも叶わない永遠を生きるんだから。

そう言つ真朱は本当に嬉しそうだった。

つまり。

「……俺は、おまえの復讐のためだけに存在していると？」

静かな問いは、微笑みによつて肯定された。

孤独な彼女を救うための存在なのだと。お互いの傷を癒し合つための存在なのだと。飢えた愛を捧げ続けていくことでお互いが幸福になれるのだと。

そう信じていたのに。

「死にたくても死ねない。そういう風に私は常磐を創つたから。神ですら到達し得ない長い時を生きることになるでしょうね。これからはずつと」

例えるなら何千年もそこに在つた岩や木のよつ」。

自然そのものと同じようなもので、命であるようで命でないものになり果てた。

重そうな身体を持ち上げて、彼女は微笑を浮かべたままで優しく口づける。冷たい唇に自分の体温を奪われて、ひんやりとした感覚が唇に残つた。

「生きてね、常盤。私のために」

それは願いでも何でもなくて、ただの呪詛。

こうして真朱は俺を生にしがみつかせた。

ふわりと、花のように優しく微笑んで。

冷たい指先は頬を離れ、地面に落ちた。赤い瞳は閉ざされて、身体は氷以上に冷えていった。

「真朱
！！」

それはどんな叫びだったのだろう。

愛した者を失った悲しみなのか。裏切られた怒りだったのか。腕の中の彼女はもはや人形のように動かなくなつて、静かな終焉を迎えていた。

首を搔き切ろうとしても。

心臓を貫こうとしても。

手首を切ろうとしても。

この命ともいえない時間を断ち切ろうとするが、決まって真朱の言葉を思い出して躊躇つてしまう。

愛情と憎悪は確かにそこに両立していて、同時に俺を責め立てた。いつからか死ぬということに希望を見出せなくなつて、ただ世界を渡り歩くだけになつた。

狂おしいほどの時間が経つ。

麻痺してしまつほどの長い時の中でもただ独り、彼女に憎しみにも似た感情を抱きながらただ流れにまかせて存在していた。

生きている、なんて言葉では表せない時の流れの中で。

再び彼女の欠片と巡り合う。

それは運命なのか、因果なのか 真朱の呪いなのか分からぬ。

月光が照らし出す中で、その少女は真朱とはまるで正反対の色を持つていて。

真朱とはまるで違う純粹さの中に、彼女に似た諦めにも似た感情を忍ばせていて。錯覚だと分かっているのにいとおしさで胸がいっぱいになつた。

その時の感情をどう表現すればいいのだろう。

『助けて 常磐!』

それはもう魔法のよくなつた一言。

救いを求めるように、俺の名前を呼ぶ、その声が。救いようのない何かに俺をまた縛りつけた。

パチ、と火が爆ぜた。

「……真朱はその後、魂だけの存在となつたといひを神々に封じられた」

それで終わりだ、と言いたげに東雲が黙り込む。

青藍は溢れそうな過去の重さにただパチパチと音を立てる火を見つめた。真朱と常磐について聞いても、自分の中から記憶らしい記憶は湧いてこない。

ただ、どこか懐かしいと感じるだけ。

「本来なら、おまえの存在はありえなかつた。転生する魂が、今もなお封じられているはずなんだから。だがおまえは存在し、そしてまた真朱も封じられている」

東雲の咳きには青藍の耳に確かに届いた。

「 私は ……」

何なんですか、という問いを青藍は飲み込んだ。たぶん、東雲に聞いても答えはないということを心のどこかで悟っていた。

東雲は心配そうにこちらを見ていた。

ただ青藍の中でただ一つ確証を得たことがあつて、それが予想通り青藍を打ちのめしていた。

頭の中がぐるぐるする。

「 ……少し、向こうの川に行つてきます。顔、洗いたくて」

精一杯笑顔を作つて東雲に言つと、東雲は少し躊躇つた後に「気をつけろよ」と送り出してくれた。

一度頷いて、立ち上がる。

川と言つても少し歩いただけの距離だ。心配するほど離れるわけでもない。東雲も青藍の心情を気遣つてくれているのだろう。

ふらりとした足取りですぐ近くの川まで向かい、川べりに腰を下ろす。

ぼんやりとした思考のまま川の水で顔を洗う。

冷たい水は、頭をはつきりさせてくれるかと思つたがそうでもなかつた。

ぐるぐると嫌な考えばかりが頭を巡つて、そして青藍の中にはもう最終的な決定が下されていた。

それを嫌だと拒むのは、たぶん自分の中の『真朱』の意思なのだ。

ううか。

ぼんやりと空を見上げると、星達が懸命に輝いて地上を照らしている。

「…………ときわ

会いたい。会いたくない。一つの感情のじりじりが青藍のものなんだろう。

泣くことも出来ずに佇んでいると、すぐ近くでしゃしゃと草を踏む音がした。背後ではないから、東雲ではない。そしてこんな山の中にいる人なんて 心当たりは一人しかいなかつた。
会つのが怖い。

それなのに、会いたくて仕方ないなんて。

「…………常盤?」

暗闇に呼びかけると、金色の髪の青年が少し気まずそうに姿を現した。

「…………せ?」

「あのね」

青藍、と自分の名前を呼ばれる前に言葉を遮つた。彼の口から、自分の名前を呟かれるのを聞きたくなかった。そんな、大事なとき

に出なかつた罪滅ぼしに名前を言つみたゝな真似。

「東雲様から、聞いた。真朱と常盤のこと」

真つ直ぐに常盤と見て言つと、彼は居心地悪そつて「やうか」と

呟く。

その続きを言つべきか否か迷つて、青藍は一度黙る。やつするとその場に嫌な沈黙が下りた。

常盤はこちらを見よつともせず、ただ俯いてくる。

随分と大人だと思つていたのに、こうして青藍の前に立つ常盤は叱られるのに怯えている子供みたいだ。

「常盤は、真朱を愛してたんだね」

自嘲氣味に問うと、常盤はやつとこちらを見た。

「それも、今となつてはもう分からぬ」

愛していたのか、憎んでいるのか。

ああ、この人は本当に馬鹿なんだな、と青藍は苦笑した。こんな子供の自分にも分かつことなのに、何十年、何百年と生きている彼は未だに分からぬなんて。

「愛してたんだよ。ううん、今も愛してるのかも」

青藍がきつぱりと言い切ると常盤は訝しげに眉を顰める。

「そんなわけはない。少なくとも今はあいつに対してそんな感情を抱く余裕はないんだ」

「どうして？」

鋭く問うと、常盤は困つたよつに瞳を揺らした。綺麗な緑色の瞳がゆらゆらと揺らいでいる。

「愛してないなら、私なんて無視できたんだよ。人売りに捕まつた時にだつて、その後に私を置き去りにすることだってできたんだよ。それができなかつたつてことは、常盤がまだ真朱のこと愛している何よりの証拠だよ」

「違う！」

怯えるよつな叫び声に、青藍は怯えることはなかつた。

「違う！ 僕はもう、あいつのことなんて考えてない！ おまえを

助けたのだってそんな理由じゃ」

ふつりと青藍の中に怒りが湧いた。悲しみと怒りがじりかえりこなる。

だつて。

だつて常盤は。

ぎゅ、と拳を握り締めて唇を噛んだ。

「分からぬの？」

静かな間に、常盤の瞳がまた揺れる。

「どうしてそんなに真朱が憎いのか。どうしてそんなに苦しいのか。簡単じゃない」

どうしてまだ分からぬの。そう続けると、常盤は迷子の子供のよつな顔をする。

「こんなこと私に言わせないでよ。

私の口から私を傷つける止めを言わせないでよ。

「一緒に逝きたかったって思つくりー 真朱のこと愛していたんじゃない！――」

言いたくなかった答えを張り裂けるくらいの声で叫んだ。

「遺されたのが辛いって思つくりー 真朱が好きだったんじゃない！

死ぬ時は一緒に逝きたって願うくらいに愛していたんじゃない！

！ 長い時の中でもまた見つけた真朱の欠片の私なんかに気をとられるくらいに、私に真朱を重ねるくらいに 真朱のことを必要としているんじゃない！――

知らず知らずに涙が流れた。

頬を伝う涙が熱い。叫んだ喉が痛い。それでも何より胸が苦しい。

「せい……」

「呼ばないで」

あっぱりと常盤の声を遮つて、涙で濡れた瞳でしつかりと彼を見た。

「私の名前を言いながら、他の人を重ねるくらいなら、呼ばないで
そんなの、私が辛いだけだ。

「……私は常磐が好きだけど、それは私の気持ちだって言えるけど、
でももう傍にいるのは無理だよ」

告げた瞬間、常磐の瞳が大きく揺れた。

だつて、そうでしょう？

涙はまだ溢れて流れる。これが自分にとつても辛い選択であることは分かっている。けれど最善はこれしかなかつた。

「私は、常磐を駄目にする」

だから、さよなら。

常磐が真朱を求めるることは仕方ないことで、そして私がこうして存在してしまつているのも、もう消し去れることではない。

常磐はたぶん、私と一緒にいればいるほど狂っていく。

もういらない真朱の影に惑わされて、そして私への愛を錯覚して。

常磐が私を駄目にするんじゃない。私が常磐を壊していく。

唇を噛みしめて、さよならは口に出せないまま踵を返す。強く握りしめた拳が少し痛いくらいだったけれど、その方が愚かな行動をしないように戒められる。

溢れる涙は止まらないままだけど。

「 青藍ー！」

背後で叫ばれた自分の名前が痛い。

それでも私は振り返ることをせずに、彼から離れた。

23・遠い日のトド（一）

苦しい。
苦しい。

苦しくて苦しくて苦しくて氣が狂いやつなまじい。

類をつたつた涙がまるで他人事のように地に落ちた。
自分の中の何かが無理やり引き剥がされたかのように胸が痛い。

名前を呼ぼうとした。

しかしそれは声にならず、弾いていたはずの小さな胸中まじんび
ん遠ざかっていく。

苦しい。

傍にいても離れていてもこの身が苛まれるとこりのない、せめて。

長い黒髪が風に舞つた。

少年のような姿の少女は、微笑みながり薬草の手入れをしてくる。

「青藍」

名を呼ぶと、青藍はぱっと顔を上げた。

「東雲様。お帰りだつたんですか？」

土で汚れた手を払いながら青藍は小走りに駆け寄つてくる。

「ああ、お土産もある。お茶にしようか」

「はい！ 今淹れますね！」

嬉しそうに笑つて青藍はぱたぱたと駆けていく。肩に届くかどりかといつた短い髪は、一年という歳月のおかげで背を覆つほどまで伸びた。美しい衣装を着ればそれは可愛らしいだろうに、青藍は少年の格好を好む。曰く、この方が動きやすいとか。

青藍が常磐のもとを離れて、二年。

『東雲様のもとに置いてください』

赤い目をしてそう青藍が言いだして、もう一年になる。一人で生きることはできない。ただでさえ神々に目をつけられている。しかし、もう常磐と一緒にいることはできない。

幼くも潔い青藍の決意を、東雲はただ静かに受け止めた。もとより、東雲はそのつもりだった。

常磐が『青藍』と『真朱』を区別できない以上、共にあるべきではないと。常磐が青藍を真朱と呼んだあの瞬間から、東雲は一人を引き離そつと決めていた。

そして生まれた時からずっと見守り続けてきた青藍は、東雲にとっては娘も同然だった。その彼女が望むのだから、何も躊躇つことなどない。

ここには、人の住む地から離れた山の上にある東雲の屋敷だ。人神である東雲が、人の世を見守る為に建てたもの。

普通の人間がここを訪れる事はまずない。人の往来が絶えて久しい場所であるし、青藍がここに住まうようになつてからは屋敷の周囲に特殊な結界を張つた。天上の神々には東雲が青藍の監視をするという形で、保護することを許されている。

青藍は屋敷の庭の一角で薬草を育て、それを薬にして時折人里へ

売りに行く。その時はいつも東雲が付き添うようにしている。

薬草の手入れをしている以外の時間は、屋敷にある蔵書で勉強しているようだ。貧しい家に生まれ、親を亡くしてしまってからはあまり学校へも行けなかつたようだから、学ぶ欲求は人一倍あるのだ

うつ。

「東雲様、どうぞ」

につこりと笑いながら青藍は東雲の前にお茶を差しだす。微笑み返すと、青藍は向かいの席に腰を下ろしてお茶に口をつけた。土産の菓子をつまむ姿は幸せそうだ。

「留守にしていた、何かあつたか？」

東雲は曲がりなりにも神の一人だ。

いつも暇というわけではなく、人神として人々の様子を見に行くこともあるし、神々と顔を合わせる為に屋敷を空けることもある。そういう時は青藍は大抵留守番だ。

「いいえ、特には。いつも通り誰もやつてきていませんし。……ああ、庭の山茶花が咲きましたよ」

ほら、と青藍が指差す先に、赤い花が美しい姿でこぢらの田を楽しませてくれる。

「ああ、本当だ。まあ……何もないのならいい。一人で退屈ではないのか」

「一人で過ごすことには慣れているので、大丈夫ですよ」

申し訳なさそうに問いかけると、青藍は何の憂いもなく微笑んで返す。

思えば小さな頃から一人でいることが多い子供だった。唯一側にいるのは母親だけ。年の近い子供と親しげにしている姿を見た覚えが東雲はなかつた。

だからこそ、そんな子供が執着した常磐の側にいたせてやりたいと思ったのも、事実だ。

しかしその執着は青藍のものなのか、真朱のものなのかも東雲に

も分からぬ。そもそも青藍といふ存在自体が謎なのだ。

真朱の記憶を持ち、真朱と同じ気配のある魂。けれど真朱の魂は未だ天上の神々によつて囚われている以上、生まれ変わりという簡単な言葉では片づけられない。

「…………

一度確かめる必要があるのだろうか、と難しい表情で茶を飲むと、青藍が首を傾げてこちらを見る。

「お口に合いませんでした？」

どうやら茶がまずかつたから渋い顔をしたのだと思われたらしい。東雲は優しく微笑んで「いや」と答えた。

「考え」としていただけだ。すまない」

「考え」と、ですか？」

「ああ、まあ、いろいろとな

おまえについて考えていた、なんて言つわけにもいかずには笑つて誤魔化した。この二年の生活で 青藍は『常磐』とも『真朱』とも口になくなつた。来たばかりの頃は寂しさで独り泣いていたこともあつたようだが。

自力で振り切つたといつのなら、下手に名前を口にしない方がいいだらう。

「そろそろまた薬を売りに行くのだらう? ついでに欲しいものがあれば買つてやるぞ?」

人里に下りるのは一、二か月に一回程度だ。その時にいろいろ買ひ込むのだが、青藍は薬を売つた金で生活必需品しか買わない。食料などの金は無理やり東雲が払うようにしているが、それ以外で青藍が必要としているものは自分で稼いで自分で払うと頑なに主張されてしまつたのだ。

けれど親心としては、ともどきせはいつして青藍を甘やかしたい。

「いえ、そんな……」

悪いですから、と青藍がまた遠慮するので、東雲は笑つて続ける。

「たまにはいいだらう。何かないか?」

「……ええと、その、新しい本が欲しいです。ここに本はほとんど
読んでしまったので」

おずおずと欲しいものを口にした青藍に微笑みかけ、「では下り
たときな」と約束を取り付けておく。

女の子らしいものを欲しいと言わないあたりが青藍らしさしか
言いようがない。せめて髪飾りの一つでも贈ろうかと何度も思つたこ
とか。

「東雲様、お代わりは？」

「ああ、もうおひ」

静かに流れる時間の中で、青藍の心が穏やかであればいいと思う。
何にも心乱されることなく、何にも惑わされることなく、ただこ
の少女が幸せであつてくれればいい。

ただそれだけを、祈つていた。

23・遠い空の下で（一）（後書き）

大変お待たせしました。

常磐との決別を決意した青藍のその後の物語が始まります。

青藍はどう生きていくのか、青藍と別れた常磐は。

求めあつた故に離れた二人はこの先も相容れないのか。

これから行く末を見守つてくださいませ。

24・遠い空の下で（2）

どれほどの時が過ぎただろう。
どれだけの涙が流れただろう。
感覺はほとんどなくなつていてる。
ただ記憶だけが鮮明で、小さくなつていくあの背中だけが脳裏から離れない。

乾いた唇からは言葉は生まれない。
木々の合間から見える空に手を伸ばして、その青さに触れようとする。

「

……

その色は、まるで彼女の。

賑わう町中は久しぶりに訪れると人の波に飲まれそうになる。

「わ、わわわ！」

大人の男の人とぶつかつてよろけると、東雲様の腕が私の背を受け止める。

「大丈夫か」

「あ、ありがとうございます、東雲様」

ほっと息を吐いてお礼を言うと、東雲様は優しく微笑んでくれる。そして手を差し出してきたので、少し戸惑いつつもその大きな手

を握りしめる。逞しいその手は、私が知っている手とはまるで違う。「薬はもう店に売つて来たんだろう。なら約束とおり本を見に行くか」

「はい！」

離れないようにとしつかりと繋がれた大きなてのひらに絶対的な安心感を得る。以前　こんな町中で彼とはぐれて一人になつたことがあつたな、と淡く微笑む。

会わなくなつて、どのくらいだらう。
触れなくなつて、どのくらいあるう。

ふとこうして彼を思い出すたびに胸がひどく切なくなる。
胸を締め付けられるような感覚に呼吸すらままならない。

……会いたい。

それは、口に出してはならない願いだつた。

「青藍、どうした？」

東雲様に声をかけられて、はつとする。
気がつけば既に本屋まで来ていたらしい。古い紙の匂いが香つて
いる。

「あ、な、なんでもないです……」

慌てて笑顔を作ると東雲様が苦笑する。ぽんぽん、と頭を撫でられて心中まで見透かされたような感覚になつた。
まるで大丈夫か、と問われているようだ。

「……大丈夫ですよ？」

苦笑しながら東雲様を見上げると、少しだけ驚いたような顔をする。

くす、と笑つてもう一度「大丈夫です」と呟く。

まるで自分に言い聞かせるための魔法の呪文のように。やつする」とで本当に大丈夫なんだと思い込むために。

それから一冊の本を選んで、屋敷へと戻るはず だつたんだけれど。

街に来るたびに東雲様は私に服を買おうとするものだから、今回だけは少し私の方が折ることにする。

東雲様は私がいつも男の子の格好をしているのが不満らしい。薬草の手入れをするのも屋敷の掃除をするのも、この方が動きやすいのに。

これがいい、と東雲様や店員の人勧める服をされるがままに試着する。

「……これでいいですか？」

無理やりに渡された水色の服を試着して東雲様に見せると、満足そうに頷かれた。

「そういう服を着ると年相応の女の子だな」

可愛い、と褒めながら東雲様は私の頭を撫でる。

「あと……そうだな、さつき着てた赤い服も似合つていたな」

この際だから何着か買っておくか、と言いだす東雲様に頭を抱えたくなる。

さつき試着した赤い服を店員が持ってくる。その鮮やかな赤に、嫌な記憶が蘇つてきて。

一人の、女の名前を思い出す。

「東雲様」

くいつ、と東雲様の服の裾を引っ張る。

「どうした？」

「赤い服は嫌です」

きつぱりと言い切った私に東雲様も店員も驚いた顔を見せる。

「……なんだか、落ち着かないの」

それらしい理由が思いつかなくて、それだけぽつりと呟く。それだけなのに、東雲様には伝わってしまったのだろうか。

「そういえば、ああいう色はあまり着なかつたな」

苦笑して東雲様は他の服を選んだ。董色の服と、深い青の服。どちらも華美な飾りはないけれど、私には充分に可愛らしい服だ。

「せつかくだ、そのまま着て帰ろ!」

着替えさせたらしばらく袖を通さないと思われているのだろう、水色の服を着たままで私は屋敷へと帰ることになってしまった。

「あれ?」

屋敷の前 門の前に人影を見つけた。

この山は普通の人人がやつてくることがほとんどない。少なくとも私は、屋敷に私と東雲様以外がいるところを見たことがない。

「東雲様、誰か……」

いますよ、と袖を引いて言つと、東雲様は気づいていたようであるで驚かない。

「やはり戻つてきていたか」

ふう、とため息を吐き出して東雲様は門の前にいる人へと歩み寄る。慌てて東雲様を追いかけると、その人はどうやら 少年のようだ。たぶん、見た目の年齢は私とあまり変わらない。

「山吹」

東雲様が声をかけると、少年はぱつと顔をあげる。

「あー! 帰つて来た! どこに行つてたんですか、主様! 久しうりに戻つたら変な結界張られてるし中には主様の気配はないし知らないうちに拠点移したんじゃないかと不安だつたんですよ!」

「騒ぐな。六年ぶりに戻つて来た役に立たん式がいっぱいの口をきくな」

山吹と呼ばれた少年は東雲様に抱きつこうとして そして全力で拒まれていた。

「え、そんなになります? 僕としては三年くらいな感覚だつたんですけど」

「まつたく、おまえは……」

報告は後にしろ、と東雲様は呆れたように咳いて、そして振り返つて私を見る。

青藍、と私の名前を口にしようとして 少年に遮られる。

「あー！？ なんですか、なんなんですか、東雲様ってそういう趣味ですか！？ 僕がいない間に随分と趣向が変わつ……」

東雲様の後ろから顔を出した少年は私の姿を見るなり急に騒ぎ出したけれど 後半は東雲様の拳骨が落ちてきてあまりの痛みに黙り込んだ。

「黙れ。青藍、これはいなものと思つて構わないからな」「え、えーと……」

いなものとするにはあまりにも存在感がある気がする。

「せいらん？ セいらん？ ……あ、もしかしてあの青藍！？」

がばつと顔を上げて少年はまじまじと私の顔を見る。間近に迫る可愛らしい顔に、私は思わず一步下がる。

「うん、面影が残つてる。まさかこいつして会えるとは思つてなかつたなー」

「あ、あのー……」

東雲様、と助けを求めるにと東雲様が盛大なため息を吐き出して少年の首を摘みあげる。

「仕方ない。青藍、これは山吹。私の式だ」

「よろしく！」

猫のように摘み上げられているのに山吹はあるで氣にした様子なく手を振つて笑う。

「……よろしくお願ひします。その、式つて……」

なんですか、と問うと東雲様は微笑んで答えた。

「神の造る使い魔だ。人のように見えるがこれは人ではない。山吹はもともと屋敷に植えてある山吹の花から造ったんだ」

「あの山吹ですか……」

そういえば毎年綺麗な花を咲かせている山吹があつた。

神様が造る、偽物の命。

「それじゃあ……」

ふと浮かんだ問いを口にしようとして、途中でやめる。

「とにかく、屋敷へ入ろう。青蘿。お茶を淹れてくれるか？ 買つてきたお菓子を食べよ！」

「あ、はい」

俺のも！ と主張する山吹の頭を東雲様が叩いていたけど……これは何人分用意すればいいんだろう、と少し悩みながら屋敷に入つてお茶の用意を始める。

神様が、人に似せたものを造り命を『与える』ことのなり。

常磐は、真朱の『式』ということになるんだろうか？

浮かんだ疑問は口にするにはあまりに重く、そして言葉にしたら今でも胸を刺す痛みを孕みそうだった。

25・遠い空の上で（3）

生きているのか、死んでいるのかも分からなくなつていく中で、ただ一つ確かに残るものが一つ。

重い瞼を閉じると、その姿はすぐに思い出せた。

おかしな話だ。

数年前まで、やうやつて思い起こしていた人と、今思い出す人は違うのだから。

いつの間にここまで大きくなつていたんだろう、彼女の存在は。いつの間にここまで捕らわれていたんだろうか。

今更気づいても、遅いと言つのに。

「おーい」

ぽんやりとお茶の準備をしていると、間の抜けた声が耳に届いた。

「え？」

はつと意識を戻すと、目の前に濃い金髪の少年　山吹が立っていた。

「どうした？　具合でも悪い？」

心配そうに覗き込んでくる瞳に吸い込まれそうな錯覚を覚える。首を傾げてこちらを見つめてくるので、私は慌てて首を横に振った。

「へ、平気。ぼうつとしてただけ」

「そうか？　ならいいんだけどさ！　主様が待ってる、行こう」

そう言いながら山吹はお盆を私から奪い取るように持つてくれた。揺れた拍子に茶器が

かちや、と音をたてる。

「主様つて、東雲様のことだよね？」

「うん？ 主様は主様だから。俺の命の形を変えて、こうして動けるようにしてくれた」

「命の形を変える？ 命を『与える』じゃなくて？」

首を傾げると、山吹は頬を膨らましながら振り返る。

「おかしなことを言うんだな。花にも命はある。神様はその命に力を『与えて』こうして動けるようにしてくれただけだ。命のないものに命を『与える』ことができるのは、天上の神様だって難しいよ」

「あ、」

「そうだ。東雲様だつて造ったとは言つたけど、命を造つただなんて言つていらないんだ。」

「そうだよね、うん、そうだ……」

確かめるように何度も頷く。

そしてまた真朱や常磐のことを考えてこじとづいて、胸がぎゅっと痛くなつた。考えれば苦しいのに、どうして忘れる事はできないんだろう。

「……どうした？ やっぱり具合悪いのか？」

先程まで少し不機嫌そつだつた山吹が、慌てた様子で私の顔を見る。

「違う、大丈夫だよ」

心配かけまいと微笑むと、山吹は黙つて私の顔を見つめてきた。まつすぐな目に見つめられると、目がそらせなくて困る。

「あ、あの？」

どうしたの、と問おうとするとい、するりと伸びてきた手が私の頬をつねる。

「ふへ？」

「変な顔するな」

むすつとした顔で言われ、私はますます困る。つねつている手はそのままだ。さほど強くないから痛いわけではないけれど、どうすればいいのか分からない。

「女の子は元気に笑つてるのが一番なんだ。悲しそうな顔していると周りも辛い。おまえはここでたつた一人の女の子なんだから、元気にしてなくちゃ」

早口にそう言つと、山吹は私の頬から手を離した。

「ふいっと顔を背けるとそのまま廊下をすたすたと歩いていつてしまつ。その後ろ姿はなんだか少し照れているようにも見えた。

「……励ましたんだろうか、と思う。

つねられた頬にそつと触れながら、その場に立ちつくす。別に無理をしているつもりはない。言葉にすれば辛くなるだけだから、自分の中で飲み込んでいるだけだ。

「……ふつ

良く分からぬけれど、なぜかおかしくなつた。

自然と笑みが零れると、鬱々としていた気分が晴れる。

「ねえ！ 待つて！」

声をかけて走り出すと、山吹はぴたりと立ち止まってこちらを振り向く。まるで飼い主においてけぼりにされた子犬みたいな顔で、私はますますおかしくなつた。置いていたかれたのは私なのに。

「行こう。東雲様が待つてる」

笑いかけながら言つと、山吹はじつと私を見たあとで満足そうに笑う。

東雲様が私に向ける笑顔とも違う。東雲様はいつも見守るような暖かい微笑みをくれるだけだ。

一緒に笑いあえるような そんな明るい笑顔に心は自然と軽くなつた。

東雲の田にも、青藍は明るい笑顔を見せようになつた。

影響は 考えるまでもないだらう。

「東雲様？」

青藍がお茶を用意しながら話しかけてきた。うん？ と微笑んで答えると、青藍は柔らかく微笑んだ。

「考え」とですか？ ぼつとしましたよ？」

「まあ、そんなところだ」

おまえのことを考えていたんだよ、と口にするときはまるで恋人に向ける言葉のようだと東雲は笑う。

「山吹を呼んできますね」

お茶の準備が整うと、青藍は式の少年を呼びに姿を消す。

山吹が東雲のもとに戻つて来たのは、ほとんど偶然みたいなものだ。東雲が呼び寄せたわけではない。ただ青藍にとつては良いタイミングだつたのかもしれない。

山吹も青藍を気にいったのだろうか。いつもなら報告を済ませるとすぐにまたどこかへと行くくせに、今回は随分と長く館に居座っている。

窓の向い側をぼんやりと見つめながら考える。

そろそろだらうか、と。

東雲は常に青藍を優先してきた。常磐と青藍、真朱と青藍、どう天秤にかけても東雲にとつて重いのは青藍だ。幼い頃から見てきた存在だから 他のどんなものよりも気にかかるし、幸せになつてほしいという欲求がある。

だからあの時、青藍が常磐との別れを決断した時、東雲は常磐を放置した。そもそもの原因是常磐にある。頭を冷やす必要があるだらうとも思った。

そしてしばらくしてから様子を見に行くと、常磐は青藍と別れたであろうその場所から一歩も動いていなかつた。

生氣のない瞳が映すのは空だけだつた。東雲の声すら届かないであらう状況に、さすがの東雲も少し焦つたが 常磐はどれだけその場所で過ごしそうとも死ねなかつた。否、今の彼は死を求めている

わけではないのだろう。ただ動けないだけなのだ。青藍といつ存在がないから。

そして逃避するように常磐は眠りに落ちては目覚めていた。一步も動かず、ただ夢と現実を行き来しては青藍を想う。

常磐がそんな状態になつていると、青藍に伝えたらどうなるだろうか？

自分の存在が常磐にとつて毒なのだと、そう思つて別れを決断したのに 結局常磐は青藍なしには生きていいく氣力すらもてない駄目な男だつたなんて。傍にいても傍にいなくて、常磐は青藍によつて壊れていく。そんな現実を知つてしまつたら。

「はつきりさせた方が、いいんだろうな」

一人の為にも、と呟くと、向こうから青藍と山吹がやつて来る。

ちょうどいい、しばらく留守にすると告げて、一人に留守番を頼もう。

もはや青藍は慣れたものだらうし、山吹がいれば少しは気が紛れるだらう。山吹が青藍を見ている間に どこぞの駄目男を叩き起こしてこなければ。

26・君を望むひとが罪じやないなら（一）

東雲様がいな屋敷は、いつも以上に静かになっていた。
けれど、今回ばかりは騒がしい。

「青藍、何してるんだ？」

薬草の手入れをしていると、山吹が私の隣にしゃがんで問い合わせてくる。一見すると私よりも年下のようだけど、子どもっぽい行動と違つて何十年も生きているのだろう。

「……薬草の手入れをしてたの。放つておくと、雑草がすぐ生えちゃうから」

「そんなことしなくともさ、主様に頼めば何でもしてくれるし、何でも買つてくれると思うけどな。青藍には甘いし」

そう言いながら山吹は田についた雑草を引っこ抜く。

「全部東雲様に甘えるのは、ちょっとね。こいつしてこいに住ませてもらつてるだけでもありがたいのに」

と、言いながらも 東雲様は私から田を離すわけにはいかないのだろう。天上の神様にまで問題視されてしまつてはいるんだから。「それを気にする必要はないんだ。だつて主様は人神なんだから。人神は本来人間の為の神様だつたんだから」

「でも、私つてその人間の分類に入るのかな」

「冗談交じりに笑うと、山吹は困ったような顔をする。しまつたと思つたのはその顔を見てからだ。

「……あのね」

気にしなくていいよ、と誤魔化そうとした。

私が一体何者なのか、なんて。そんな疑問を抱いてはいること自体、どう足搔いても答えを得ることができないことなの。

「青藍」

しかし山吹は私の言葉を遮るように私の名前を呼ぶ。少し大きな

手が私の手を握りしめて、そつと包み込んだ。

「俺も主様も、青藍が生まれた時から知ってる。その頃は俺もあんまり出歩いていない時だったんだ。……星の、綺麗な夜だった。白い人の気配を感じて、俺と主様で様子を見に行つて そこで君は生まれていた」

懐かしいな、と山吹は笑う。少年のような顔立ちの中に、急に大人っぽい空気を感じて頬が熱くなつた。白い人、といつのはたぶん真朱のことなんだろう。

「人から人でないものは生まれないよ。青藍がどんな運命を持つていふとしても、青藍は人間なんだ」

ぎゅ、と確かに握り締めてくれる山吹のぬくもりが心に染みるようだつた。

誰かに言つてほしい言葉だつたのかもしれない じんわりと頭が熱くなつて、そのまま山吹の肩に額を押しつける。

「青藍？」

山吹が慌てたように離れようとするけれど やがて背中をぽんぽん、と優しく叩かれる。一定のリズムで。

不安だつた。

自分は何なんだろう、と。

私という存在を確かにしてくれる存在はもついたかった。以前のように無条件に愛してくれる母さんはいない。常磐が注いでくれた愛情は『青藍』に与えられていたものではなかつた。真朱という影がある限り 東雲様が与えてくれる優しさも疑つてしまつ自分が嫌だつた。

声も出さずに静かに泣いて、そして自分で整理がついたところで顔を上げた。山吹が目だけで「大丈夫?」と問いかけてくる。

子犬みたいな目に思わず笑みが零れて

「山吹つて、何歳なの？」

きょとん、と山吹の瞳が揺れて　そして「あー……」と考え込む。

「五十、歳くらい？　かな？」

「……くらい、かな、なんだ」

「うん、たぶん。花だった頃も含めるともうと長いけど、式になつてからはそれくらいだと思つ」

たぶん、とかだと思つ、といつ言葉からして正確には覚えていないんだろう。たぶん東雲様も自分の年齢なんて覚えていないだろう。人とは違う、長すぎる時を生きているから。

常磐も、数え切れない年月を超えて生きてきた。

「青藍？」

急に黙り込んだ私を見て山吹が首を傾げる。

「あ、なんでもないよ」

咄嗟に笑顔を取り繕つて、自分の中に湧き上がった感情に蓋をする。

私は、長い時を生きることはできない。

この人達とは違う生き物だから。

それならば、いつも。

人でなかつた方が、良かつたかもしれない、なんて。

常磐は、今もそこにはあった。

今回は起きているようだ。起きているといつても、意識があるかどうかは定かではないが。

緑色の瞳が、ぼんやりと空を見上げている。

「……いつまでそうしているつもりだ？」

問いかけても返事はない。瞳は空を映したまま、じらじらをじらり

とも見ることもない。

乾いた唇がかすかに動く。青藍、とそのままのよひに言つたように見えたのは気のせいだったのだろうか。

「会いたいのか」

誰に、とあえて言つことはしなかつた。

緑の瞳がわずかに光を増した。深いその緑色は、まるで何かを訴えるようにこちらを見つめてくる。

「……いつまでそうしている。会いたいのなら、自分から動け。おまえにとつての時が悠久であるとしても、現実の時は待たない。おまえがぼんやりとしているうちに、取り返しのつかないことになる可能性だつてある」

青藍、とまた唇が動く。

一人が別れて、一年の時が経っている。当時はまだ幼さを残していた青藍も、今では立派な女性とまでいえるほどに成長した。髪は長く、美しくなり、丸みをおびた身体は大人と少女の狭間にあるようだ。

「青藍は前を見る。前に進もうとしている。おまえは、そこで置いていかれるだけか？」

また、と付け足すと、常磐は静かにこちらを睨みつけてきた。

「おまえに睨まれたところで俺は何も思わないぞ。おまえは逃げているだけだろう。青藍を求めて、青藍にまた拒絶されることに怯えている。真朱に置いていかれたことを嘆いていた時をまるで変わらないな」

「黙れ！」

険しい表情で常磐が叫ぶ。やつとじやべったな、といぢりはただ冷静に見下ろすだけだ。

「俺だって、これほど焦がれているなんて思つてなかつたさー 守

つてゐつもりだつた！　自分が支えられていたなんて　その支え
を失つて動けなくなるなんて、考へてもいなかつた！」
吐き捨てるような言葉は、誰かに言つていいというよりは、むし
ろ　自分に、確かめるように呟んでいた。しか見えなかつた。
苦しげに地を見つめながら、常盤はやがて、力が抜けたように呟く。
「ほんに……」

まるで、まだ認められずにしてゐるよつ。

「ほんに、愛していたなんて、気づかなかつた」

27・君を望むことが罪じやないなら（2）

東雲が屋敷を空けて、一週間が経とうとしていた。

普段はそれ以上に帰つて来ないことが多い。それなのに今回ばかりは気になつた。いつもならばどこへ行くのか、何をして行くのか 青藍が知り得て問題ない程度には教えてくれる東雲が、今回は「ちょっとな」と言葉を濁したまま出ていってしまった。

青藍をよく思つていらない天上の神のもとへ行く時でさえ、説明を欠かさなかつた東雲が初めてとつた行動に、青藍は違和感を感じて仕方ない。

数日前から降り始めた雨のおかげで外へ出れない分、余計にそんな考えは深まつていくばかりだ。

雨に打たれ色を増していく庭の縁は 愛しい人の瞳を思い起こされるもので。

ああ、駄目だ。

即座に思考を停止させて、それ以上考えることを拒む。

思い出せば思い出すほど、会いたくなるだけだ。会つて辛いのは自分だとわかつているくせに、それでも中毒のようになに彼に会いたくなる。

「会いたくない！」

耳を塞ぎ、目を瞑り、しゃがみこんで声を張り上げる。

「会いたくない会いたくない会いたくない会いたくない！」
それはもう癖のようなものだった。

常磐と別れ、それでも常磐に焦がれるようになつてから 自分に言い聞かせるために続けた行為。会いたくて仕方ないと思った時に、その気持ちさえも拒絕するためだ。

いつもはやうして気持ちを落ちつけた。それなのにどうしてだろうか。

今日に限って、それでは治まらなかつた。

ぐにゅりと視界が歪んで、瞳から涙が零れ落ちる。外の雨につら
れただろうか、涙は溢れるばかりで止まることを知らない。

苦しい。

会いたくて苦しい。

会えなくて苦しい。

触れられない。触れたい。傍にいたい。傍にいられない。

「

ときわ。

唇が勝手に音無く呟く。

その瞬間に溢れ出る想いに、瞳から流れる涙はよりいつそう止ま
らなくなる。もう限界なのかもしれない。

私は常磐を壊してしまつ。

けれど常磐に会えない日々は私を確実に壊していく。

「

青藍？

心配そうな声が、青藍を一人の世界から引きもどした。顔を上げ
てみれば、そこにはどうしたら良いのか分からずに立ちつくしてい
る山吹がいた。

「大丈夫、か？」

山吹は目線を会わせるように、私の前にしゃがむ。おずおずと伸
ばされた手がそつと壊れ物に触れるように涙を拭ってくれた。涙で

冷えた頬に感じるささやかなぬくもりが、凍つっていた心を徐々に溶かしていくようだった。

我儘だつて、分かつているのに。

欲しいものなんて持たなければ、苦しまなくて済む。手に入れてはいけないものに焦がれて泣き叫ぶこともしなくて済む。私一人が、耐えて我慢していればいいだけ。

「どうした？ 何があつた？」

よしよしと、見かけだけは大して年の変わらない山吹に頭を撫でられ、慰められる。これが東雲様ではなかつたからだろう、自分に課していた鎖が緩んでいくのが分かつた。

「…………たい」

ぱつりと願いは唇から漏れた。

「青藍？」

よく聞こえなかつたのだろう、私の小さな願望を聞きかえす山吹に、しがみ付いて涙も堪えずに叫んだ。止めるのことなんてもう出来なかつた。

「常磐に会いたい！ 会つて話がしたい声が聞きたい離れてるものやだ、ずつとずつとずつと傍にいたい！ 傍にいていいんだよって許されたい！ 常磐にっ！」

そこから先の願いを口にすることを躊躇つて、山吹を見上げる。山吹は泣き叫ぶ私にまるで動じることなく、ただ優しく笑つていた。いつもの山吹じゃないみたい。これじゃあいつもと立場が逆だ。それなのに、その笑顔が「言つていいんだよ」と言つてこような気がして。

「…………常磐に、青藍つて……呼んでほしい」

誰かを重ねた私じゃなくて。

私自身を想つて、私自身の名前を。

常磐に私の存在を認めて欲しい。常磐の中で『青藍』という存在を確かに焼き付けたい。真朱の欠片なんかじやない、確かな私を。

山吹は子どもをあやすように私の背中をぽんぽんと叩く。

片方の手がまた頭を優しく撫でて、ほつとするような安堵感に気が抜けた。

「青藍は、少しくらい我儘になつていいいんだよ」

良い子過ぎるから、と山吹が優しく囁く。

小さな頃から母さんと一人きりで、母さんを亡くしてからは一人で生きてきた。村人に売り払われて、奴隸商の男達から逃げ出して、常磐と出会つまで 甘える、なんてする機会はそつ多くなかつた。

常磐も東雲様も、私を甘やかす。今でも充分すぎるくらいなんだから、これ以上を求めるなんて贅沢過ぎる。そう思つていた。

「みんな、青藍のことが大好きだから、我儘言つてほしいんだ」

……我儘、とか。

「言つて、嫌つて思われないないかな？ 嫌われたり、しないかな？」

それだけがずっと不安で、自分が望んでいることを隠すことほとんど得意になつていつた。

山吹は優しく微笑んで「どうして？」と問い合わせてくる。

「大好きな人の望みを叶えることが、嫌なことになる？ その人を笑顔にすることが、面倒なことになる？」

静かに降る雨みたいに、山吹の言葉は胸の砂地にしみ込んでいく。するりと言葉は飲み込まれて、何故か分からなければ納得できてしまう。

「だから青藍も言つていいんだよ」

優しく頭を撫でてくれるぬくもりに、子どもみたいに安堵した。

いいのかな。

我儘になつても、いいのかな。

そんな躊躇いは胸の中にもだ残つてゐる。でも山吹の手が何度も「いいんだよ」と言つてくれて、強張つていた身体から力が抜けていく。

ゆるゆると訪れてきた睡魔に吸い込まれるように、山吹にもたれて眠りへと落ちていく。

それは不思議なくらいに穏やかな眠りの訪れだった。

28・君を望む」とが罪じゃないなら（3）

「……眠ったのか」

山吹が眠った青藍を抱き上げると、そんな声が聞こえた。
誰だと問うまでもない。山吹の主である東雲だ。

「戻られたんですか、主様」

いつ、と問おうとする山吹の手から東雲は青藍を受け取つて、軽々と抱き上げる。涙に濡れた寝顔を見つめる姿は我が子を見守る父親のようだ。

「今さつきだ」

「じゃあ、聞いていたんですか」

悪趣味ですよ、と山吹は呟く。おそらく青藍は東雲には聞かれたくなかったただの。おそらく山吹にだって知られたくなかったのだろうから。

自分の中で溢れだした願望を。

東雲は苦笑するだけで答えない。

「……願いを、叶えてやることはできないんですか

青藍の部屋へ向かう東雲のあとをゆっくりとついて行きながら山吹が口を開く。東雲の表情は後ろからではうががえない。

「青藍の願いを叶えることが出来るのは、この世でたつた一人だ」苦笑まじりのそのセリフに、山吹も黙り込む。何も出来ない自身にやるせなさを感じて拳を握り締める。

「そのたつた一人に、少しふつかけてきたが　どう出るかはあいつ次第だ」

月に照らされる金色の髪。

深い緑色の瞳。

大きく優しい手のひら。

低く響く声。

どれもどれも、恋しくて仕方ないあのひとのもの。胸が締め付けられるみたいに苦しかった。呼吸ができない。閉じた目からは熱い涙がぽろぽろと溢れた。

「ときわ」

彷徨うように手を伸ばす。

どれだけ手を伸ばしても、望む人は傍にいてくれない。否、自分から彼の傍を離れたのだ。

「ときわ」

それなのに求める。なんて矛盾だろう。夢につながれるように、何度も何度も名前を呼ぶ。

「青藍」

低い声が、聞こえた。

恋い焦がれた、いとおしい声だった。彷徨っていた手は大きな手のひらに包み込まれる。まるでそこが最初からあるべき場所であつたかのように、強く握り締められて安堵した。

「ここに、いるから」

少し戸惑うような声だった。

これは夢なんだろう、とそう思った。だつて彼がここにいるはずがないのだ。

「傍に、いるから」

それにしても迷子の手袋のよつた声だ。不安でしかたないことも言つよつた。

ああ、これが夢だとこゝのなら。

「……傍にして」

大きな手を強く握り返して、青藍は夢現の中で呟く。

「傍にして。もう離れないで」

夢の中で願うことにくらい、自由でしょ？

もう思いながら青藍は手のひらに感じるぬくもりだけを感じながら深く眠りへと落ちていぐ。夢も見ないほどに、深い深い眠りへ。

「…………う、ん？」

田を覚ますとまず最初に映るのは見慣れた高い天井。

傍らにぬくもりがないことを確認して、やつぱり夢だつたんだな、と苦笑した。あんな夢を見たんだるうなんて考えるまでもない。

「重症だな…………」

山吹にわめいただけでなく、夢にまで見てしまつなんて。手のひらにはまだぬくもりが残つてゐるような、そんな感覚さえあるのだから。

腕で視界を覆う。気を緩めれば涙が溢れてきそうだつた。夢の名残ともいえるぬくもりさえいとおしくて仕方ないなんて、本当に馬鹿だ。

今となつてはもう、常磐を想つての気持ちが自分のものなんだと言い切る自信もないのに。会えない月日が長くなれば長くなるほど、苦しくなつていく。それはまるで真朱の呪いのような気が 最近ではしてくる。

あの頃のよつて、常磐への想いに搖るぎない自信を持ってない自分

が嫌だ。

それなのに恋い焦がれる自分が嫌だ。

「駄目だ！」

そのまま寝台の上でじるじるとしていたら、気分が滅入るばかりだ。

起き上がりつて窓の向こうを見ると、綺麗な満月が浮かんでいた。雨は風間のうちに止んでしまったのだろう。

窓を開けて空気を吸うと、かすかに水の匂いがした。澄んだ空気が胸に心地よくしみ込んでいく。

庭に出るだけならば、問題はないだろう。

そう思つて私は音をたてないように静かに部屋から出でていった。

外に出ると満月に照らされて思ひのほか明るい。

ふう、と息を吐き出す。深呼吸すれば自分の中のぐれやぐれじた感情が薄れしていく気がした。

大丈夫、まだ頑張れる。

そう自分に言い聞かせて夜空を見上げた。

丸い月。かすかに光を放つ星達。常磐と出会つたのも、こんな夜だつた、と思い出してまた涙が出た。

月に照らされる彼は、この世のものとは思えないほどに綺麗で、そして心臓の奥から湧き上がるような強い感情の名前を、私は知らなかつた。

一目惚れなんて簡単な言葉じゃ片付かない。

これが真朱の魂による巡り合いでいうのなら、それでも構わなかつた。

愛しくて愛しくて愛しくて。

愛なんて言葉の意味を理解しきれていない子どもの私ですら、その言葉しか浮かばなかつた。それ以外の言葉はどれも的外れで、から回つてしまつ。

「常盤」

会いたいよ、と小さく呟く。

また静かに溢れてきた私の涙を隠すように、月が雲で翳つた。
明るい夜闇が、一瞬にして暗くなつていいく。足元の影すら闇に飲み込まれて、自分自身すら消えてしまいそうな不安がせりあがつてきた。

寂しいよ。助けてよ。傍にいてよ。

そんな願いを小さく呟く。

「青藍？」

ぱつりぱつりと漏らした呟きは、低い声に反射して止まる。

嗚呼。。。

顔を上げて前を見る。翳つた月がまた強い光を放つて地上を照らし始めた。飲み込みそうに深い闇は、すぐさまどこかへと消え去つて。。。

その人は、そこにいた。月光を受けて輝きを増す金の髪、深い森の緑瞳。美しいその人は、記憶の中の姿をまるで変わらない。

「常盤」

やはり、溢れる想いはただ一つ。

君が、いとおしい。

29・君を望む」とが罪じやないなら(4)

幻でも、夢でもいい。

誰かに許されなくともいい。

自分の存在が、常磐を傷つけるのだとしても、もひい。

「常磐」

身体は自然と駆け出した。寝起きの頭は冷静に考えることなんて忘れていて、本能だけで動いていた。

想いは今にも溢れだしそうで。

「常磐、常磐、常磐、常磐!」

駆け出して、常磐に抱きつぐ。拒まれることなく、常磐は優しく私を抱きとめた。

もう子どもじゃないのに、子どものように泣きじやくつて何度も「常磐」と呼んだ。抱きしめる身体から、常磐が困惑しているのだと気づいたけれど、自分から離れることは出来なかつた。

しつかりと、それでも優しく抱きしめてくれる存在を、手放すなんてもう出来ない。

「青藍」

低い声が私の名前を呼ぶ。

胸が痛んだ。この人に名前を呼ばると、いつも胸が苦しくなる。常磐が私の髪を撫でる。優しいその仕草に、懐かしさを覚えて涙が出た。私はこんなにもこの人を求めていたんだと思い知らされる

ようだつた。

ぬくもりに酔いしれながら、再び巡り出されたことを幸運に思つ。そしてよつやく、言ひつけのない罪悪感が胸から溢れだしてきた。「「」め、なさい。私は常磐を駄目にするのに、会いたいって思つて「ごめんなさい。傍にいたいって思つて「ごめんなさい。でも、もつ、離れてるの、やだ……」

謝つてゐるのか我儘を言つてゐるのか分からなくなつてきた。ただ強く常磐に抱きついて離れまいとしている私の本能は、我儘なかもしれない。

「ごめんなさい、と何度も繰り返してゐると、常磐が「いい」と弦く。

「ときわ？」

涙に濡れたままで常磐を見上げると、常磐は眉間に皺を寄せて私を見下ろしていた。怒られるのだろうか、嫌われてしまつたんだろうか、と思って身体が震えた。

「いいんだ、もつ」

苦しそうに瞳を閉じて、常磐は呟く。

次の瞬間にはきつと抱きしめられて、呼吸すら厳しくなる。私と常磐の間には空氣すらも入り込めないほどに、強い腕の力に私はただ縋りついた。

「運命とか、宿命とか、もうどうでもいいんだ。俺はおまえに救われてた。そんなことに気づけないほどに以前の俺は愚かで、おまえがどれほど大事なのか分かつていなかつた。いや、俺は今でも愚かなままだ。おまえが去つたあとにずっと動けなくなつた。ずっと前から、こいつしている今まで」
ぎゅ、とまた常磐の腕に力が込められる。

「俺は、おまえに支えられていたんだ」

耳元で囁かれる言葉に、思わず「嘘」と呟いていた。

「そんな、わけない。私は」

「嘘じやない。嘘じやないんだ」

震える腕で私は常磐の背に手を回した。

「だつて、私は」

常磐を駄目にする。そう思つたから、離れた。

自然とまた涙が溢れてきて、空に浮かぶ月が歪んで見えた。それなのに月の光は眩しくなつたような気がする。

「真朱じやない、常磐が愛した人じやない、常磐を助けた人じやない、常磐が望む人じやない、常磐に愛された人じやない！」

涙が溢れて、零れ落ちる。

自分でも嫉妬にまみれた汚い言葉だと思つた。

真朱に重ねられることを拒みながら、常磐の望む人でない自分が嫌だつた。私は常磐にしがみ付いて、それでも常磐の顔を見ることが出来ずに月に向かつて叫ぶしかない。

「そんなことどうでもいい！」

しかし私の声よりも強いその叫びに、私は黙るしかなかつた。

「真朱じやなくていい、今俺が愛して、俺を助けて、俺が望んで、俺を支えたのはおまえなんだ！」

頼むから、と耳元で弱く囁かれた。

「……傍に、いてくれ」

願う言葉とは裏腹に、常磐の腕は私をきつく抱きしめている。もう離すことはないとでも言いたげに。ここだけが私の場所だとでも言いたげに。

「わたしが、常磐の傍に、いてもいいの……？」

声は自然と震えていた。同じように震える手で常磐を抱きしめる。誰に許しを求めればいいのか分からぬ。けれど、私と常磐が共に生きていくことが出来るというのなら、私はこれ以上に何も望んだりしないだろう。

「誰に許されなくてもいい」

しつかりとした常磐の声が、私の耳元で囁かれる。

確かに決意を感じるその声に、私はただ茫然と聞き入っていた。
「神が許さないとしても、人が許さないとしても、そんなこと関係ない」

お互いに縋るように支え合いつつに、力の限りに抱きしめ合いつ。
いつそ一つになればいいと、この時願ったのは私だけではないだろう。

「これが罪だというのなら」

常磐の手のひらが、そつと私の頬に触れた。

導かれるように身体を離して見つめ合う。離れた身体に夜風が吹きつけてくる。ぬぐもりが去ったあとにそれはいつも以上に冷たく感じた。

誘われるようになり田を開じて、頬を優しく撫でるぬぐもりだけを感じ取る。

「共に墮ちよう」

呴かれた言葉は吐息とともに間近で感じた。

答える必要はなかつた。たぶん、私がこの人の腕の中に飛び込んだ瞬間から、もう墮ちているんだ。

唇に感じる優しさにただ酔いしれて、満たされて、そして私も常磐も墮ちていく。

「この人と一緒にいられるのなら、どんなに罪にまみれてもいいと、思つた。

30・はじまつの小さな種

気が遠くなるほど長い時のなかで、今確かにひとつ的变化が生まれた。

それは、遙か昔に私が落とした楔。
小さなひとつ種。

願うように割いた想い。

ああ、ようやく。

「誓いは果たされる」

常盤。

おまえの、その手で。

「……いいのか？」

よつやくの再会を果たした一人を遠くから見ながら、東雲が隣にいる山吹に問う。

「何ですか？ 良かつたじゃないですか」

けろりとした顔で山吹は言つ。あまりにも平氣そうな顔に、質問をした東雲の方が居たたまれなくなつた。

気づかないわけがない。

「 青藍のこと、気に入っていたんだる?」

「 」で「気に入つて」という言葉を使ってくるあたり、東雲なりに氣を使つているのだろう。

しかし山吹は微笑みながら言つ。

「 山吹の花は、実らないものですから」

そう呟く横顔は、ただ優しく青藍を見つめていた。
外見は子どものままだというのに、いつ一面で山吹の懐の大
きさは窺えた。

疲れか安堵か 常磐の腕の中で眠つてしまつた青藍を抱き上げ
て、部屋まで向かう。先程眠つていた時は魘されていたようだが、
今の寝息はただ穏やかだ。

「 変わつただろう」

声に気づいて顔を上ると、東雲が微笑みながらこちらを見てい
た。

「 ……変わつたが、変わつてない」

何のことだかなんて聞く必要はない。常磐は「 」の一年の歳月を長
くも短くも感じない。ただ青藍は美しくなつた。幼さを残した顔立
ちは、もう一人前の女性と言えるほどに。だがこうして眠つている
姿は別れた時とまるで変わっていない。

「 言つておぐが、青藍をこれ以上傷つけるなら今度こそ一度と会わ

せるつもりはないぞ」

「これ以上傷つけるなんて、ありえない」

東雲の言葉に常磐は警戒するよつに青藍を強く抱きしめる。まるでおもちゃを奪われまいとする子供ものようだと東雲は思った。

「なら、いいんだがな」

ため息を吐き出して東雲は踵を返した。

「早く部屋まで運べ。そのままでは風邪をひいてしまう」
じりりと睨まれながら東雲に言われて、常磐は口籠もりながらも頷く。薄着で夜風にあたっていた青藍の身体は冷え切つてしまっていた。

寝台の上で眠る青藍は、満ちたりたような表情をしていた。
良い夢でも見ているのだろうかと、微笑ましくなる。

長い髪を撫でてやりながら、飽きることもなくただ眠る青藍を見つめた。常磐には睡眠も必要ない。それはこの一年で証明された。

「……約束する」

もう何度傷つけたか分からぬ、常磐は聖なる誓いでもするよつに青藍の手をとった。

「」の身体が存在し続ける限り、おまえを守るから

だから、傍にいて。

何度も願つた言葉は喉に張り付いて離れない。声にならないまま、また喉の奥へと押し込んだ。

おまえを、守るから。

祈るよつよし、誓つよつよし、囁かれた言葉が夢の中で響き渡る。

「……ときわ？」

声の主を呼ぶけれど、返事はない。

重たい瞼を開けて周囲を見回しても、常磐の姿は見つかなかつた。

ただ、言葉の余韻が波紋のようにその空間に広がつていくよつな気がした。何度も何度も、青藍の胸に届くように反響する。

「小さな私の種」

甘い声が常磐の声の反響を切り裂くようにその場に突然現れた。聞き覚えのある、記憶の中だけに存在する声だ。しかし以前に聞いた時はどこか雰囲気が違つた。

青藍はじっくりと唾を飲み込んで、声のした方へじっくりと振り返る。

白い髪、赤い瞳、まるで自分と変わらない姿をしてゐるのに、その身に感じる時は行幾千年。少女の姿をした老婆、とでも言えぱいいのか。

神と呼ばれる者と同じ氣配。

「……真朱」

名を呼ぶと、その人は笑つた。

可笑しそうに笑うのではなく、楽しそうに笑うのではなく、ただ笑つた。感情のこもっていない笑みだつた。

真朱はゆっくりと青藍に手を伸ばした。

細い腕は、青藍の記憶の中にあるものとまるで変わらない。それなのに。

「……真朱、なの？」

青藍は問わずいられなかつた。真朱の姿をしてゐる人は、真朱というにはあまりにも違ひすぎる。どこか、とはつきり言つて

とは出来ない。たが、違つた。

ふ、と真朱は笑つた。それはどこか自嘲的な笑みで。

「おまえの知る真朱ではないよ」

口調までが違つていて、青藍はただ黙るしかない。これは夢なんだろうかと思う。それとも、真朱が見せてるのだろうか。伸びてきた真朱の手が、いとおしそうに青藍の頬を撫でる。

「ようやく、始まった」

ほつと安堵したような呟き。

青藍は振り払うでもなく、拒むでもなくただ真朱を見つめた。「気が遠くなるほどの時が経つた。種をまいたあの時から。私はただ待つしか出来なかつた」

何の話をしているの、そう問おうともその時は思わなかつた。ただ真朱の赤い瞳を真つ直ぐに見つめていると、何も考えられなかつた。ただ胸の奥で何かが訴えてきている。

「私の、小さな種」

優しい声で真朱がそう言つた瞬間に、白い光が溢れる。目が覚めるのだとthought。やはりこれは夢だつたのだと。

「真、朱」

覚醒する意識の中で、ただ彼女の名前を呼ぶ。白い光に向ひついで、彼女はまだ微笑んでいた。

目が覚めると、そこは慣れた寝台の上だつた。
朝の柔らかい光が部屋の中に溢れている。

「…………朝、だ」

ぱつりと呴いて、自分の頬に触れる。

夢の中の感触は残っていない。それなのにぬくもりがそこにある
ような気がした。

何が始まったというんだろう。

何を待っていたというんだろう。

「…………」

寝台から降りて、大人しく服を着る。何故かいつもの少年の服ではなく、この間東雲に買つてもらつた少女の服を着た。
ゆつくりと戸を開け、広い屋敷の中を歩いていると、庭の東屋に東雲と常磐の姿を見つけた。

常磐が青藍に気づき、ぱっと立ち上がる。つられて東雲を見た東雲が手招きをした。

庭へ降りて駆け寄ると、常磐は嬉しそうに微笑んだ。

常磐の隣に腰をおろして、東雲を見る。青藍と常磐が並んでいる姿に微笑みながらも少し複雑な表情を浮かべていた。

「東雲様」

そんな東雲を真っ直ぐに見つめて、青藍が口を開く。

何をするべきなんだろう。

何を知りたいんだろう。

自分が求めるものを、青藍ははつきりと分かつていた。

確かめたい。自分のことを。

「……真朱に、会つことは出来ますか?」

その為には、彼女に。

31・君の願いの先に（1）

空気が一人の心情を写し取るように震えた。
驚く瞳が真っ直ぐに私を見つめた。

「……何を、突然」

常磐が呆然として呟く。東雲様は冷静な表情を取り戻して、ただ黙つて私と常磐の様子を見守っていた。

「突然、だけど。もう決めた」

「どうしてそんな必要がある」

はつきりと決意を告げると、常磐はわずかに苛立つた。眉間に皺を寄せながら叱るようにそう言つ。

「私は、私が何なのか知りたい。それを知つてるのは真朱だと思う……と、いうよりも真朱しかいない」

すべての起点は真朱にある。それだけは間違いなかつた。

「だから、真朱に会いたい。会えますよね？ 東雲様？」

話しかけられた東雲は、固い表情で黙り込んだ。

「それが青藍の願いだというなら、叶えてくれるでしょう？ 主様」沈黙の中に突然振つて来たのは山吹の声だった。頭上から声が聞こえたと思うと、東屋の屋根から山吹が華麗に飛び降りてくる。

「山吹」

たしなめるように東雲が名前を呼んだ。しかし山吹が気にした様子はない。

「それが人神の仕事でしょう。違います？」

「……ありがとう、山吹」

思いもよらない援護に、青藍は微笑みながらそう言つ。山吹は明るく笑いながら青藍を見た。

「俺は青藍の味方だから！」

「山吹。私達が青藍の味方じゃないような口ぶりをするな」

東雲が不服そうに口を挟んだ。山吹は悪戯した後の子どものように笑いながら東雲を振り返り見る。

「だつて、反対なんでしょう?」

それはずるい質問だった。反対するとこいつとは青藍の味方にはなり得ない、しかしここにいる全員は青藍の為をおもって動く者ばかりだ。

「……反対、というわけではない。話の上では真朱に会わせることとは可能だ。だが、青藍」

短く答えた後で、東雲は青藍を見た。真っ直ぐと見つめると、同じだけの強さで青藍は見つめ返してくる。

「真朱を捕えているのは天の神々だ。その真朱へ会いに行くことは、それだけ天に近づくということだ。おまえが天の神々から危険視されているおまえが行けば、かなりの危険が伴うこととは分かつてるのか?」

想定していた問いに、青藍は迷いなく答えた。

「天の神々が私を危険視するのは、不確定要素の存在だからでしょう? 私という存在がなんなのか、それを知りたいのは天の神々も同じこと。どちらにとっても悪いことにはならないと思います」

にっこりと笑いながら東雲にはつきり告げると、東雲は言いかえす言葉が見つからずに黙る。

「それは、おまえが真朱に利用されていなければの話だ」

一瞬の沈黙を破ったのは、常磐の声だった。

「たとえば真朱が自分が捕まるこことを想定し、その上で逃げる手段としておまえを用意していたなら、おまえが真朱に会おうとする意志すら真朱の手の上で転がされているだけのことかもしれない」

苦しげな表情で、辛そうな顔で、どうしてそんなことを言うんだろ?と青藍は泣きたくなる。常磐は真朱を疑っているのと同時に、

真朱を信じたいと願つて いるのに。

「……その可能性は、あまりないとと思うよ」

青藍は常磐の表情に心乱されながらも、そう呟いた。

「真朱は、自ら神々に捕まつたんだから。だから、逃げようと考へることは可笑しいよ。それに私が生まれたのがこんなに遅くなるのも、可笑しい。でも、真朱に会おうとする気持ちが全部私の意思なのかつて聞かれると、もしかしたら違うのかもしれないけど」

まるで夢に導かれたようだ、としか言いようがない。あれがただの夢でないのなら、間違いなく真朱の考えは絡んでくるのだろう。しかしそれをここで口にするつもりはなかつた。

「このまま何もせずに生きていくのは嫌。天の神々からも睨まれて、怯えて暮らしていくの？ 真朱の名残に動搖しながら生きてくれるの？ 私は、私の人生を歩みたいのに」

「だが……」

なおも言葉を重ねようとする常磐を、青藍はただ黙つてじつと見つめた。その瞳に、常磐は気まずそうに黙つた。

しん、とその場は静まり返り、時間の流れがやけにゆっくりと感じられた。

東雲や常磐が気まずいと感じる中で、青藍だけはにつこりと満足そうに笑う。何十年 何百年と生きた大の大人の男が、たかが十数年生きただけの少女に言い負かされたのだ。

「ほらね」

言わんこつちやない、と山吹が呆れたように笑う。

「この中じや、誰も青藍には勝てないよ」

青藍を甘やかすことにばかり心を碎く大人は、青藍を止める方法を知らなかつた。もともと青藍は大人しい子ではないのだ。なにしろ人買いから逃げ出すくらいの度胸を持ち合わせているのだから。

「常磐」

青藍は笑顔のまま、常磐の手をとつた。

まるで青藍の方がお姉さんみたいだ。手を握られた常磐は、どうしたらいいのか分からぬといつた顔で、戸惑っているだけだ。

「目をそらすのも、逃げるのも、もう止めよつ

それは固い決意の表れだつた。

何人もそれを覆すことは出来ないと宣言するよつて、強く優しい声だ。

「真朱から逃れようとするのは止めて、私が何で、常磐が何なのがはつきりさせよつ」

大丈夫だよ、と青藍は笑顔で続ける。

「もし常磐が倒れそうになつても、私が支えてあげるから」
そんな無邪氣ともいえる笑顔に、常磐は呆気にとられた。まさかこんな小さな女の子に、こんなことを言われるなんて夢にも思わない。

守ると誓つたのは、先程のことなの。

「敵わない、おまえには」

たつた一言で、こんなにも簡単に自分を救いあげてくれる。
この目の前の少女は、そんな涙が出そうに嬉しいことをやつてのけているだなんて、分かつてゐるだろつか？

31・君の願いの先 (一) (後書き)

ついにクライマックスともいえる最終章のはじまりです。

青藍について、常磐について、真朱について、どんどんと明かされていきますので、どうぞ最後までお付き合いいただけると幸いです。

32・君の願いの先に（2）

真朱は、天と地の境のとある場所に幽閉されている。

東雲は苦い表情でそう語った。

真朱という存在は異質過ぎて、死罪にするか否かでさえ神々の意見が大きく割れることとなつた。

人なのか、神なのか。それすら決着のつかぬ論争の果てに、真朱は永遠に出ることの叶わない檻の中に閉じ込められ、長すぎる時の中ただ一人でいることしか出来なくなつた。

そこに行けば真朱に会える。

これから行くべき先が提示されると、青藍の中で真朱に会うとう未来は確定されたものになつた。

不思議なくらいに、会えないかもしれないという考えが浮かんではこない。

危険だといふことは百も承知だ。

けれど青藍の中に迷いはなかつた。

「そこまで、どうやつて行けばいいんですか？」

青藍は真っ直ぐに東雲を見てそう問い合わせる。

未だに釈然としない東雲は、ため息を零しながら答えた。

「人では辿りつけない場所だ。人神、または天の神のみが行ける領域。天と地の境というのは言葉にするのは簡単だが、その実不確かな場所だからな」

「不確かな場所？」

青藍が首を傾げると、東雲はどうしたものかとしばし黙り込む。

「感覚的なものだ。神には悟ることができる。しかし人はもともと地上にあるもの。だから天の世界を知る術はないし、天と地の境を

「知るはずもない」

「それに境つていうのはどんなものにしろ曖昧なものなんだ。田に見えるものじゃない。誰かが決めるものとも違う。自然界のものならなおさらね」

東雲の説明に付け足すように山吹が口を開く。

分かつたような分からぬような気分になりながら、青藍は静かに一人の説明を理解しようと頭を動かした。

「それじゃあ、私には分からぬってことですか？」

人には感知できない場所。それでは行くことすらできないのではないか。そんな不安が今さらに浮かび上がる。

「……おまえは特殊な存在だから、な。もしかすれば分かるかもしれない。それに俺が案内すれば辿りつくことはできるだろ？」

「……連れてってくれるんですか？」 東雲様

青藍が柔らかく微笑んでそう問い合わせると、東雲はため息を零しながら「仕方ない」と答えた。

「放つておくと、何をしでかすか分からないからな」
それならば田の届く範囲でやつてくれた方がいい、と東雲は苦笑する。

「ありがとうございます、東雲様！」

青藍は嬉しそうに笑いながら東雲の首に抱きついた。東雲は優しく抱きとめながらまた苦笑いする。

「……真朱は、生きてるのか」

青藍の背後で、戸惑うような声がした。

振り返れば、ずっと黙っていた常磐が迷子のように不安げな表情で東雲を見ていた。

「以前にも言ったと思うが。真朱は生きている。その寿命が尽きるまで、な」

東雲が幾分低い声でそう答えた。分かりきっていたはずの答えに、常磐の瞳はますます揺れた。

ああ、このひとはまだ。

失望にも絶望にも似た感情が、青藍の中で浮かんだ。

分かつていいつもりだ。常磐の中で真朱という存在は大きい。愛しくも憎い存在として。それでも常磐は心のどこかで、真朱を想っているんだろう。

自分に向けられている愛情が、どんな種類のものなのか、青藍には分からぬ。おそらく常磐自身も分かつていいのかもしれない。失いたくないと願われるほどには、愛されている。

「……常磐も、行くんでしょ?」

気がつけば青藍はそう問いかけていた。

緑色の瞳が、頼りなさげに青藍を映す。

迷いを払うように青藍が手を差し出せば、大きな手が青藍の手を包み込む。不安に揺れた瞳はそのままでも。

「青藍って、男の趣味悪いよな」

今日のところは、と話に区切りをつけ部屋に戻る途中で、山吹が唐突にそう切り出した。

「どうしたの、突然」

苦笑すると、山吹が「だつてさ」と続ける。

「なんだつてあんな男がいいのかなって思うよ、俺は。青藍が好きだって言つんだから応援はするけど、手放しに褒められる男じゃないだろ」

アレと言われた常磐は、今頃くしゃみでもしているのだろう

か。

青藍としても、否定できないのがむなし。

「そうだね、良い人とは言えないかもしないね」

弱い人だと思う。

脆い人だと思う。

あの夜。初めて青藍が常磐と出会った夜。

あの時感じたような強さはもつて常磐の中には欠片も感じない。

「分かつてんんだ？」

呆れたように山吹が呟く。

「分かつてるよ。でも、放つておけないんだ」

母性本能というやつなんだろうか。それとも恋の愚かさ故だろうか。

人を信じることが出来ず、過去を引きずり続けてきたあの人を、慰めたいと思う。優しくされた分だけ、優しくしたいと思う。不安な時は大丈夫だと隣で微笑んであげれたらと思う。

「恋つて、呪いみたいだね」

苦笑すると、山吹はおおげさにため息を吐き出した。

「そこまで言い切っちゃうんだからもう末期なんだろなあ。俺はいつまでも青藍の味方だけさ」

そう言いながら山吹は青藍の頭を撫でてくれる。その手のひらの暖かさに胸が熱くなりながら、青藍は「ありがとう」と呟いた。「でも、青藍をこれ以上泣かせたりしたら俺も黙つてないから。泣かされないように気をつけてくれな?」

山吹の手が名残惜しそうに頭を撫でるのを止め、茶化すようにそう言われる。

「私が気をつけるの?」

青藍が笑いながらそう問いかけると、山吹は頷く。

「だつて、あいつに言つたって意味ないよ。自分の行動を上手く制しているように見えないし」

それに、と山吹が続ける。

「俺が怒つてあいつを殴つたら悲しいのは青藍だろ？ それなら俺
がそんなことしなくて済むように、ちゃんと幸せになつて」
山吹は切なそうに微笑んで、その場から去つて行つた。

33・君の願いの先に（3）

その夜、青藍は夢を見た。

不思議な感覚は、何度か感じたことのあるものだ。慣れたといえ
るほどではないが、これが普通の夢ではないとすぐに分かった。

真朱に関する夢。

夢の中であることを告げるよつた、頼りない心地のまま青藍は周
囲を見回した。そこにあるのは一面に咲く誇る、真っ白な花。白い
靄があたりにたちこめていて、遠くはぼんやりとしか見えない。空
は青空でなく、白い雲が覆いかぶさっている。

真っ白な世界だ。

まるで真朱のようだ、と青藍は思った。そしてその白い世界に立
つ自分はまるで異界のものであるのだと強く告げられているような
気がした。

さく、と一歩足を踏み出すと、足元の花が潰れた。足首ほどまで
の高さの花はきつしりと敷き詰められたように咲いていて、可哀想
だが踏まずには前に進めない。

どこまで続いているんだら？　ここはどうなんだろう。そんなこ
とを思いながら歩いた。ただの広い花畠と思いきや、ここまでたっ
ても果てが見えない。

「……夢、だからかな」

それともこれがここのお通なのだろうか。

青藍にはここに真朱がいるよつた気がした。

『私の、小さな種』

そう優しく呟いた真朱と、もつ一度話がしたかつた。娘を見る母
のような目で、念願の宝を見つけた人のような目で、青藍を見つめ
たあの真朱に。

「真朱」

試しに呼んでみた。しかし青藍の声は広い空間に小さく響いただけ、返事はない。

真朱に関係する夢だと思ったのは間違いだつたのだらうか、と青藍は首を傾げる。しかしだの夢にしてはおかしなことが多すぎる。こんな場所は青藍は知らないし、そもそも夢を夢と認識しているのもあまり普通ではないだらう。

「真朱」

もう一度、今度は少しだけ大きな声で名を呼んだ。
しかし返ってくるのは言じよつのない静寂だけだ。

真つ白な世界。音のない世界。異質な自分。ただ青藍は立ちつくした。最初は何とも思わなかつた世界が、突然恐ろしいものに思えた。

はつと田が覚めて、青藍は飛び起きた。

先程まで見ていた夢のせいいか、ひどく汗をかいている。怖かつた、と思つて何が怖かつたのだらうと思つ。

意味深な夢だつた。だが青藍の頭の中にはどんな夢だつたのかすっぽりと抜け落ちてしまつていた。

青藍とて人間だ。普段見る夢は大抵忘れている。けれど今回の夢は普通の、どうでもいいものとは違う気がするのに 内容は覚えていらない。

「……ただの、変な夢だつただけなのかな」

首を傾げながら青藍は寝台からおりて着替え始めた。男物か女物のどちらを着るかしばし悩んで、なんとなく女物にした。東雲に買つてもらつた董色の服だ。

ふと気を緩めると、思いだせない夢の内容が気になつたが 。

冷たい水で顔を洗うと、青藍は自分の頬をぱん、と軽く叩いた。じんわりと痛みが染みてきて、改めて田が覚める。

「気にしててもしかたない！」

意味があるものなら思い出すだらけ。思い出せないとこ「う」とは、今の青藍には必要ないものだ。そう思こしむことで納得させる。

「おはよひ「やれこます、東雲様」

部屋を出ですぐには東雲と会い、青藍はいつもと変わらない様子であこがれする。東雲もいつものように眦を下げ、青藍の頭を撫でて「おはよひ」と返した。その瞳に複雑な感情が見え隠れするのは、昨日の話のせいだろうか。

「私の決意は変わりませんよ？」東雲様

追い打ちをかけるように青藍は下から東雲を見上げて宣言する。東雲は虚をつかれたのか驚いたように田を丸くして、ふつと笑う。「知ってるよ。おまえは頑固者だからな」

「まったくだ」

はあ、というため息が聞こえたと思つと、東雲の後ろから常磐がやつてきた。今会話が聞こえていたのだらけ。

「が、頑固つて……」

そんなに頑固かな、私。青藍は首を傾げて呟いた。

「？ 昨日はあまり眠れなかつたのか？」

常磐が青藍を見て問い合わせた。青藍は「え？」と田を丸くする。

「そんなことなかつた……と思つ。夢見はあんまり良くなかったみたいなんだけど」

「なんだそれ」

「覚えてないんだよね。夢の内容」

だからたぶんとしか言えなくて、と青藍は苦笑する。

す、と常磐が手を伸ばして青藍の頬に触れる。指は優しくなぞる

ように田元に移動する。

「少しきみが出来てゐる」

じつと見下ろしてくる常磐の視線に少し居心地悪くなりながら、青藍は「寝ただけで、ね」とも「も」も「」と口籠もる。何より東雲に見られているのが恥ずかしい。東雲は呆れたようにため息を吐いた。

「真つ昼間から向してんだよやうじー」

止まりそうにない常磐の愛撫を止めたのは、ふと湧き出た少年の声だった。

「や、山吹」

青藍は居心地が悪いまま少年の名前を呼ぶ。

「おはよー、青藍」

「お、おはよー」

「こいつと疊りのない笑顔を向けてきた山吹に押され氣味になりながら青藍は返事をする。山吹は常磐をちらりと見て、そして青藍の頬に触れたままの常磐の手を見た。

「ガキじゃあるまいし、もう少し時と場所と人間を考えたら? 青藍も困つてゐるじゃん」

「俺は別に……」

常磐が弁解しようとした口を開くが、山吹は間髪いれずに常磐に指差した。

「他意がなくても、他人からはやらしく見える場合もあるってことを学んでおけってことだよ。何年生きてんのあんた」

一見少年にしか見えない山吹に説教されている常磐の図と、この人は実に奇妙だ。一人とも見た目に反した長い年月を生きていると思うとなおさら。

「あまり役にたたんと思っていたが、思わぬところで役にたつな山吹」

東雲が関心したように呟き、こいつの間にか常磐から解放された青

藍はその隣で曖昧に微笑むしかなかった。

34・君の願いの先に（4）

それから出発までは、それほど時間がかからなかつた。短い期間の慌ただしい準備のなか、青藍はぱたぱたと館の中を駆け回る。

「青藍、手が空いたら薬草を摘んできてくれ」

「はい！」

しばらく留守にするのだから、と青藍は持つていぐ荷物の用意だけではなく掃除までやつている。

箒を壁にかけ、青藍は庭の薬草を摘みにまた走つた。東雲から渡されたメモに書かれている薬草の名前は、普段あまり使わないものだ。と、いうより今まで使つたことがない。東雲が青藍が来た頃から植えたもので、世話は青藍がしていたのだが。

「これで、いいんですよ」

少し不安になりながら薬草を摘み取る。

確認をとるために東雲のもとへとまた急いだ。

「東雲様、これで大丈夫ですか？」

忙しそうにしている青藍とは違い、東雲は自室でのんびりとしていた。青藍が薬草を手に話しかけると、振り返つて微笑んだ。

「ああ、大丈夫だ。調合しておくから青藍は他のことをしておきなさい」

「はい……それ、なんの効果があるんですか？」

興味本位で問うと、東雲は薬草を見て笑う。

「これはおまえのために植えたんだ。人の身体に、神に近しい場所というのは毒にもなる。もしかしたら、と思つて植えたがここでの生活には必要なかつたな」

予想外の答えに青藍は「え」と目を丸くした。

東雲と共に暮らすようになつて、体調を崩したことなど一度もな

い。街と違つて空氣も澄んでいるので気持ちいいくらいだ。

「念のために調合して持つて行つた方がいいだろう。天の神の領域となれば、こことは違つてきついかもしれないからな」

「あ、ありがとうござります」

ただ行きたいとしか考えていなかつた青藍は少し恥ずかしくなりながら礼を述べた。東雲は優しく微笑んで青藍の頭を撫でる。そのぬくもりが嬉しくて、青藍は目を細めた。

「ほら、他の準備をしてきなさい。掃除も途中だつたんだろう」「はい」

東雲に急かされ、青藍は素直に頷き、東雲の部屋を後にした。小走りで戻り、中断していた掃除を再開する。広い館全てを掃除するのは無理だが、普段使つている場所だけでも綺麗にして行こう。ふわ、と風がそよいだ。誘われるよう庭に目を向けると、山吹の花が咲いている。あの山吹の、本体なのだそうだ。長い年月そこに植わっているであろう山吹の花は、庭の一角を鮮やかに染めるほど大きい。

「どうかした?」

山吹の花に目を奪われていると、目の前にひょこつと山吹本人が現れた。

「わっ！……や、山吹」

驚いて青藍は一步後ずさる。そのままバランスを崩し倒れかける。短く悲鳴をあげる青藍の手を、山吹がひいた。

「危ない！」

小さな少年の手が予想外の力で青藍を引き寄せる。

「……まったく、危なつかしいなあ青藍は」

ぐすくすと笑いながら山吹は青藍を立たせた。

「あ、ありがとうございます山吹」

「どういたしまして」

につっこりと笑う山吹に、青藍も微笑み返す。その名のとおりだなあ、と思いながら。山吹が笑うと、あの花のように周囲が明るくな

る。

「これじゃあ、青藍を見送るのが不安になるよ」
あいつじゃあ少し頼りないしね、と山吹は呟く。あいつ、という
のは常磐のことだらうな、と青藍は苦笑した。苦笑して そして、
固まる。

「え、見送る？ って……」

何を言つてゐるの、と問つと、山吹は「うん？」と首を傾げる。
「そのまんまだよ。見送るつて。俺は一緒に行かないから」
あつさりとした物言いに、青藍は啞然とした。不思議なくらいに、
山吹も一緒だと思っていた。

「ど、どうして？」

突然の話に動搖しながら山吹に問う。山吹は「うーん」と困った
ように笑いながら答えた。

「東雲様がいなくなるつてことは、その仕事の代わりをする奴がない
といけないしね。他に式がないわけじゃないけど、今どこら
へんにいるのか分からぬ。東雲様が見ていた下の街とか、しば
らくは俺が見てないと」

ね？ と首を傾げる山吹に、そこまで説明されれば青藍は何も言
えない。

「……山吹がいないと、さみしいな」

ぽつりと呟くと、山吹がますます困ったように眉を寄せた。

「時々残酷だよね、青藍つて」

「え？」

小さく呟かれた声に、青藍は問い返す。上手く聞き取れなかつた。

「なんでもないよ！ ほら、早く準備しないと出発が遅れるよ。あ
の二人は何もしないんだろ？ しさあ」

確かに常磐の姿はさきほどから見ないが

「し、東雲様はちゃんと準備をしてたよ？」

「……ふーん。じゃあいつは？」

山吹の追及に、青藍は曖昧に微笑んだ。

「準備は準備でも、心の準備をしてるんじゃないかな」

「ふんね、と呟きながらその予感が外れていないだらうと確信を持てた。常盤にとって何よりも重要なのは真朱に会つための準備だ。

「相変わらずどうじょうもない男」

「あ、という山吹のため息に青藍は何も言わなかつた。同じよう位に思ひ心がないわけではない。でもそれ以上に、仕方ないと思わなくもない。

「私も少し緊張してるから……常盤の気持ちも分かるし」

青藍が今まで会つた真朱はどれも『本物』ではない。夢の中で会つたと言つても夢は夢だと言われてしまえばおしまいだ。

「今しかないから、そつとしておいてあげて」

準備が済めばすぐに発つ。感傷に浸れるのも覚悟を決めるのも、今しかない。

山吹はため息を吐き出して、「青藍は優しいなあ」と呟いた。

35・君の願いの先に（5）

準備が終わった頃に、常磐は顔を出した。わずかに緊張した表情から、やつぱり心の準備をしていたんだろうな、と青藍は笑う。

「じゃあ、頼んだぞ山吹」

門まで見送るという山吹に、東雲が念を押す。山吹は本来サボリ癖のある式だからだらう。

「はいはい、分かつてますよ主様。ちゃんと仕事はしておきますから安心してください。それより青藍のこと頼みましたよ」

「頼まれるまでもない」

山吹の茶化すような言葉に東雲は呆れながらため息を吐いた。本人の目の前で頼む頼まれないなどといつ会話をされると、正直こそばゆい。

「青藍」

山吹がぐるりと青藍を見て、優しく微笑む。

「いつてらつしゃい」

山吹は本当に優しく、慈しむように青藍の頭を撫でた。たつた一言なのに、胸にじんわりと広がっていく。

いつてらつしゃい、なんだ。

思えば母と暮らした家から追われ、人買いに捕まつてから安心して帰れる場所など青藍にあつただろうか。帰る家も、待つていてくれる人も、いつもして皆に出会うまではいなかつた。

じわりと涙が滲んだ。寂しさではなく、溢れだしそうな嬉しさで。

「……うん、いつてきます」

きゅう、と泣くのを我慢して、青藍は精一杯の笑顔を見せた。

青藍は山吹が見えなくなるまで手を振ると、山吹もそれに応えるよつよつと手を振り返してくれた。

常盤は、始終無言だつた。

表情が強張つてゐるのが隣を歩く青藍にはよく分かつた。常盤が抱いている緊張と、青藍が抱いている緊張は似ているかもしぬないがまるで違う。

だが青藍は慰めるよくな言葉は何も言わなかつた。ただ隣を歩く常盤の手を握つた。青藍が常盤の手を握つた瞬間、びく、と常盤が驚くように青藍を見下ろした。

にこり、と。青藍は何も言わず微笑んだ。

常盤の瞳が揺れた。しかしながら微笑んで、青藍の手を優しく握り返す。

青藍の気持ちは変わらない。この先にどんなことが待つていいようと、それがたとえ茨の道であつたとしても。

常盤と一人なら、どんな場所でも生きていけると思つていた。

やはりそう簡単には進めなかつた。

最初青藍は田隠しをされていた。万一通つてきた道が記憶に残つてしまふと、それはそれで天の神々に攻撃される理由となるかもしないから、と。

しばらくしてから田隠しを外されると、最早青藍が見たこともないような世界が広がっていた。

青い世界だ。今青藍たちが立っている場所は、空に浮かんでいるのだと分かる。あちこりに同じようなものがあり、大きさは家一件分ほどのものもあれば人一人しか立てないようなものまである。上に行けば行くほどそれは大きくなつているようだ。

「どう、やつて……」

道らしい道などない。しかし青藍の足元の地がなくなつたような感覚はなかつた。

「人には見えぬ道もあるし、他にも方法はある」

驚く青藍に、東雲は笑いながら説明した。

「それにまあ、常磐がしつかりと手を握つていたみたいだからな。平氣だろうと」

未だに握つたままの手を見て、青藍はなんだか氣恥しくなつた。そういえば途中田隠しされた中、常磐が手を強く握つてきたのはどこか危ないところでも通つっていたからだろうか。

「ありがとう、常磐」

青藍が嬉しそうに笑いながらそう言つと、常磐は何も言わないままたぎゅ、と強く手を握りしめた。まっすぐに前を見据えた常磐に、青藍は「どうしたの」と問い合わせて 背筋に悪寒がはしる。

「なぜ忌み子がここにいる」

発せられた声は、とても重厚でとても気高い。

目の前には以前青藍のもとへ来た神の他にも、幾人かの神がいた。それだけで青藍に与えられる圧力は並大抵のものではない。

「ひ、う」

息を呑んでその圧力に耐えようとすると、常磐が青藍を支えるように抱きしめ、自分のその身体で神への壁を作つた。以前は感じる余裕もなかつたが、天の神から発せられる怒りは人の身には辛い。

「……答えを求めてきた。真朱と、青藍と、常磐の存在の答えを」

東雲がそう告げると、天の神はざわめいた。

「忌み子をあれに近づけるわけにはいかぬ」

「捕えたところで真朱の自由にされているのなら、止めても無駄だ。これも彼女の作った運命の一つだつ」

人神である東雲が平然としているのは当然だつ。しかし、青藍は必死に呼吸を確保するなか、常磐は青藍を抱きしめているだけ普通だつた。

「紛い物が作つた運命など」

「くだらぬ」

「早くここから去れ」

ざわざわと騒ぎ始める神々の声が、青藍には重しに感じた。耳鳴りがして、眩暈がする。この地も影響しているのかもしれない。

幸いにして神々の注意は東雲に向いている。だからまだこの程度の圧力で済むのだろう。

「青藍」

常磐が崩れそうな青藍を支えながら小瓶を取り出した。青みがかつた、それでも透明な液体が揺れている。

「飲めば少しさは楽になる」

「そ、れ……？」

何、と呴くと、常磐は「東雲に渡された」と答えた。

出立の前に準備していた、あの薬だろう。だとすればこの状態はやはり天の世界にいるせいなのだろうかと青藍はぼんやりと思う。嚥下する余裕もない青藍を見下ろして、常磐は小瓶の蓋を開けた。何も言わずにその小瓶に口を付けて、透明の液体を口に含む。

「とき、わ?」

青藍が常磐を見上げながら問う。多くの言葉を発する余裕のない青藍は名前を呼ぶしかできなかつた。その青藍の唇を、常磐は塞いだ。

「んつ……

途端に液体が口の中へと流れ込んで、青藍は目を白黒させながら必死にそれを飲みほした。触れる唇は熱いのに、流れ込んでくる液体は冷たい。

先程までとは違つ意味で、眩暈がした。

36・君の願いの先に（6）

薬を飲みほしたといひで、意識がはつきりとしてきた。耳鳴りもやみ、眩暈もなくなつた。

「……大丈夫か？」

まだ青藍を抱きしめたまま常磐が氣遣つよつて問う。手のひらが優しく青藍の頬を撫でた。

「だい、じょうぶ」

顔を真っ赤にしながら青藍は答えた。常磐が壁になつて見えないが、東雲と神々との問答は続いているようだ。

見られなくて良かつた、と思ひのせやはつて女心故だらう。

「こつまでも田をそらし続けていては意味がないだらう。だからこつして」

「愚を犯すわけにはいかぬ。我々は神であればこそ」

終わりそうにない問答に、青藍は「くい」と息を呑んだ。

常磐の腕から抜けると、周囲の視線はすぐに青藍に集中した。ましになつたからとはいえ、やはり注目されると足が震えた。

「行かせてください」

それでも青藍は決意のこもつた声ではつきりと言ひ放つた。

「危険はありません。真朱のあなた方への報復は既に済んでくる。これは、天の方々には関わりのことなこと」

真朱が青藍を呼んでいる。それは、たぶん青藍と常磐のことなのだ。『今の』真朱に、神々に対する恨みは感じない。

「行かせてください。行かなければいけないんです！」

それは使命なんて大それなものではない。青藍が常磐の手を離さなかつたのと同じだ。本能ともいえる、止められない衝動。これが真朱による計算としてもかまわない。ただ青藍が答えを求めたの

は、青藍の意思だから。

「忌み子め」

ぼそりと呟かれた自分を指す言葉に、青藍は目を背けなかつた。
「忌み子ではありません。真朱でもない。私の名は青藍です！」

深い青の瞳が神々を射抜いた。

澄んだ空氣の中で、青藍の声が不思議なほどに大きく響いた。東雲も常磐も、青藍の強い意思のこもつた声に驚き目を見張る。

「もう、子どもとは呼べないか」

ふ、と顔を和ませた東雲が静かに呟いた。

前を見据え、神々とも対峙し、しつかりと立つ少女は、もう東雲の庇護を必要としていない 立派な一人の女性だった。

意識がはつきりしたことで、青藍には分かつた。

呼んでいる。たぶんずっと前から。

青藍は唇を噛み締めた。鼓動が青藍を急かすようにじくじくと鳴つていて。力を入れていないと、手足が震える。早く早くと騒ぐ心は、こうして立ち止まっていることさえも苦しい。

「真朱のことも、私のことも、天の方々には関係のないことです。通してください」

苛立ちの募る声で、青藍は言い放つた。

ただ一人の小娘の声に、天の神々でさえも動搖を見せる。

青藍は黙り込んでただ前に進んだ。その少し後ろを、常磐は黙つて寄り添いながらついて来る。

『それなら、こうしよう』

膠着状態の続く話に、ひとつ石を投げ込んだのは東雲だった。

『二人が真朱のもとへ行っている間、俺はここに残る。万が一天に害があるようなことがあれば俺を罰してくれてかまわない』

『し、東雲様！』

いつものように微笑みながらそう告げる東雲に、青藍は驚き声をあげた。それは万が一の時は「殺してもかまわない」と言っているように聞こえたからだ。

『大丈夫だ。行って来なさい』

優しく微笑む東雲に、青藍は何も言えなかつた。

他に選択はなかつたのか、どうしても考えてしまつ。たとえ万が一が起きなかつたとしても、東雲を犠牲にしてもいいなんて選択はない。たとえ本人が納得していても、青藍は納得できない。

だつてこんなのが望んでない。

誰かを犠牲に、なんて。
誰かを置いて、なんて。

青藍の世界は以前と比べてとても狭くなつた。優しく優しく、それは真綿で包み込むように、東雲が守つてくれていたからだ。東雲と常磐と山吹が青藍の世界のすべてだからだ。

唇を噛み締めてただ進む。

視界が歪んでいるのは、きっと天界にいるせいだと思いこんだ。歩くたびにゆらゆらとするのは、まだ酔つているからだと。

『青藍』

いつもよりも数段優しい声が、青藍の耳に届く。

大きな手が青藍の手のひらを掴んで、強張っていた青藍の身体がびくんと震えた。

「心配するな」

飾ることのない慰めの言葉に、ぽろりと青藍の瞳から涙が落ちた。慰められることが嬉しいのに、でもその言葉を素直に受け取れない。「むりだよ」

首を横に振ると、涙の粒は左右に落ちる。

涙を拭おうと伸びてきた常磐の手を、青藍は無言で抑んだ。今優しくされるのは嫌だった。

「……泣くな」

常磐は悲しそうな顔をして咳く。それも無理だ、と青藍は思った。泣きたくなかったのに、一度流れ出した涙は自分でも止める術が分からぬ。

「おまえに泣かれると、困る」

行き場のなくした手をどうすればいいのか分からず、常磐は床を彷徨わせた。涙で歪んだ視界の中で、常磐の顔が迷子の子どものよう見えた。

青藍は一つ息を吐き出すと、『じじじ』と少し乱暴に田元を拭つた。ぱつと現れた田元は、赤い。

「……行こう」

新たに決意の固まつた声で、青藍はまた前を見た。常磐は黙つて頷いて、また青藍の隣を歩き始める。まるでいつまでも寄り添つていふ、と告げるよつて。

予感がした。
胸がざきざきする。

何かにどんどん近付いていると、本能が、魂が告げている。先に進むにつれ、空気は濃くなつた。神らしい姿はひとつも見当たらない。

何がその先に待っているのか 青藍には分かる。
迷わずこの道を進んだのも、ただ自分の中にある『何か』に従つ
てきただけだ。

「……真朱」

呴ぐと、もうその存在が間近であると実感させられた。

37・永遠に続く恋物語（一）

白い花に埋もれるように、その人は眠っていた。白い髪も白い肌も、花に紛れてしまいそうだ。

ふ、と閉じられていた目がゆっくりと開く。空を映す瞳は、紅玉のよう赤い。上半身を起こし、その人はひたすらに続く白い花畠を見つめていた。否、正確には花畠の向こうに続く道を。

白く長い髪からは、ぱらぱらと白い花びらが落ちた。まるで雪のように静かに地に落ちる。

変化を忘れた世界に、新鮮な風が舞い込んでくる。

「……来たか」

呟く言葉は、空気の中に溶けていく。話す相手もいないのだから、今の彼女に言葉を発する理由はなかつた。

固く引き結ばれていた口元が、わずかに緩む。

幾年もの間、待ち続けた瞬間が迫っていることが、嬉しいと思うのだ。もう随分と長い間、感情らしい感情も失っていたのに。胸がどくどくと鳴る。身体の中の血がいつもまして速く廻つて

いるような気がした。

真白な世界に、黒い点が浮かぶ。

唇がその少女の名を紡いだ。

長き誓いが、ようやく果たされようとしていた。

本能が真朱に近づいていた、と告げていた。気配が近くなれば近くなるほど、濃い天上の空気は弱まつていくようだ。青藍は身体が軽くなつていいくような感覚に、自然と足は前へ前へと進みを速めた。引き離されていたものが一つに戻ろうとするよう、言いようの

ない衝動は青藍を急がせる。常盤に惹かれていたものとはまた、別の衝動だった。

「…………ねえ、常盤」

どんどん前へと進みながら、青藍は口を開く。寄り添うように共に進む常盤は、何も言わずに青藍を見た。

「前に、言ったよね。常盤は常盤のものだって」

「ああ」

短い返事に、常盤も少し緊張しているのだと感じた。

「それは、どんなことがあっても変わらないよ。忘れないで、常盤の主は、常盤自身なんだから」

励ますように言いながら、実際は自分にもそう言い聞かせているのだと青藍は苦笑した。

だつて、本当は少し怖い。

自分が何者かを知るのが。こうして自身を突き動かしている決意さえ、もしかすれば第三者に決められたものではないかと。急いで進まないと、足が震えていることがバレてしまう。拳を固く握りしめていないと、指先が冷たくなっていく。行きたいと言い出した自分がこんなにも怯えているなんて、知られるわけにはいかなかつた。だつてそれでは一人残つてまで青藍を行かせてくれた東雲に申し訳ない。

「覚悟は、いい？」

青藍は常盤を見上げて問う。その問い合わせ、自分に向けているものに違ひなかつた。

「覚悟はとうの昔に決めている。おまえと、ここに来ると決めた時から」

優しく微笑みながらそう答える常盤に、青藍は自分の小ささを感じて少し恥ずかしくなつた。同じように覚悟がまだ出来ていないと思っていた、なんて言つたら常盤はなんと思つだらうか。

「俺は真朱のことを恨みながら、それ以上に愛していた。おまえの言つたとおりだつたんだ。憎んで、愛して、長い時を与えられ置

き去りにされたと、また憎んだ。そう思いこんでいたが、俺はやっぱりあいつと共に死ねなかつたのが悔しかつたんだ」

以前の常磐だつたら決して認められなかつたことを、常磐は今優しい表情のままで淡々と語つた。

「ずっと未消化だつたんだ。どうすることもできなかつた。俺だけでは動くことは出来なかつた。……それを救つてくれたのは、おまえだ」

その言葉に、青藍の胸に詰まつていたものがすとん、と落ちた。ずっと、どこかに感じていた真朱と自分の価値の差。それでもいいと、それでも一緒にいてくれるならと納得していたはずなのに、やはり心のどこかでひつかかっていたんだろう。

「俺はもう平氣だ。おまえの傍にいるし、支えてやる。おまえを守ると決めたから」

「……常磐は、自分のために生きていいいんだよ」

嬉しさと恥ずかしさが入りまじりながら、青藍は咳く。青藍のために、なんてそれでは真朱の時と同じになつてしまつ気がした。「俺のやりたいことが青藍のために何かをすることだ。だから、いい」

きつぱりと言い切られ、青藍は顔を真つ赤にした。先程のキスといい、このセリフといい、一体どういうつもりなんだらう、と青藍はただ戸惑うしかない。

「青藍？」

低い声が青藍の耳をくすぐり、すじく心臓に悪い。

見上げると、緑色の瞳がまつすぐに青藍を見ていた。最近は慣れきていたけれど、常磐は本当に綺麗な人だ。この世の綺麗なものを集めて一つにしたんじやないかと思うくらいに、綺麗だ。それを意識すると少し隣を歩くのが恥ずかしくなるくらいに。

そんな人が、自分を見ていてくれる。

大切だと言つてくれる。

守ると言つてくれる。

それがすぐ不思議で、信じられない。けれどそれは紛れもなく事実だった。

あの夜の出会い、どんな意味があつたんだろう。あの瞬間、飛び出してなければ。常盤の名を叫んでいなければ。いつもして共にあることはなかつただろう。

「……常盤、行こう」

きぬ、と唇を噛み締めて決意を新たにする。拳を握り締めるのは、怖いからじゃない。覚悟ができたからだ。

「どこまでも」

ついて行く、といつ優しい声には青藍をそつと包み込むようだつた。たつた一言が、こんなにも心強い。

はらはらと、じこからか白い花びらが舞つてくる。
甘い香りが、青藍と常盤を誘つよつて漂つてきていた。

風が吹くと、白い花びら畠を舞つた。花の香りが周囲に満ちている。

近づくにつれ強くなる気配と花の香りに、青藍はなぜか胸が締め付けられるようだつた。見渡す限りに続く白い花の絨毯は、それ以外の色を拒んでいるようにも見える。

風に舞いあげられた花びらは、浮力を失つと雪のよつよつむらむらと舞い落ちた。

花が、花びらが、土の色が見えないほどに咲き誇つてゐる。この空間が、花畠が、真朱そのものようだ。

「　　白い」

それ以外の色が見当たらない。

ほう、と息を零しながら花畠の中へと入つていくと、遠くに赤い光を一つ見つけた。白い肌、白い髪、違つ色を持つてゐるのはそのままだだけだ。

「よく来たな」

記憶にあるよりも、ずっと落ち着いた聲音だつた。夢のとおりだと冷静な青藍に対し常磐は怪訝そうに眉を顰めた。

「会こに来たよ、真朱」

いつもして面と向かつて話すことは初めてなのに、青藍には何の違和感もなかつた。

「現実で話すのは初めてか、我が種子」

淡く微笑む真朱の顔は、穏やかであつてどこか老成した雰囲気がある。

「…………真、朱？」

呆然とした声は、青藍のすぐ隣から聞こえた。

青藍が顔を上げてその人の横顔を見る。驚きと動搖で見開かれた緑色の瞳は、真っ直ぐに真朱を見つめていた。信じられない、とも言いたげに。

真朱はそんな常磐を見て、ふ、と微笑んだ。その顔は老婆が幼い子どもに向けるものに似ている。何も知らない子に諭すような、優しい顔だ。少なくとも常磐の記憶にある真朱は、そんな風に笑わないだろう。

「……真朱、なのか？」

疑うような常磐の声。容姿はまるで変わっていないはずなのに、疑いたくなるのは、やはり今の彼女が纏う印象があまりにも以前とかけ離れているからだろう。

「もはや、おまえの知っている真朱ではないよ。常磐」
真朱は静かにそう答えた。

「おまえが愛した私は、もういない」

それは柔らかい否定だ。真朱と会う覚悟をしていた常磐も、これは予想外だろう。

「なら、おまえは何者だ」

徐々に苛立つてきた常磐は、声を荒げる。しかし真朱は顔色ひとつ変えなかつた。

「……常磐、分かつて。彼女は真朱だよ」

耐えかねた青藍が常磐の腕を掴んでそう告げると、常磐の顔が困惑するように歪んだ。受け止めきれない現実に、動搖しているのだと青藍は気づかされる。

「……真朱なんだよ」

重ねてそう言つと、常磐もどつにか飲み込もうと、黙り込んだ。

「……どうであれ、用件は別だろう。私に会いに来たのはおまえではなく、青藍のはずだ」

ふう、と呆れたような吐息が漏れ、青藍は真朱を見た。青藍と田が合つと、につこつと微笑む。

「真朱。あなたは知つてゐんでしょう?」

意を決した青藍の声に、真朱はただ微笑んだ。

風が吹くと、お互いの間を数多の花びらが押し寄せる。視界を奪いそう今までの花びらの向こうに見る真朱は、花に溶けてしまいそうなほど儂く、まるで一瞬の幻のようだ。

「……私が、何なのか」

さらに重ねた問いは、思つた以上に小さかつた。

青藍は答えに怯えながらも、真朱から目をそらさなかつた。

さあ、と風がまた吹き抜ける。防ぐものないこの場所は、風が自由に自分の存在を主張していた。

「そうだね、青藍。おまえの存在を、私以上に知つてゐるものはいないだろ?」

さく、と真朱が足元の花を踏みつぶして青藍に歩み寄る。赤い瞳と青い瞳が真っ直ぐにぶつかり合つた。

「せい、」

二人の間に入ろうとした常磐を、青藍は無言で止めた。

真朱の白い手が青藍の頬に触れる。こうしていると、お互いに持つ色合いは真逆だが、二人はどこか似ていた。顔の造りの問題ではなく、纏う何かが、同じだつた。

「こうして存在している私だが、人の世では死んでいる。そう、魂だけのようなものだ。神々より転生を禁じられ、幽閉されている身」本来ならば、魂は転生を繰り返し何度も世に生まれてくるのだと。人であれ神であれそれは変えようのない必然だ。しかしそんな超越した話は、人の子である青藍には遠すぎるお伽話のようなものだつた。

「しかし私には神々を騙すだけの力があつた。そう、神よりも長い時を生きる存在を生みだせるほどの、な」

そう言いながら真朱はちらりと常磐を見た。

「神を超える存在。それを神々に見せつけることで、私は復讐を果

たした。すると困るのはソレをどうするか、にあつた

ソレなんて。青藍は眉間に皺を寄せた。真朱が変わったとはいえ、常盤を『自分のもの』扱いするのは変わらないのだろうか、と青藍は苛立つた。

「そんな顔をするな、青藍。私とて愛していたよ。愛し方は間違つていたかもしないが。それは そう、我が子のように、孫のように、恋人のように、夫のように…… 愛していたさ」

その言葉とは裏腹に、優しく微笑む真朱の顔に常盤への愛は感じられなかつた。

「だが私には、その愛を貫き通す意志はなかつたんだよ。信じられなかつたと言つてもいい」

「…………どつして！ だつて、常盤は……！」

常盤はあなたを愛していた。そつ告げるこは、その言葉はあまりにも重く、青藍は唇を噛み締めた。

「常盤は悪くないんだよ、青藍。私には、愛が永遠だと信じられないだけだ。神と人との間に生まれ、その愛が一瞬にして消え失せたのを知つているから」

苦笑する真朱に、青藍は何も言えなかつた。常盤はただ黙つて青藍の手を握りしめた。ぬくもりが温かい。

「 そう、だから知りたかった。永遠の愛が存在しつるのか、否か」

ぱつりと呴かれた真朱の言葉は、切なさを孕んでいた。

ふわりと風が舞う。ひどく優しい風が、青藍の頬を撫でた。

「それならば永遠の時を持つ常盤に証明してもらえばいい。しかし私が消えた後の常盤は生きた屍のようだつた。きっかけを『えなければいけなかつた

そういうながら、真朱は青藍の頬を撫でた。まるで我が子を慈しむよう』。

「だから、私は切り離した。私の中にある、常盤への感情を

え、と呟いたのは、青藍だつたのか、常磐だつたのか。
真朱は青藍を見つめたまま、穏やかに微笑んで続けた。

「青藍。おまえは、かつての真朱の恋心が長き時を経て、一つの魂となつて生まれた存在なんだよ」

「真朱の、恋心……？」

青藍の咳きは、思つた以上に響いた。

「そつ。だから今の私に常磐に対する感情は一切ない。記憶としてあるだけだ」

もとは真朱の中についたものだから、青藍と真朱が影響しあうのは当然だ。そして青藍から真朱の気配がするのも、欠片とはいえ『真朱の生まれ変わり』ならば当たり前のことだらう。

常磐と出会つた時の、あの焦がれる感覚も　真朱の想いの塊である青藍の魂が叫んだのだ。いとしい、と。

青藍は自分の胸に手を当てた。衣服の下、さらりと皮膚の下からはとくん、とくん、と生きている音が伝わってくる。

「心配する必要はない。青藍。おまえは私の欠片かもしれないが、その魂は、その思いは、すべておまえ自身のものだ。真朱ではない」「でも……」

真朱の言葉は、見事に青藍の不安を言い当てた。ふわりと翻る甘い匂いに、青藍は妙に落ち着かない気分になつた。

「どこからが自分で、どこまでが真朱なのか。そう考へることは愚かなんだろうか？」

「導かれた結果かもしれない。だが、己を離れたおまえの意志までは操れんよ」

静かにそつ告げる言葉は、すとん、と青藍の胸の中に落ちる。

「それなら、私と常磐が出会つたのは　」

「……出会いには偶然だろ？　いや、ある意味では必然かもしれないな」

真朱は苦笑しながら青藍の頬をするりと撫で、一歩後ろくと下がつた。赤い瞳が切なげに揺れていけるのを、青藍は見逃さなかつた。

「出会えば、惹かれるのは必然だつた。私の中についた常磐への想

いは、執着と言つてもいいほどに強いものだったから。そして、出会つのは私すら関与し得ない、神をも凌駕した必然」

真朱が一言発するたびに、花びらは彼女を守るよつに舞い上がり。白い花びらは青藍たちと真朱を隔てるよつに主張を強める。

「……真朱？」

訝しげに名を呴く青藍に、真朱は淡く微笑む。

「これで、良い」

満足げに微笑むその顔は、今にも消えてしまいそうだ。

青藍は真朱の手を掴もうとして手を伸ばしたが、真朱はまた一步後退る。青藍の手は届かず花びらを掴んだだけだった。

「私は、思いのほか満足しているよ。青藍。ともすれば、こうしておまえと会つて話すこともできないのではないかと思つていた。それほどに、私の残した呪いは曖昧なものだったから」

「呪いなんかじゃない！」

消えてしまったその真朱の声と対照的に、青藍の声は花煙の中で強く響いた。真朱も常磐も、驚いたように目を丸くしている。

「呪いじやない、呪いなんかじゃない、これは……これは、かつての真朱が今のあなたへ誓つた、約束だよ」

真朱の赤い瞳が、呆然と青藍を見た。

「教えたかったんでしょう？ 永遠はあるんだって。永遠にも等しい想いはあるんだって。証明したくて、証明してほしくて、常磐を使つたんでしょう？」

誰よりも愛した人を。誰よりも大切な人を。

青藍は、答えを見つけた。かつて真朱が望んだのは、自分本位なものではなくて。

「……常磐に、幸せになつて欲しかつたんでしょう？」

ずっと、ずっと。

長い長い時を生きる常磐に、永遠ともいえる愛を与えることで。

永遠の支えを与えることで。

それは、真朱の常磐に対する贖罪だったのかもしれない。
真朱は微笑んだ。それは幸せそうに、まるで咲き乱れる白い花の
ように、微笑んだ。

「……永遠なんて、ないと思っていた。おまえは真朱ではないのだから。たとえおまえたちが結ばれても、永遠の証明にはならない」
望んでいたものを否定しながら、真朱は「それでいい」と笑う。
「しかし常磐は歩き出した。青藍は居場所を見つけた。おまえたちの物語は、これから続していくんだろう。私はもう必要ない」

「……真朱？」

unnecessary、と呟いた瞬間から、また花びらが吹きあがる。
白い白い世界が、まるで真朱を包み込むように。

「もう、答えは見つけただろう？」 青藍

一步、また一步と青藍たちから距離を置いて、真朱は笑う。

「おまえの存在が何か、私は答えた。おまえは知りたかったことを
知り得たはずだ」

まるで青藍たちを拒むように真朱は離れていく。その行動に、青
藍は妙な胸騒ぎを感じた。

「私は、見廻けるために存在し続けた。私の役目はここで終える」

「真朱、おまえまさか？」

常磐が慌てた様子で真朱を見た。まるで、かつての真朱が常磐を
置いて逝ってしまったときと同じような、そんな気配がした。

「真朱！」

常磐が叫ぶと、それに呼応するように花が吹き乱れた。

「私と青藍の対面によって、私は解放される。転生のない永久の牢
獄からも、死と呼べぬ死からも」

「何を、」

言つて居る、という青藍の呟きはあまりにも小さく、吹き荒れ

る風の音に遮られた。

「そういう仕組みになつていたんだよ、初めから」

そう微笑んだ途端、真朱の上体がぐらりと揺れた。白い髪がふわりと広がる。ゆっくりゆっくりと、地面に吸い込まれるように倒れていく。

それは、ひどく長い一瞬だった。

「真、朱……？」

青藍の呆然とした声と、ぞぞりと真朱が花に埋もれる瞬間は、ほぼ同時だった。

あれほど騒がしかった花の嵐が、ぴたりと止んだ。舞い上がりついた無数の花びらは、力を失つたように地に落ちていく。無音になつた世界で、真朱は花びらに埋もれ横たわつている。

「真朱！」

青藍が真朱に駆け寄ろゝとした瞬間、まるで触れられることを拒むように突風が吹いた。あまりにも強い風に、青藍は思わず目を瞑つた。後ろから青藍を呼ぶ声が聞こえて、慌てたように常磐が青藍の身体を支えるように抱きしめた。

「真朱　　！」

青藍の叫び声が風の中に強く響き、まるで嘘のように突風が止んだ時。

あれほど真っ白だった花が、赤く染まつていった。

花びらの一枚一枚まで、初めから赤だったと主張するよつて。一面の白が、一瞬にして赤へと変わつた。

まるで、主の死に殉じるよつて。

何が起こうしたのか、分からなかつた。
白い花はひとつ残らず赤に染まり、真朱は眠るように横たわっている。

「……終わったんだな」

青藍を支えていた常磐はそう咳き、ゆっくりと真朱へ歩み寄つた。先程のような突風は起こらず、常磐は難なく真朱の傍らで跪く。穏やかとしか言いようのない真朱の顔を見て、常磐は複雑そうな顔をした。

「永遠の愛とか、転生とか、そんなものよりもずっと……」といつは、ただ早く休みたかったんだろう

真朱の頬を優しく撫でて、常磐は咳いた。

何度も何度も、壊れ物に触れるように頬を撫でる。その甲斐とても穏やかだつた。青藍はすぐに受け止めることが出来ず、ただ立ち尽くしていた。純白の世界は、一瞬にして変わつた。足元の赤が、死そのものにしか思えなかつた。

「帰ろう、青藍」

常磐がそう言いだしたのは、どれくらいの時が経つてからだろうか。呆然とする青藍の手を取り、常磐は眠る真朱に背を向けた。

「これから、どうなるの」

何を言えばいいのか分からず、青藍は咳いた。それは常磐への問い合わせもなく、まして自分に向けたものでもなかつた。簡単に言えば、青藍はその後のことなんて考えていないかったのだ。

「何も変わらないだろう。俺は真朱の力とは別の存在のようだし、おまえもただ今までと変わらず生きていくだけだ」

常磐がはつきりと告げると、それもそうだな、と青藍は納得した。

劇的な変化なんて何もない。

常磐の手を握りながら、青藍は天の空を見上げた。地上の空とは色が違う。早く懐かしい地上へと戻りたくなった。この手のひらのぬくもりと共に。

真朱は、常磐の幸せを望んでいた。

それと同時に、己の終わりを望んでいた。

その両方を得て、満足そうに眠りについた。ある意味で、青藍と
いう真朱の欠片は、死への引き金だったんだろう。
でも青藍がその死を背負うことはしない。それはおそらく真朱の
望むことではないだろうから。真朱は自ら引き金を引いたつもりだ
ったんだろうから。

ただひとつ。

真朱へと感じていた『何か』が、ぱつたりと静まり返ってしまつ
たことだけが、ひどく切なかつた。

それからは、瞬く間に過ぎ去つていった。

真朱の死は天上の神々も知ることとなり、脅威が去つたことにむ
しろ神々は喜んでいるような風だった。青藍の存在がただの真朱の
生まれ変わり しかも真朱の欠片ほどの存在だと分かると、手の
ひらを返したように地上へと送りだされた。解放された東雲は、苦
笑していた。

そして帰り道の途中で、真朱の最期を聞いてきた。『穏やかだっ
た』と常磐が短く答えると、ほっとしたように『そつか』と答えた。
東雲も真朱のことを気遣っていた一人だつたんだな、と青藍は実感
した。

来た時と同じように目隠しをされた。天上の神々との関わりを断てる今、不用意に地上以外の場所を知らない方が幸せだらうという東雲の配慮だ。常磐がずっと青藍の手を握っていたから、やはりあまり怖くはなかった。

「青藍っ！　おかえり！」

屋敷に着くとすぐに山吹が駆けつけてきた。

飛び込むようにやつてきた山吹の抱擁を受け止めつつ、青藍は「ただいま」と笑った。山吹の声を聞いた途端に帰ってきたという実感が湧いてくる。

「でも、そんなに留守にしなくて済んで良かった」
天上へと行っていたのは一ヶ月程度だ。青藍はその間飲み食いもしていなかつたから。

「何言つてるの？　青藍は一ヶ月もいなかつたじやないか」「え？　だつて……」

山吹のセリフに、青藍は目を丸くした。そして困つたように東雲を見上げる。

「時間の流れが違うんだ。一日くらいにしか感じていらないだらうが、地上ではそれだけの時間が経つていたということだらう」

東雲は苦笑しながら説明してくれる。そんなものか、と青藍はとりあえず納得するしかなかつた。

家中に入つてみれば、嫌でも一ヶ月の時間が経つたのだと分かつた。山吹も掃除していくれたらようだが、広い屋敷の中行きどかないところはどうしてもある。あちこちに溜まつた埃が見えた。

まずは掃除か、と苦笑しながら袖をまくる。

休めばいいのに、と苦笑する東雲や常磐に、「大丈夫」と言い聞かせつつ青藍は掃除に取り掛かつた。

そうしていつも通りの日常を過ぐしていくと、ゆっくりゆっくり

と現実を受け止めていける。

真朱は、本当に自分勝手だ。

望むものを手に入れて、あんなに幸せそうに死んでしまうなんて。箒を手に、青藍は立ち止まつた。空を見上げると、懐かしい色をしている。薄い青はどこまでも広がつていて、風が運んでくる香りは人の生活を感じさせた。庭の花は相変わらず美しく咲き誇つている。

何も変わらない。青藍はこうして生きている。

ただ、己の半分がぽつかりと空いてしまつたような気分になるだけだ。以前は嫌っていた真朱を、今は少し恋しく思う。

これで良い、と呟いた真朱も。終わつたんだと言つた常磐も。青藍には計り知れないほどどの時を生きてきた。だからこそこの結末なんだろう。

心は穏やかだつた。青藍はまた足元へ視線を戻して吐き掃除を始める。一ヶ月の不在で溜まつた汚れはなかなかに頑固だ。

「ほどほどにしておけよ」

真剣に掃除に取り組んでいると、常磐が呆れたように声をかけた。振り返ると、常磐はふ、と笑う。

「……納得できないつて、顔してん」

常磐は青藍の傍までやつて来て、箒を取り上げる。顔に出ているのは自覚していたので、正直見られたくなかった。常磐は苦笑しながら青藍の手を引き、手ごろなところに座つた。

「真朱は、疲れてたんだろう。長い時の中、孤独であることが」だから、これで良かつたんだよ、と常磐は青藍の頭を撫でる。

「……常磐も、疲れた？ 死にたいって、思つ？」

長い時、と言われて青藍はどきつとした。これから真朱以上の時を生きていく彼は、死にたいと、願うのだろうか。願われた時、青藍はどうすればいいのだろうと。

「俺は、孤独ではないから」

青藍の心配をよそに、常磐は穏やかに微笑んだ。青藍の手を握り

しめて。まるで隣にいると伝えるように。青藍は胸が熱くなつて、常磐の肩にもたれた。同じように、手のひらからだけではなく、こうして自分のぬくもりが伝わればいいと思って。

「一人にしないよ。私がずっと傍にいる」

ぬくもりだけでなく、言葉でも。伝える方法が他にあるといつ のなら、いくらでもこの人に伝えたかった。ずっとずっと、長い間 一人ぼっちだつたこの人に。

「おばあちゃんになつても、傍にいる。常磐が要らないって言つても、傍にいる。覚悟してね。私しつこいから」

そう宣言すると、常磐は「怖いな」と笑つた。

常磐の肩にもたれたまま、青藍はぽつぽつと語つた。

今日の夕飯は少しだけ贅沢しよう。そして明日になつたら下の町まで買い物に行こう。あとは掃除の続きをして、それから庭でお茶をするのもいいかもしれない。生活が落ち着いたら、二人で遠くに行つてみよう。前に話していた暑い国でもいいかもしれない。世界のいろんなところを見に行ひ。そんな未来の話をするのは、とても楽しかつた。

「ね、常磐。……常磐? 寝ちゃつたの?」

相槌を求めるが、隣に座る常磐はとても静かだった。思えば自分がかりが話していたな、と青藍は苦笑する。

大好きだよ、と耳元で囁いた。起きている時に言つのは少しだけ恥ずかしいから。

大好きだよ、ずっとずっと、大好きだよ。
ねえ、常磐。私は何度生まれ変わっても、あなたに恋するよ。だ
つて私の魂はあなたを忘れないから。

真朱。

永遠はないと、そつとたけれど。永遠の愛の証明にはならない
と、言つていただけど。

この恋は終わらない。私が終わらせない。

何度も死んでも、何度も生まれ変わっても、私達は巡り合つて、何度も
恋に落ちる。

そう、それは 約束された、永遠に続く恋物語。

40・永遠に続く恋物語（4）（後書き）

これにて「朱の誓い、青の願い」完結となります。
長い間お付き合いくださいました皆様、ありがとうございました。

青藍と常盤の物語をつづるのはこれで終わりです。でも、一人の恋
はこれからずっとずっと続いて行くんでしょう。それが、この物語
の結論です。

最後までお付き合いくださいありがとうございました。
また別の物語でお会いできれば幸いです。
あなたに最大の感謝をこめて。

青柳朔

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9360e/>

朱の誓い、青の願い

2011年4月10日00時55分発行